



まほろば天女!

マジキュー!

原案：みずき☆とも  
小説：加藤 義博  
ロゴデザイン：戸田 聡

ギャァ、ギャァとカラスがけたたましい鳴き声をあげて飛び立ったのは、夕闇が迫り薄暗くなった杉木立の中。

雪解け水でぬかるんだ林の中を、この現代日本に似つかわしくない、まるで中世ヨーロッパの魔法使いのようなローブに身を包み、フードを目深にかぶった猫背の男がひとり杖を突いて歩いていた。

「この辺にするか・・・」

男はそうつぶやくと、杖で地面をつつく。すると杖を中心にマンホールほどの大きさの地面がまるで沼のようにどろりと変化した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は何か呪文をとなえながら、杖で沼と化した地面をこおろこおろとかき回し始めた。すると、沼の中から鈍く紫色の光が放たれ始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男のとなえる呪文が次第に大きくなりはじめる、それにあわせて沼から放たれる光も次第に強くなっていく。

男はローブの袖から直径一センチほどの珠をつまみ出した。そうしてその珠を光を放つ沼の中へと落とす。

珠が沼に落ちると同時に沼からの光がより強く放たれた。

沼は次第に泡立ち始め、波が立ち、ついには隆起した。

高さはおおよそ二メートル五十、その形はまるで出来損ないの泥人形のものであったが、おおよそ自然界には存在しないような毒々しげな紫色を呈していた。

荒々しく荒れていた肌が、次第に滑らかになっていったかと思うと、頭部と思しき器官に半月状のつりあがった真っ赤な目が開く。

そうしてソレは、丸太のような腕を高々とあげると目と同様に真っ赤な口を開き、

「ダデー——ナー——————ツツツ」

と、大きく叫んだ。

ローブの男はその姿を見ると小さく笑いを漏らした。

「くくく、いいぞお、これでわれらの悲願がかなう。この町の住民たちを、恐怖のどん底に突き落としてやれるのだ！ふふふふふ・・・・・・・・・・はあーっはっはっはあー————っ」

男の笑いは、いつしか哄笑へと変わり、うす暗い杉木立の中に響き渡っていた。

桜の花が舞い散る中の入学式なんてテレビやマンガの中だけの話だ。

日差しこそ穏やかになったものの、自転車をこぐと風が頬に冷たい。

遠く吾妻の山の頂に残る雪を眺めながら、わたし、冬咲ぼたんは中学校へ向かって自転車を走らせていた。

ここは山形県東置賜郡高畠町。山形県の南東部に位置する人口約2万5千人の町だ。一応新幹線も止まるし、町としてはそれなりに規模かもしれないが、刺激に乏しい退屈ないなか町だ。

最近珍しく起きた事件のようなものといえば駅においてある赤鬼と青鬼のオブジェが突如消えてしまったことぐらいだ。何者かによる窃盗と見られている。

この町出身の童話作家 浜田廣介の代表作品「泣いた赤おに」をモチーフに十数年前の中学生が作ったものらしいがあんな2メートルを超えるような張りぼてをいったい誰が？何のために？まったくわけがわからない。

この町もごたぶんにもれず少子化で、今年度から町内4つの中学校が統合されることになった。

ほかの学区の生徒たちと一緒にするのは少し不安、でも今までの古い校舎から新築の新しい校舎になるのはうれしい。だって新しいものに触れるとなんだか進んだところにいるような気がするじゃない。

校庭の周りに張りめぐらされた緑色の金網が見えてくる。その中に移植されたばかりの桜の木が頼りなげに風に揺れている。

校舎へと向かう自転車の数が増えてきた。女子は紺のブレザーに男子は詰襟の学生服、制服はほとんど代わり映えしないが、見知った顔もいれば初めて見る顔もある。

いよいよ新しい学校なんだなあと感じながら校門をくぐった。

ま新しい校舎は鉄筋コンクリート二階建て、特にこったような特別な意匠は無い。

二年生の教室は二階にあるようだ。リノリウム張りの階段を上がっていく。ベコベコしてない、ただそれだけでうれしい。

事前に配られたプリントによればわたしは二年三組の出席番号29番。

教室に入ってイスを引くと突然誰かが

「ぼちっとなー」

と、髪でしっかりと隠したはずの、襟足にあるほくろを寸分の狂いも無く人差し指でつく。

ぼたんと言う名前と絡めて、中学校にあがるまでさんざっぱら繰り返されてきたコノいたずらに思わず「ひやっ」と首をすくめる。

しかし、ほぼ一年ぶりの今日のそれにおどろきこそすれまったく不快感は無かった。

なぜならその声。

振り返ると予感的中。

そこには、さくらんぼのように真っ赤なボンボンつきのゴムで髪を頭の両サイドでかわいらしく結わえた、少し小柄な女の子が立っていた。

「ちーよーちーん」

「もー、千代ちゃんはやめてっていつてるのにー」

千代ちゃんは唇を尖らせた。

でもそんなこというなら「ぼちっとな」もやめてよね。

この娘の名前は竹田千代、お母さん同士が姉妹、つまりわたしのいとこだ。

お父さんの仕事の都合で転勤、それもうらやましいことに都会暮らしが長かったそうだ。

今年からここ高畠で暮らすことになったと聞いていたが、

「まさか同じクラスだとはねー」

「ねー」

千代ちゃんにはっこり微笑んだ。

「でも、すごくほっとしてるの。だって新しいお友達作るの心配だったから。ね、誰か知り合いの娘いない？」

言われてわたしは教室をぐるりと見渡した。

すると、教室の後ろのほうで男子がなにやら言い争う姿が目に入る。

「なにガンくれてんだ！ゴルァ」

「ああん、おめえどこ中よ」

丸刈りが数人、おそらく野球部だなありゃ。

さっそくサル山のボス争いが始まったようだ。

「やーよねー、男子って」

「ねえ、都会の男子もあんな感じなの？」

わたしが千代ちゃんにそうたずねた瞬間、教室の引き戸が威勢よく開いた。



教室中の視線が入り口に集まる。

そこに現れた詰襟には首が無かった。いや、首から上が引き戸の上に来るぐらい彼の身長が大きかったのだ。

しん、と静まり返った教室。

視線が集中する中、彼はゆっくりと身をかがめながら教室に入ってきた。

やや赤みがかり荒々しく逆立った髪の毛、頬には大きな傷跡。規格が間に合わないため、七分そでの短ランのようになってしまっている詰襟。

前のボタンはとめられず、真っ赤なTシャツが見えている。

彼はおもむろに坊主頭の一団に近づくと、腰をかがめ手に持っているプリントを見せ指をさす。先ほどまで威勢のよかった坊主頭の一団は一言も発せず、ゆっくりと震える指先で廊下側の前から3番目の席を指さす。

巨漢の彼は立ち上がり、入り口を見やると指で合図を送る。

するとそこには彼ほどではないが背の高いメガネの男子が立っていた。

彼は猫背でやや天パの入った髪が肩まで伸びている。神経質そうな面立ちで、偏見を承知で言わせてもらおうとオタクっぽい容姿だ。

オタクっぽい彼は廊下側の一番前の席、巨漢の彼は三番めの席に座った。

巨漢の彼が席に座る姿はまるで幼稚園のPTAに参加する父兄が園児のイスに座らされているようだった。

いつしか彼らの周りには誰も立ち入れないような空間ができていた。もちろんわたしも千代ちゃんもその空間には立ち入れない。

「・・・青木君と赤木君って言うみたいよ・・・」

「・・・なんだか、近寄りがたいよね・・・」

黒板に書き出してある席次表を指差して誰かがつぶやいた。

出席番号2番の青柳君とは同じ中学だった。

教室を見回してみると、気の弱い彼は案の定すみの方で青い顔をしていた。

## 2

「文殊様、今日から新しい学校生活がスタートしました。がんばって勉強しますので、いい高校に入って、いい大学に進学できて憧れの雑誌編集者になれますように・・・」

賽銭箱にふんばつして五十円を入れた。

放課後、学校帰りに亀岡文殊へよってみたのだ。

亀岡文殊堂は平安時代、九世紀のはじめごろに建てられたお寺で、学問の神様を祀っている。日本三文殊のひとつに数えられるそうだ。

学問の神様にあやかって、かどうかは定かではないが、新しい中学校はこの近くに建てられたのでせっかくだからと足を伸ばしてみたのだ。

毎年正月には合格祈願の参拝客で2キロ四方の道路で大渋滞を起こすこのお寺も、受験シーズンも終わって、年度初めの平日の夕方、観光客の姿はまるで無い。

長い石段の上、太くて高い杉の木立に囲まれた亀岡文殊堂はいまだ雪囲いの板で囲われていた。林の中の日のあたらないところにはまだ溶けきらない雪が見える。

と、しんと静まりかえってしかるべき文殊堂の林の中に、似つかわしくない音がズシーンズシーンと響いてきた。どうやらお堂の裏手のほうからその音は聞こえてくるようだ。

工事でもしてるのかな？と、私は好奇心に駆られて音のする方へと歩いていった。

異臭がした。

次に、信じられないような光景が目飛び込んできた。

木立の奥に見えたのは、高さ3メートルはあろうかという毒々しげな紫色をした有機質の円錐形の物体であった。

下から八分目ほどのところから生えた丸太のように太い腕のような器官でしきりに地面をたたいている。

その紫色の物体が叩いているあたりを緑色の小動物のようなものがちょろちょろしていた。耳がたれ、もこもことした体毛におおわれたそれは座敷犬のように見えた。

座敷犬は、紫の周りを駆け回りながらしきりにほえたり跳びかかったりを繰り返していた。そうするうちに紫の円錐形をした物体はグニャグニャと体を波打たせながらわたしの方へと向きを変えた。

「ひいっ」

とわたしは息を飲む。

円錐形の頂上部分には半月上に見開かれた、つりあがった赤い目のような器官と、ぎざぎざの牙を模した口のような器官がついていた。

「!？」

わたしの声に反応したのか緑色をした座敷犬が動きを止めてこちらを振り向く。

紫の円錐形はそのスキを見逃さなかった。化け物は丸太のような腕をすくい上げるように座敷犬に向かって振りぬいた。

座敷犬は放物線を描いてこちらへと向かって飛んできて、

すぽん

と、わたしの腕の中におさまってしまった。

座敷犬はぐったりとした様子で頭をたれている。

打ち身や擦り傷などでひどく怪我をしているようだ。

ちょっと待って、この子がこっちに飛んできたってことは・・・

わたしは視線をチラッと上に移す。

最悪だ、化け物と目が合ってしまった。

紫の化け物はゆっくりとおぞましく体を波打たせながらこちらへ向かって向きを変える。

その間わたしはヘビににらまれたカエルのように身動きひとつ取れずにその動きを見つめていることしかできなかった。

化け物の動きが止まる。

腕をゆっくりと持ち上げながら、化け物は真っ赤で大きな口をさらに大きく開く。

「だぁ—————でえ—————なぁ—————」

化け物がそう叫んだと同時にわたしも我にかえる。

あわててスカートをはるがえし駆け出した。

お堂の横を走り抜け、広い境内を突っ切って、石段の前まで出て後ろを振り返る。

化け物は見えない。

午後の日差しの下に出ると今までのことが白昼夢の中のことのようにである。

しかし、ズシン、ズシンと規則正しく響いてくる振動が、先ほどまでのことが現実であることを物語っている。

お堂の影から化け物が顔を出す。見知った建物と比較すると、その大きさのリアリティが笑っちゃうほどよく伝わってくる。

「なんなのよ、なんなのよ、なんなのよもー」

突きつけられた現実から逃げ出すために、わたしは階段をかけおりた。

先ほど見た感じでは化け物は円錐の形状から足を二本、短いながらも生やしたようだ。

短足で腕が長い、まるでゴリラのように変体した化け物の足が遅いのが救いだ。

わたしは何度もすべって転びそうになりながら全速力で階段を駆け下りる。犬を抱いてるから両方の腕が使えないが、それでも転ばないバランス感覚は我ながら感心する。

しかし悲しいかな運動不足、売店にたどり着くころには下りとはいえ横っ腹が痛くなる。

だめ、もう走れない。

人のいるであろう場所にたどり着いた安心感もあって急に足が重くなる。

あそこに、あそこにさえ逃げ込めば助けてもらえる。という希望はベージュ色のシャッターによって打ち砕かれた。

「だで—————な—————」

化け物の声が近づいてくる。とにかくかくれなきゃ。わたしは売店のうらへと回ると体を丸めてぎゅっと目をつぶった。





「・・・だでーなあー・・・」

化け物の声が小さくなっていく。

「どうやら行ったみたいね………ったく、なんなのよもー」

わたしは顔を上げ、ずり落ちてきたメガネをなおすと化け物の行ったであろう方を向いた。

木立にかくれてよく見えないが声からするとだいぶ下へと行ったようだ。

腕の中でもぞもぞという感触がする。あの緑の犬が目を覚ましたようだ。

犬は腕の中から這い出そうと手足をばたつかせたり突っ張ったりする。

「だめよ、あなたケガしてるじゃない」

わたしは犬をしっかりと抱きしめた。

「……でも、ぼくはこの町を守るためにあいつを倒さなきゃならないッハー」

え？

誰かの声がした。この場にいるのはわたしだけのはず。

なんだか怖くなって犬を抱く腕に力をこめた。

「いたい！いたい！いたいッハー！」

犬が手足をばたつかせながらそうさげんだ。

犬がさげぶ？

いやどう考えても声の出どころはここしか考えられない。

わたしは恐る恐る視線を下にうつす。

「いい加減に放すッハー」

犬はそういうながらも手足をばたつかせる。

わたしは気味が悪くなって犬をほおり投げた。

突然体を宙に投げ出された犬は受身をとれずに顔から地面に落ちる。

「つつつ、ひどいことするッハー」

犬はうらめしげな声を上げるとこちらを振り返る。でもこっちはそれどころじゃない。

だって、

「い、犬がしゃべった……」

んだもの……

「僕は犬なんかじゃないッハー。文殊菩薩様の使いで、この高畠町を守る守護聖獣、唐獅子のシンハだッハー」

わたしの声を聞いて犬が少しむっとした顔をしていった。

「しゅご……せいじゅ……え？唐獅子……？」

「高畠を守る守護聖獣のシンハだッハー！そんなことよりあの化け物が町に悪さをする前に何とかしなきゃならないッハー」

とまどうわたしに再度名乗ったシンハは、ぐるりと振り向いてふもとのほうへと駆け出そうとするが何歩も歩き出さないうちに地面へと突っ伏した。

「ちょ、だいじょぶ？」

犬（の様な動物）がしゃべる姿はなんだか気持ち悪いけど、こうもボロボロだとなんだか心配だ。声をかけずにはいられなくなる。

シンハはゆっくりとわたしの方を振り向くと震える声でこういった。

「君の力を貸して欲しいッハー」

「わたしの、力・・・」

わたしは思わず聞き返した。

「そうだッハ、天女ラクシュミーに変身してあいつと戦って欲しいッハー」

「・・・・・・・・」

シンハの言った事が何一つ理解できない。きっとわたしはそんな顔をしていたのだろう。

シンハはあわてて説明をはじめた。

「僕がこの町を守るようになったのは今から千二百年前くらいだッハ、でも僕一人の力だけじゃなかなか思うようにこの町を守りきれなかったんだッハー」

シンハはなおも言葉を続けた。

「そのとき手伝ってもらった女の子がラクシュミーだッハ。ラクシュミーに変身すると驚異的な身体能力と、明晰な頭脳、そしてたぐいまれなる美貌が手に入るッハ。どうやら君にはその素質があるみたいだッハー」

「素質っていったって、そんな絶対無理無理ムリムリ！」

わたしは全身で拒絶を表現する。驚異的な身体能力っていったって、たぐいまれなる美貌っていったって、明晰なずの・・・明晰な頭脳・・・明晰な頭脳！

「・・・ねえ、シンハ・・・くん」

「ど、どうしたッハいきなり」

シンハは突如変わったわたしの声のトーンに戸惑いを見せた。

「明晰な頭脳ってことは、そのらく・・・らく・・・」

「天女ラクシュミーだッハ」

「そう、そのラクシュミになれば、勉強ができるようになるのかしらん」

正直わたしはそれほど勉強ができるわけではない。とはいえ中の上くらいの成績はとれてると思う。

家族からは成績の面でいろいろ言われることはない。しかしながら、希望する進学校に入って、なるべくお金のかからない国公立の大学となるとまだまだ努力が必要みたいだ。

人並み以上に机に向かっている時間はあると思う。去年の夏からメガネをしなければならなくなったほどだ。でもなぜか結果が付いてこないのだ。

「中学生の勉強なんてじよさ無くできるッハー、高畠を救えるのは君以外にいないッハー」

シンハは興奮気味にそう答えた。しかし答える前の一瞬、半ばあきれた表情をしたのをわたしは見逃さなかった。

「勝算はあるの」

「いうとおりに戦ってくれば楽勝だッハー」

よーし、これでわたしの夢がかなうなら、ちょっとの危険なんてへでもないわ。

「どうすればいいの？」

「これを使って変身するッハ」

シンハは首から器用に宝石のようなものを取り外すと、わたしに渡した。

「なに、これ？」

ちょっとつぶれた水滴型、わかりやすくとえるなら某有名RPGのスライムみたいな形をした

透き通った玉だ。

「それは変身アイテムのチンターマニだッハ、それを高くかかげてオン・チンターマニ・ソワカとさけぶッハ」

「よーし、オン・チンター．．．．．って、どさくさにまぎれて女の子になんてこと言わそうとしてるのよ！この、セクハライオン！」

その気になって意気揚々と腕をかかげるが、途中ではっと気がついた。

「な、何をいうッハ！この状況でそんなこと思いつくほうがどうかしてるッハ」

シンハがあわてて言い返す。

「チンターマニは如意宝珠、願いをかなえる宝石っていう意味だッハ。このチンターマニにはこの高島町を守りたいっていう僕の願いがこめられているッハ。お願いだッハ、その真言を唱えてラクシュミに変身して欲しいッハ」

シンハは真剣な目をしてわたしを見つめる。

「でも．．．」

その「ことば」には．．．抵抗がある。

「大丈夫だッハ、誰もいないし僕しか聞いてないッハ」

ちつきしょう。何プレイだよコレ。

わたしは意を決して、チ．．．如意宝珠を高く掲げる。

「オ、オン・チ．．．．．オン・チンターマニ・ソワカ！」

目をつぶりその言葉を発すると、わたしは開放感に包まれた。

如意宝珠を持ったその手から暖かさが伝わり全身にひろがっていく。まるで温泉に入っているような心地よさだ。

つぶっていた目を開くとわたしは金色に輝く空間の中に一糸まとわぬ姿で浮かんでいた。

不思議なことに恥ずかしいとかそういった感情はまったく感じない。

メガネをつけていないのにはっきり物が見える。

どこからか、ピンクとも紫ともつかない色のもやのようなものがただよって来て体にまとわりついてくる。

体にまとわりつき密度を高めたもやは一瞬強い光を放つとひらひらのゆったりとした衣装に変わる。

からだ、あし、うで、あたま。衣装が次々体中をおおっていく。

不意に金色に輝いている空間に天頂からさらに強い光が差す。まるでそこからこの空間が裂けてしまうように。

わたしは強い光に再び目をつぶった。

気がつくとき、わたしは再び元の亀岡文殊堂、伊藤売店の裏に立っていた。

シンハが尻尾を振ってうれしそうにわたしを見つめている。

「ラクシュミー、誕生だッハ！」

4

「こ、コレが、ラクシュミー．．．」

両手を顔の前に広げる。

手首に巻かれたひらひらのついたリストバンドから、視線を下にやると胸元にちょうちょうを模したような大きなリボンがついている。

着物のように腰帯で止められた上着はそでがついていないので動きやすそうだ。さらに視線を下にやると着物が太ももの辺りでスカート状にふんわりと別れている。あわてて確認したらスパッツのような下着をはいているようだ。

足元はブーツ、そして特徴的なのが羽衣のように背中についている大きなリボンだ。

くるくると回って衣装を確認していると頭が重い、その上ピンク色の髪束のようなものがチラチラと目に入ってくる。まさかと思って頭をまさぐる。地毛だ。それもずいぶんと伸びたみたい。腰の辺りまであるようだ。

自転車に戻り通学かばんをつかむと中からかがみを引っ張り出す。

何度も何度も失敗して、どうしてもできなかったわたしの理想のお化粧。そこには、まさに理想どおりに仕上がった顔がかわいらしくうつっていた。

「衣装は気に入ってくれたッハ？」

「ちょ、ちょっとこどもっぽいかしら」

「そんなコト言って、顔がにやけてるッハ」

う・・・シンハは一言余計な性格のようだ。

「そ、そんなことよりさっきのやつ」

「そうだッハー、すぐに追いかけるッハー」

わたしが照れ隠しにそういうと、シンハはあわててふもとのほうを見た。

先ほどの紫の化け物はわたしとシンハのやり取りの間にずいぶんと先へと進んでしまったようだ。

まって、このまま行ったら学校の方に行っちゃう。もし新しい学校が壊されちゃったら・・・ダメ、そんなの絶対いや、もう古い学校になんて戻りたくない。

わたしは思いっきり大地をけて駆け出した・・・

と、思ったら、なぜか空の上にいる。

眼下に広がるのはわずかに雪の残る田んぼとぶどうのハウス。

高さの目算なんてまるっきり見当がつかないけど、滝商店の前に止まっている軽トラックがコンビニで売ってた缶コーヒーのおまけのミニカーくらいに小さく見えた。

じょじょに浮遊感がうすれてくる。

そして、垂直落下が始まる。

「いやああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

見る見る地面が近づいてくる。

死ぬ！ 死ぬ！ 死んじゃう！

わたしは必死で体をひねる。

「—————っ」

がに股の恥ずかしい格好で、何とか両足で地面をとらえることには成功するが、足の裏からしびれるような痛みが頭の先まで何度も何度も往復する。

「なによこれ、力の加減がぜんっぜんわかんない」

シンハがよろよろと近寄ってくる。

「気を付けるッハー、今の君は普通の人何百倍もの力を持っているッハー」

「そういうことは早く言ってよ！」

「言ったッハ！驚異的な身体能力が備わるって！」

驚異的にも限度があるでしょ・・・

足のしびれがいえると、少しずつ足を運んでみる。

歩く速度から早足、そして走る動きに。

少しずつ動きを早くすれば何とかコントロールできる。

何よりスピードが段違いに速い、まるで自動車の窓から顔を出しているかのような、そんな感触を頬に感じる。

ぐん、ぐん、ぐんと地面を蹴るたび加速していく感じもまた楽しい。

中学校が見えてきた、中から男女問わず悲鳴が聞こえてくる。間に合わなかったか！

校門の手前でフルブレーキ、砂埃を立てながら5メートルほどすべる。

少し戻って校門から校庭を見渡す。

化け物はまだ校舎にも生徒にも手を出していない様子だ。

間に合った、よーし、後はシンハの言うとおりに戦えば！

「シンハ！どうすればいい！指示をちょうだい！」

わたしは後ろを振り返る。しかしそこにはシンハの姿は無い。

そういえばよろよろしてて、さっきはまともに歩けなかったような・・・

やっちゃった・・・置いてきた・・・

顔からさぁっと血の気が引くのが自分でもわかる。

そうこうしているうちに化け物が校舎へと向きをかえる。そして両腕を組み高く掲げた。

まさか、校舎を壊す気じゃ、止めなきゃ、でも、一人でなんて・・・

化け物が間合いを計り、もう一步校舎へと足を踏み出す。

「やめて—————っ」

わたしの絶叫に化け物も、そして逃げ出している学校のみみんなもいっせいにこっちを向いた。

集中する視線に頭が真っ白になった。

「ほがなごどしたら、せっかく出だばっかのガッコぼっこれんべしたー」

(訳：そんなことしたらせっかく出来たばかりの学校が壊れちゃうじゃない)

普段は努めてしゃべらないようにしている方言が飛び出るぐらいパニックだったと思う。

たぶん涙目だ。

こうなったらやるしかない。意を決してわたしは化け物めがけて突っ込んだ。

一気に間合いが詰まる。わたしは右手を大きく振りか、ぶっ！

またも力加減をあやまり顔面から化け物の胸あたりへと体当たりしてしまう。

しかしながら体当たりが功を奏して化け物は大きくかたむき、そして倒れる。

相当の重量があるのだろうか地響きが起きる。

どっ、とギャラリーから歓声が上がった。

・・・いける。

力加減はまだまだつかみきれないけど、  
地に足つけて殴り続ければなんとかかなるんじゃないかしら。  
わたしは立ち上がると化け物に対して半身になって向き合い、こぶしを胸の前で構える。  
化け物はうでを突っ張り必死に立ち上がろうともがいている。  
わたしはまた突っ込んでしまわないように、すり足で化け物に近づくと、まだ低い位置にある頭をめがけて渾身の右ストレートを叩き込む。  
化け物の頭がぐにやりとへしゃげる。そして再び化け物は地面に倒れ付してしまう。  
反撃に備えて再度構えをとる。  
しかし化け物はひとみと口を閉じピクリとも動かなくなった。  
「やっつけた・・・のかしら？」  
そう思った瞬間、化け物の足の辺りから2本のムチのような器官が現れわたしの足に絡みついた。  
そのムチに足をとられわたしは転倒してしまう。  
次の攻撃に備えなきゃ、そう思って化け物を見る。  
すると、腰の辺りに真っ赤な目が開いたかと思うと一気に隆起し、両の腕を高く持ち上げた体勢へと変化した。  
「こんなのあり？」  
思わず声が出る。  
化け物の口が開き、にやりと笑う。  
はずみをつけるために体をのけぞらせる。  
やばい、やられる！  
そのときだった、化け物が突然「く」の字に折れ曲がる。  
逆光でよく見えないが、誰かが両方のひざでぶつかって行ったような・・・  
化け物は再びどうと倒れ伏す。  
しめた、今のショックで足が自由になった。  
そのとき、わたしの前に大きな手が差し伸べられる。  
みあげると、誰か大柄な男の人のようだ。  
顔には覆面をしており逆光も合わせてよく表情が見えない。  
ともあれ  
「ありがとう」  
とお礼を言って微笑むと、わたしはその手をとって立ち上がる。  
すると彼はすぐにくるりと後ろを向いて、跳びあがったかと思うとその場から姿を消してしまった。  
「あのひとは・・・」  
姿を消してしまった彼を探すためあたりに視線を走らせる。しかし彼の姿は見つけれない。  
そのうちに、みたび化け物の体がごもごもと隆起を始める気配がした。  
「ラクシュミー」  
どこかで聞いたような声でした。  
「ラクシュミー」

シンハの声だ。追いついたんだ。

「ラクシュミー、トゥインクルロッドを使うッハー」

「トゥインクルロッド？」

また聞きなれない単語が出てきた。

わたしは化け物と間合いを取るとシンハにたずねた。

「チンターマニに手を当ててラクシュミートゥインクルロッドと叫ぶッハ」

わたしは言われたとおり、胸のリボンの中央についたチ・・・如意宝珠に手を伸ばし、

「ラクシュミートゥインクルロッド！」

と、叫んだ。





すると、チン・・・如意宝珠が胸からはずれ、柄のような部分が丸い側から生えてくる。



わたしの表情からあきらめを読み取ったのだろう、シンハが言葉を続ける。

「というわけでしばらくよろしく願いますッハ！あ、お礼といっちは何だけど、そのあいだ家庭教師として勉強を見てあげるッハ」

カリカリと足を引っかかる感触で現実へと引き戻される。

見ればシンハが足にまとわりついていた。

「ソーセージのビニールを最後までむいて欲しいッハ」

幸せそうなシンハの顔を見ているうちになんだかむかむかと腹が立ってきた。

わたしはソーセージのビニールを全部むくと、シンハが口をつけたほうの3センチほどをちぎり、残り全部をわたしの口の中に押し込んだ。

「あ—————！」

シンハの悲しそうな声が夜の闇に響き渡った。

一方そのころ

「くそっ！なんだ！なんなんだいったい、あいつは！」

一見誰も住んでいないように見えるあばら家の中で、青木は荒れに荒れていた。

「おかげで計画が台無しじゃないか！なあ赤木！」

青木が振り返った先には赤木が座っていた。頬杖をついて無表情で窓から月を見ている。

「学校へダデーナーを出現させて、大暴れさせる！その後で俺たちが出て行ってかっこよくやつつける！そうすれば、友だち百人！彼女も百人！モテモテのリア充学園生活が送れるはずだったのに！おい、聞いているのか赤木！あかぎー！」

甲高い声で青木は赤木に呼びかける。

赤木はまだ、無表情で月を見上げている。

「・・・まあいい、「文珠」はまだまだこんなにある、それに学園生活はまだ始まったばかりだ！次回こそは、次回こそはあの女に邪魔される前にダデーナーをやっつけて、友だち百人！彼女も百人！モテモテのリア充学園生活を手に入れてやる！なあ赤木！」

青木の高笑いがあばら家の中に響き渡った。

赤木はまだ月を見ている。

しかしその瞳に写るのは月ではなく、今日学校で手を差し伸べた少女「ラクシュミー」が、自分に送ってくれた微笑みであった。

まほろば天女ラクシュミー 1話 了

## おまけ 1 たかはた昔話「ぼたん姫」

---

むかしむかし、たかはたの一本柳に浜田というお殿様が住んでいた。

浜田には40を過ぎても子宝に恵まれなかったので、なんでも願いがかなうと評判の亀岡文殊へ子宝祈願に訪れた。

浜田が祈願に訪れると、文殊様が唐獅子の背に乗って夢枕に立ち、牡丹の花で浜田と奥方の頭をなでた。しばらくして奥方は懐妊した。

こどもはかわいらしい女の子だった。牡丹の花でなでられて生まれた子なのでぼたん姫と名づけられた。

ぼたん姫は美しく成長し、年頃になるとあっちこっちのお殿様からぜひ結婚したいと強く求婚を迫られた。

中でも竹の森と二井宿のお殿様の求婚はたいそう強く、一本柳を巻き込んで竹の森と二井宿で戦争が起きそうになった。

見かねたぼたん姫は二人に対し「わたしは文殊様によって授かった子供なので、文殊様にお伺いを立てて、文殊様を選んだほうのお殿様に嫁ぎます」といって、亀岡の文殊堂にこもった。

その後文殊様のお導きにより、姫は二井宿の志田の殿様に嫁ぐこととなった。

志田の殿様とのあいだに子供ができたぼたん姫は、お産のために里帰りする途中、泉岡で産気づき、赤ちゃんを産むが、産後の肥立ちが悪く、若くして亡くなってしまう。

しかしこのとき生まれた子供が、後に安然大師と呼ばれる立派なお坊様になったという。

### 解説

時代背景を見ると、安然大師が生まれたのが825年ごろ。

亀岡文殊が徳一上人によって建立されたのが807年ごろといわれています。

と考えると、浜田は建てられたばかりの亀岡文殊堂へ行って祈願をしてきたようです。

たぶん、亀岡文殊の商業的に作られた話なのではないかな？

などと勘ぐってみたりします。

なお、安然大師ですが滋賀県で生まれた説もある様子。

比叡山で活躍したお坊さんらしいです。

## Q&Aコーナー

---

Q1. 何でまたラクシュミーなんて名前なの？

A1. 天女伝説を元にしたお話なので天女っぽい名前にしたいと思ってました。

天女をwikiで検索したところ、「中国の貴婦人の姿で描かれる」

「元は中近東の翼人がモデル」「インドではアプサラス」とかそんなネタが書いてました

。

さすがにアプサラスはないわーと思ってもうひとつの物語のキーパーソンである

文殊菩薩を検索したところ「別名、妙吉祥菩薩、吉祥金剛・・・」などと出てきました。

吉祥天がラクシュミーなのでじゃあラクシュミーでいいやというのが理由です。

クリシュナだと元ネタと言葉の響きが近くてよかったかなあと思ったりもしてます。

Q2. 何で妖精が唐獅子なの？

A2. 文殊様の乗り物として唐獅子が付き物だからです。

あのいかつい顔をした唐獅子もゆるく描くとかわいいでしょ。

文珠が全部集まると本来の姿を現すかも。

あとは「唐獅子牡丹」だの「牡丹と蝶」だの古来からの組み合わせでキャラ設定してます

。

1

啞然とした。

掲示板にでかでかと張られている学校新聞を見て啞然とした。

「謎のコスプレ少女！放課後の学校で大活躍！」

幸いピンが甘くて顔はよく見えないが写真もでかでかと載っている。

A4の用紙をわざわざ九枚も張り合わせていったい誰がこんなものを！

発行者の名前を探そうと新聞に顔を近づけたそのとき、

「ぽちっとな」

「ひゃうん！」

襟足のほくろを突っつかれ、はからずも大勢の生徒のいる真ん中で声を上げてしまう。

わたしは振り返ると千代ちゃんの肩をつかみ、掲示板の前から離れる。

「ちーよーちゃん！」

「おはよー、ぼたんちゃん」

「おはよーじゃないわよ！まったく！」

精一杯して見せた怖い顔にも動じず、千代ちゃんはニコニコと笑っている。

「ねーねーなに見てたの？」

千代ちゃんはそう言うと、後ろの掲示板を見ようとぴよこぴよこと飛び跳ねる。

「え、ええと」

あまりその話題に触れたくないわたしは、言葉をにごして別の話題に持っていかこうと考える。

が、あの巨大掲示物の存在感は大きく、ラクシュミーの写真は否が応にも千代ちゃんの目に留まる

。

「へー、こっちにもああいうの好きな人っているんだー」

「いや、あの、そんなに好きこのんでやってるわけじゃないよ・・・と思うんだけど・・・」

「詳しいね？ 知り合い？」

「いや、えっと、そういうわけじゃ・・・」

千代ちゃんの発言にしどろもどろになる「ご本人」。

そのわたしに不思議そうな顔を向ける千代ちゃん。

やばい何か感づかれたかしら？

でも正体がばれたからってどうにかなるのかな？シンハは特に何にも言ってなかったけど・・・

いやいや、魔法とかなんかの副作用よりも、この場に居合わせてる人たちの好奇の視線を考えたら・・・

たら・・・

やばい！ 正体がばれたら社会的にやばい！ 恥ずかしくて生きていけない！

ばれちゃだめだ！ 何とか話題を変えなきゃ！

「どうしたのぼたんちゃん？ 具合でも悪い？」

「え、ああ、うん、ほらあれよ！ 具合はともかくわたしジャーナリスト志望じゃない！ だからほら、こういう新聞部とかあったらいいなーと思ってて、うん。 放課後にでもここの部室行

ってみようかなーなんて、あ、あはは・・・はは・・・」

「う、うん。がんばってね、ぼたんちゃん・・・」

よーし、これでうまく話題が・・・あ、あれ？変わったのかな？

2

窓から校庭を眺めると、数名の男子が先日のラクシュミーの動きを、あんな細かいところまでよくもまあ見られていたもんだと感心するほど詳細に再現していた。

そこに青木君と赤木君が通りかかる。

赤木君の恐ろしげな風貌にか、青木君のおどろおどろしい雰囲気にか、男子たちはクモの子を散らすようにその場からいなくなる。

青木君はみんながラクシュミーの動きを再現していたあたりに立ち、ぐるりと周りを見回すと、舌打ちをして下を向いて再び歩き出した。

「・・・さん、冬咲さん？ 僕の話し聞いている？」

「あっ、聞いてます。聞いてますよ大河原さん」

語りかけられる声にはっと引き戻されるわたし。

ここは図書室の一角。新聞部の活動はここを中心に行われると聞いて千代ちんと二人で訪れてみたのだ。

本当はあの場を取り繕うためにでまかせを言ったのだが、どうやら千代ちんがその気になってしまった様なのだ。

「だから僕はね町外からの、それもアーバンライフ、つまり都会的な生活に親しんだ転校生であるところの竹田さんのビューポイント、視点がね、きっと新聞部のこれからの活動に大きくプラスになってくれると考えているんだよ」

熱く語っているのは大河原部長。

彼はとにかく話がまだるっこしい。

理屈っぽいだけでも大変なのに、言葉や文章に余計な装飾をつけすぎるきらいがある。

その上何かと専門用語や聞きなれないカタカナを使いたがる。

また、難読漢字を多用するのがカッコいいと思っているらしく「うるさい」は必ず「五月蠅い」、「はかどる」は「捗る」と書かないと気がすまないときている。

容貌は短髪だが顔がでかくパンパンで、何で買ったの？と思うようなデザインのおしゃれメガネがこめかみに食い込んでいるさまが痛々しい。

苦手だなあこの人、と思い視線をテーブルのすみに移すとまだ学生服に着られてるなといった感じの吉田君と目が合う。

すると吉田君は目の前に広げてあるノートを腕の中に隠すようにする。

残念ながらお姉さんにはしっかり見えてますよ。

どうやら萌え系の女の子を描きたいようだがうまく線が定まらないようだ。

たぶんわたしや千代ちんの落書きのほうが上手い。

あんまり見ていて嫌われてもしょうがないので視線をテーブルの反対側に移す。

そちらでは何で運動部に行かなかったのと思えるようながっしりした体格で、髪をスポーツ刈りに整えた日下部君がやたらとごつくてごちゃごちゃとしたカメラを大事そうに磨いたり、時折ファインダーをのぞいたりしている。

先日の写真を撮ったのも彼のようなのだが、あの写真を見る限りではこのカメラも宝の持ち腐れのようなのだ。

「だからね・・・冬咲さん？冬咲さん、僕の話聞いている？」

「あっ、聞いてます。聞いてますよ大河原さん」

部長はコホンとひとつ咳払いをして話を続ける。

「だから君たち二人には、いつも見慣れた町でも視点が変わればこんな風に見えるよと、こういった観点から高島の観光について提案するような記事を担当して欲しいんだ」

どうして学校新聞で町の観光のことまで心配しなきゃならないんだろう。と考えていると部長は正面から千代ちんの手を握り、

「そのためにも竹田さんは予備知識ゼロでいろいろな体験をしてほしい」

と言った。

それから千代ちんの手を握ったまま顔だけこちらに向けて、

「そして冬咲さん、君は竹田さんをサポートするためにガイドとしてしっかり下調べをして解説できるようにしてほしい」

と言う。

え？それって、なんかわたしの方が大変なんじゃない？

反論するまもなく部長は千代ちんの手を取ったまま立ち上がると、

「そうだ竹田さんはこの学校まだ慣れてないでしょ、これから僕が案内するよ。じゃ、みんな後はよろしく」

「え？あの、みんなまだ慣れていないと思うんですけど・・・」

という千代ちんの言葉が聞こえないかのように部長はずんずんと千代ちんを引っ張って行ってしまふ。

「一年生のほうの教室は僕が・・・」

そうやって吉田君も立ち上がる。ついで日下部君も黙って席を立つ。

残された吉田君のノートに描かれている女の子の頭には短いツインテールとさくらんぼのような髪留めがついていた。

一人ぽつんと図書室に残されたわたしは、女のプライドを傷つけられた怒りで、こんな部なんかやめてやろうか、とも思ったが、千代ちん一人をこんな男どものところへ置いてもおけない。

これからの部活動を思うと先が思いやられた。

高島町の桜の開花は例年ゴールデンウィークの一週間前ぐらい。

気温や天気しだいが、おおむね四月いっぱいには桜が楽しめる。

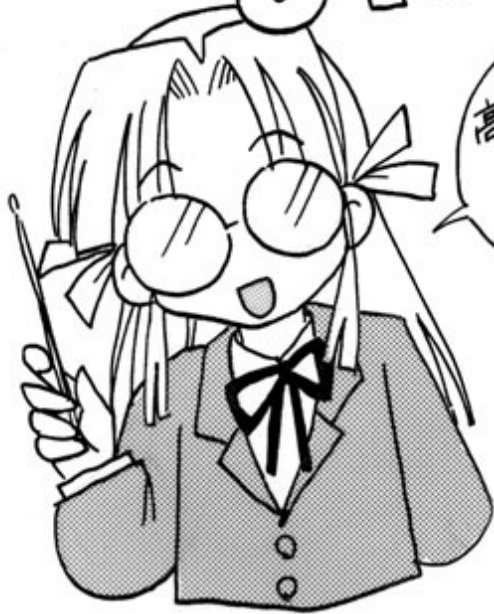
黄砂で遠くの山がぼんやりとかすむなかを、わたしと千代ちんはデジカメ片手に、高島駅から町内を目指してまるで桜のトンネルとなった「まほろばの緑道」を歩いていた。



シンハも犬の振りをしてついてきている。

「まほろばの緑道」は高畠駅から屋代地区へ向かい市街地を通り安久津八幡神社へと続く全長約6キロのサイクリングロードだ。

# ぽん&ちよの まほろばの緑道 MAP



私達が歩いたのは  
高島駅・太陽館から  
旧高島駅まで  
4kmくらいかな?  
(全長6km)



安久津八幡神社



旧高島駅

太陽館では  
レンタサイクルも  
利用できるよ!  
チャレンジして  
みてね



ぬくもりの湯  
浜田広介記念館

まほろばの緑道



高島駅 太陽館



るべく整備されたという。

道の両脇には約七百本の桜の木や果樹などが植えられている。

また、途中には「泣いた赤鬼」などの代表作を持つ、高畠出身の童話作家「浜田廣介」の記念館もある。

どうしてこんなところを歩いているかという、例の新聞部の活動である。

まず千代ちゃんが目つけたのがこの桜満開の「まほろばの緑道」だった。

サイクリングロードだから自転車というわたしの提案は千代ちゃんに一蹴される。

「自転車じゃ見落とす景色もある。こういうのは歩いてなんぼ」

なんだそうだ。

日ごろ自転車ばかりで歩きなれてないわたしとしては、となりを通り過ぎていくレンタサイクルの家族連れがうらやましい・・・

九時ごろに駅を出発して約一時間。廣介記念館の庭にあった童話をモチーフにしたオブジェの数々にだいぶ時間を取られたわたしたちはようやく屋代小学校方面へと続く道へと向かう。

古い民家の立ち並ぶ一本柳の道路をわたると一面の田んぼが広がっている。

このあたりは盆地のほぼ中心部なので山が遠く、さらにごちゃごちゃとした建物が無いのでより田んぼの広さが感じられる。

「すごーい」

千代ちゃんが目を丸くする。

そんなにたいしたものかなあと思いながら、わたしとシンハは走り出した千代ちゃんの後ろを追いかけた。

その後も、ときどき置いてある高畠石の巨石や、子供たちになでられすぎてペンキがはげてしまった動物のオブジェを仔細に眺めたり、道端に設置してある遊具にまたがってみたり、地面に描いてあるケンケンをやってみたりと、千代ちゃんは何かを見つけるたびに全力でそれを味わっていた。

わたしはというとその様子を写真に収めたりしつつも、見慣れてしまい、代わり映えの無いような風景に正直飽き飽きしてきた。

このように道草をくいながら歩いてきたので旧高畠駅公園に付くころにはお昼近くになっていた。

一面桜色に染まった公園に着いて、本当ならここで一息入れたいところだが、名ガイドであるわたしは、あえて高畠石で組まれたレトロでモダンな駅舎を横目に公園を突っ切り「昭和縁結び通り商店街」へと向かう。

この「昭和縁結び通り商店街」にも千代ちゃんの興味を引くものはたくさんあるが、わたしは寄り道を許さず、目的の店「おばこや」の前まで千代ちゃんを引っ張って行った。

「おばこや」は甘いもののお店でこの時期にはだんごをメインに売っている。

「すみません。予約していた冬咲ですが・・・」

「はいよ、冬咲さんね・・・じゃ、これ800円」

この時期は予約なしには買えない人気のこのだんご。

あん、ゴマ、しょうゆ、そして枝豆をすりつぶしたじんだんの4種類、各2本ずつ入ったパックを受け取る。

そのあいだ千代ちゃんは、おかみさんがだんごの生地を棒状にのばし、リズムカルに包丁で切って、串にさしていく様子を店先から感心した様子で写真に収めていた。

わたしたちは再び旧高畠駅の公園へと戻る。

花見客が大勢いる中、わたしたちは腰を下ろせそうなベンチを探す。

が、千代ちゃんが先ほどスルーした旧駅舎に釘付けになる。

濃い肌色というか、薄い茶色というか、明るいオレンジ色をした凝灰岩の高畠石。

この石をまるで西洋の城砦のようにくみ上げた外観をしているのが旧高畠駅の駅舎の特徴だ。

現在では耐震性の問題などから中に入ることは出来ないという。とはいえ2011年の大地震はしっかりと耐え切ったので何か活用しないのはもったいないような気もする。

五分後、渋る千代ちゃんを何とか駅舎から引き剥がし、かつて高畠鉄道で活躍していた機関車、といってもセダン車のような形をした電気機関車なのだが、この機関車の前にあるベンチに腰を下ろせた。

千代ちゃんは機関車が見たくてうずうずしているが、まずは団子だ昼飯だ！

「やっぱりこの季節になるとこれを食べずにはられないのよね〜♪」

と、包みをほどくと千代ちゃんの目も団子に向く。

最初的一本、わたしはゴマから、千代ちゃんはじんだん。

「おいひー」

「やわあはーい」

わたしたちは同時に声を上げた。

「あおね、あおね、おらんごがね、えきたへやからね・・・ふんごふやあらかいのよ」

千代ちゃんが興奮して訴えてくる。

わたしはお茶のペットボトルのキャップをひねると千代ちゃんに手渡す。

千代ちゃんのごくりと一口だけ飲み、一息つくと再び感想を語りだした。

「そしてこのずんだ？ じんだん？ これもおいしいのよ！ 初めて食べたんだけど！」

千代ちゃんはそういうと二玉目へと口をつける。



ひとかみふたかみして千代ちゃんは目をつぶると足をばたばたさせ団子のおいしさを全身で表現

する。  
お団子がおいしいのはわかるけど・・・、紹介したお団子を評価してくれるのはうれしいけど・・・、こうまでされるとなんだか馬鹿にされているように感じてしまう・・・  
あっという間に一本食べ終えた千代ちゃんは魚肉ソーセージをねだるシンハのような目をしてわたしを見つめる。

はいはい、もう一本じんだんが食べたいのね。  
わたしは黙って団子のパッケージをぐるりと回し、くしの出ているほうを千代ちゃんに向ける。  
そのときシンハとも目が合う。はいはい、あんたも欲しいのね。  
ペットボトルのフィルムをむいてから団子を一玉はずしその上に乗せてやる。  
まってましたとばかりに団子にむしゃぶりつくシンハ。

「おいしいッハ♪」  
と思わず声に出す。

「え？」  
千代ちゃんが驚いたような顔をしてシンハを見る。  
シンハはしまったという顔をしてわたしを見る。  
「・・・え、と・・・ほら、あの・・・『おいしい？シンハ』ってきいたのよ。ほら曲がってしゃべると変な声が出るじゃない！・・・おいしい？シンハ・・・」  
シンハの声まねまでして弁明する。千代ちゃんはあっけにとられたような顔をしている。  
ここはひとつ話題を変えないと・・・

「そ、それよりさ、今まで念入りに時間をかけてまほろばの緑道を見てきたじゃない？ どう？  
いい記事かけそう？」

わたしは千代ちゃんに問いかけた。  
「うん、だってすごく楽しかったから」  
「ふうん、楽しかった・・・ねえ」

即答する千代ちゃん。それに対して少し言いよどんでしまうわたし。  
そんなわたしに千代ちゃんは微笑みながら言葉を続けた。

「きっと、ぼたんちゃんは見慣れちゃってると思うんだ、この風景に。毎年、毎年、この桜並木を歩いて、このお団子食べて・・・」

千代ちゃんは団子をひと玉口に入れ、飲み込むとまた言葉を続ける。

「わたしさ、お父さんの仕事の都合で毎年毎年あっちに行ったりこっちに行ったりで、毎年見てきた桜も食べてきたお団子も違うんだ・・・だから、この季節になったらココに来て、ココのコレ食べなきゃ、ていうのを持ってるぼたんちゃんがうらやましいんだよね・・・」

そうすると千代ちゃんは少し寂しげな目をして見せた。

「もう来年は見れないかもしれない、もう来年は食べれないかもしれない、だったら思いっきり楽しんで、思いっきり味わってやろうって思って、一期一会って言うのかな？ ちょっとちがう？」

千代ちゃんは少し照れたような顔でこちらを見る。

わたしは千代ちゃんの微笑みを受け止められず、足元のシンハに視線を逃がしてしまう。

「そうだったんだ・・・」

千代ちゃんの思いを知って、なんだか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

その思いが見透かされたのか千代ちゃんがわたしに言葉をかける。

「・・・なにかしんみりさせちゃってごめんね、でもわたしお得なのよ。だってぼたんちゃんよりもっと多くの桜の名所やお団子の味を知ってるんだもの」

そうって千代ちゃんは薄い胸を張って見せた。

「こいつう」

と、わたしは千代ちゃんをひじでつつく。わたしたちはしばらく笑いあった。

「あとね、これはお母さんからの受け売りなんだけど・・・」

千代ちゃんは人差し指を立て目をつぶり、一呼吸置いて言った。

「女は、ふるさと以外に住んでる男の人を好きになって結婚したら、その人の町に暮らさなきゃいけないじゃない。だからそれまでは自分のふるさとを大事にしなさいって、自分の子供にふるさとのいいところをいっぱい教えられるように・・・」

千代ちゃんはわたしを見て、

「わたし、お母さんの大好きなこの町に来て幸せなの」

と微笑んだ。

と、そのとき。

藤棚の東屋の向こう側、駅舎の裏手の広場のほうから大勢の人の悲鳴が聞こえてきた。

4

「・・・なに、あれ？」

見覚えのある二度と見たくなかった紫の化け物を、初めて目にした千代ちゃんは絶句した。

シンハが足を叩いて必死に変身しろって訴えかけてくる。

「でも」

となりには千代ちゃん。

まわりには大勢の花見客。

絶対に正体がばれるわけにはいかない。

「ダデー——ナー——————」

化け物が一声ほえると、まわりからもいっせいに悲鳴が上がる。

急に腕が重くなる、見ると千代ちゃんが腰を抜かしてわたしの腕につかまっていた。

「・・・ぼ・・・ぼたんちゃん・・・何？あれ・・・」

化け物を前にして比較的冷静なわたしを頼もしく感じるのか、千代ちゃんはぎゅうっとわたしの手を握りながらたずねてくる。

「だいじょうぶ・・・だいじょうぶよ・・・だから、立てる？」

わたしは千代ちゃんの手を握り返しひっぱるが、千代ちゃんは青い顔で化け物を見つめ、ただただ震えているだけだ。

その千代ちゃんの前にシンハが飛び出ると、千代ちゃんに向かって

「ガオウ！」

と吼えた。

千代ちゃんは目を回し意識を失う。

「千代ちゃん！千代ちゃん！」

わたしは千代ちゃんを揺り起こそうとする。

「大丈夫、術をかけて気絶させたただけだッハ。さあ今のうちにラクシュミに変身するッハ」

「んばが！こだなどさ置きっ放しにさんにえべっした！」

（訳：ばか！こんなトコに置きっ放しにできるわけじゃない！）

わたしは千代ちゃんを後ろから抱え上げるとズリズリと引きずって避難させる。

とりあえず東屋のかげにでも寝せておけば大丈夫だろう。

後は見つからずに変身できるどころ・・・さっきお団子食べた機関車と貨車のすき間がいい。

わたしは機関車までダッシュすると貨車とのすき間にもぐりこむ。

そしてシンハから如意宝珠を受け取ると、念のため周囲を確認し、ひとつ深呼吸をしてから、

「オン！チンターマニ・ソワカ！」

と叫んだ。

温かい空間に漂う。そんな感覚を久しぶりに受けたかと思うとわたしはラクシュミーの衣装を身にまとっていた。

服の引っかからないような位置に移動すると、ジャンプして公園全体を眺める。

基本的な動きや力の調整はあれから何度か練習して加減ができるようになった。

女の子の恥じらい、変身のための呪文への抵抗も・・・三回目くらいで・・・捨てた・・・。

化け物は？・・・良かった、まだそんなに動いていない。

次のジャンプで背後に回ってトゥインクルファウンテンで速攻片をつけちゃおう、と思いながら地面に降りたが何か違和感を覚える。

わたしは違和感のした方、駅舎の屋上へと向かって大きくジャンプした。

駅舎の屋上には人がいた。

それもただの人じゃない、ゲームやマンガの中に出てくる魔法使いのような服を着た人が、化け物のほうを向いて「来い！」とか「早くしろー！」とか、身振り手振りをしながら声をかけているのだ。

きっとこいつが前回や今回の化け物騒ぎの黒幕なのね。

わたしは颯爽と彼の後ろに降り立つと、人差し指を「ビッ！」と向けながら、

「そこまでよっ！」

と、叫んだ。

魔法使いのような格好の男はゆっくりとこちらを振り向く。

顔はフードに隠れてよく見えない。

「・・・また・・・貴様か・・・」

男はしぼり出すような声で言った。

「また？・・・またってことはこのあいだの学校の化け物もあんたの仕業なのね！」

「そうだといったら・・・」

男は体の前で腕を交差させてひざを曲げ、腰を低く落とす。

いつでも跳びかかってこれる体勢だ。



わたしは油断なく男の動きを見つめながら、

「この高島の平和を守る、まほろば天女ラクシュミーが決してあなたを許さない」  
そうって見得を切る。

男はいまいましげに口の端をゆがめると、

「ふん・・・ならば今日のところは譲るとしよう・・・」

とつぶやき、ザリガニのように背後へと跳んだ。

「危ない！」

落ちちゃう！と思えばあわてて追いかけて手を伸ばすが届かない。

屋上の縁につかまり下を覗き込む。

と、化け物がすごい勢いで跳び上がって来て、わたしはあわてて頭を引っ込める。

紫の化け物は空中で姿勢を整えるとわたしに狙いを定める。

・・・ちょっと待ってよ、このまま落ちてきたら駅舎もただじゃすまないじゃない・・・

わたしは広場へと向かって跳んだ。

化け物もそれを追うように落下してくる。

駅舎は無事だ。しかし、化け物の巨体がわたしに迫ってくる。

空中では思うように避けられない。

まずい！ やられる！

わたしは思わず目をつぶる。

次の瞬間、力強い何かに抱きすくめられる感触と体が上昇するようなGを感じた。

続いて「ドーン」と何か重いものが落下したような音が響いてくる。

恐るおそる目を開けるとわたしは誰かの腕の中に抱えられ宙を飛んでいた。

この覆面姿は、この間もわたしを助けてくれた彼だ！

覆面の彼は化け物から離れたところに着地する。覆面のせいで彼の表情はよくわからないが、視線は鋭く化け物に注がれている。

あれ、ちょっと待って、この格好って・・・

今のわたし・・・お姫様抱っこ！

そう思うとなんだか急に恥ずかしくなる。

「・・・あ、あの、ちょっと・・・」

わたしが声をかけると覆面の彼はわたしの顔を見つめる。

やだ、こんな体勢でそんなに見つめられたら・・・

カァッと顔が熱くなるのがわかる。わたしは恥ずかしくなって顔をそらす。

すると彼はそおと体を傾け、足から地面に降ろしてくれる。



「あ、あの、ありがとうございます」



ともかく千代ちゃんを抱いたままじゃ戦うにも戦えない。ひとまず千代ちゃんを下ろして、敵をひきつけないと。と、千代ちゃんから手を離れた瞬間・・・

見つかった！

もう一度千代ちゃんを抱き上げて跳ぶ時間は無い！

ドン！

わたしは腕を前に突っ張って、機関車の突進を正面から受け止めた！

「ん、んぎぎぎい・・・おもい・・・」

足首あたりまで地面にめり込んでる感じがする。

うまく力を逃がせばかわせない事も無いかもしれない。でも・・・

下を見ると千代ちゃん。

下手に動けば千代ちゃんが機関車につぶされちゃう！

シンハが駆け寄ってきて千代ちゃんの靴に噛み付き、千代ちゃんを引っ張り出そうとする。

おっ！いいぞ！と思うも靴だけスポンと脱げて、勢いあまったシンハはごろごろと転がって目を回す。

こんの役立たずう。

「お願い、千代ちゃん・・・目を覚まして・・・」

わたしのあごからぽたりぽたりと千代ちゃんの顔に汗が滴り落ちる。

「・・・ん、ううん・・・」

しめた、気がついた。

わたしの祈りが通じたせいか、それともシンハが目を回して術が解けたせいか、千代ちゃんが意識を取り戻した。

「・・・あれ、コスプレの人？・・・え、どうしたの？・・・え？ え？ え～～～？」

状況を把握した千代ちゃんはパニックにおちいる。

「・・・は、や、く、に、げ、てえ～・・・」

声を絞り出すようにお願いする。もうそろそろ限界だ。

千代ちゃんはお尻をずってわたしたちの下から這い出ると、くるりと振り返って靴が脱げているのにも気づかずにダッシュで逃げ出した。

よし、あのくらい離れれば。

わたしは拮抗している力を下方向へと逃がしてやり、その反動で空高く舞い上がる。

機関車は芝生にめり込んで身動きが取れないでいる。

チャンスだ！

空中でトゥインクルロッドを取り出すと、着地と同時に魔方陣を描く。

今度は絶対はずさない！

「ラクシュミー・トゥインクル・ファウンテンッ！」

光の噴水が機関車へと向かって一直線に放たれ、包み込む。

「ダデエエエエエエエエエエエエナアアアアアアアアアアアアアアアアア・・・」

絶叫があがり、機関車がまとっていた禍々しい気のようなものが消えたような気がした。

啞然とした。

掲示板にでかでかと張られている学校新聞を見て啞然とした。

「謎のコスプレ少女！満開の桜の下でも大活躍！」

幸い後姿で顔はよく見えないが写真がでかでかと載っている。

A4の用紙をわざわざ十六枚も張り合わせていったい誰がこんなものを！

いや、このアングルで写真が取れたのはただ一人、もう一度確認しようと顔を近づけたそのとき

、

「ぽちっとな」

「ひゃういん！」

襟足のほくろを突っつかれ、またしても大勢の生徒のいる真ん中で変な声を上げてしまう。

わたしは振り返ると千代ちゃんの肩をつかみ、掲示板の前から離れる。

「ちーよーちん！」

「おはよー、ぼたんちゃん」

「おはよーじゃないわよ！まったく！」

精一杯して見せた怖い顔にもまったく動じず、千代ちゃんはニコニコと笑っている。

「一体全体どーしたのよこの記事！」

「あ、見た見たー？　すごいでしょー」

「すごいでしょって、何でラク・・・じゃなかった、まほろばの緑道の記事はー？」

危うくラクシュミーの名前を口走りそうになる。

「緑道の記事は左下のほうにあるよ。　それよりすごかったんだってぼたんちゃんが気絶しているあいだ！」

そう、あの時わたしは気絶していたことになっている。

というか、変身から戻ったあとの反動がすごくて動けなかったのだ。

機関車を正面から受け止めたのが効いたのだろう、腕、肩、腰、脚がミリミリと悲鳴を上げ、おかげで貴重なゴールデンウィークの間中ろくに動けず寝てすごしていた。

「部長に写真と記事を見せたらすごく気に入ってくれて、で十六枚編成の超特大紙面！」

千代ちゃんはとっともうれしそうに話を続ける。

「機関車の化け物をとぉーっ！って叩きつけたかと思うと、魔法のステッキでやぁーっ！

って・・・わたし、ああいうのって漫画やアニメの中だけかと思ってたんだけど・・・ねえねえ、聞いているぼたんちゃん？」

「う、うん、聞いているわよ・・・」

いやだー、聞きたくなーいと内心思いつつもとりあえず相づちを打つ。

「それでね、わたし決めたの！　このコスプレの人を探すって！」

「え？」

千代ちゃんの発言にわたしは目を丸くする。

「なんていうのかなー、馬鹿にされちゃうかもしれないけど、ああいうのに昔からあこがれてたって言うか・・・なってみたいなあって・・・」

なってみたいなあって・・・代われるものなら代わって欲しいよ・・・

「ああ、今あの人はどこにいるのかしら・・・」

・・・はいはい、ここにいまーす・・・

夢見る乙女の目をした千代ちゃんに、声に出来ないつつこみを入れるわたし。

せいぜい出来ることといえば乾いた笑いで相づちを打つことだけだった。

月夜の旧高畠駅を赤木と青木が連れ立って歩いていた。

例の騒ぎのせいもあり、公園の桜はすべて散ってしまっていた。

事件から十日たって、立ち入り禁止の黄色いテープはまだ移動のすんでいない機関車の周り以外からは剥がされていた。

遠目から機関車を見ると青木は舌打ちをした。

「くそっ！何度思い出しても腹が立つ！　そもそもお前がもたもたしてなければギャラリーの大勢いる中でお前の雄姿を見せ付けることができたんだ。　見ていたのが町民ともなれば友達千人、彼女も千人の超リア充ライフが送れたはずじゃないのか、なあ赤木！」

そう言うと青木は赤木に人差し指を突きつける。

赤木はうつむいてじっと自分の両の手のひらを見つめていた。

「おかげで見ろ、あのざまだ！　またあのラクシュミーとか言う小娘においしいところを持っていかれたじゃないか！」

「ラク・・・シュミー・・・」

赤木はつぶやくと開いていた両の手をぎゅうっと握り締める。

「そうだ！あいつは自分でそう名乗っていた。しかし・・・」

青木は再び機関車に目をやる。

「しかし、この間の戦いではダデーナーの面白い使い方が判ったのが収穫だったな・・・。よし、いいか赤木！次こそは！この次こそはあのラクシュミーよりも先にかっこよく活躍して、幸せなリア充ライフを手に入れてやるぞう」

青木の高笑いが公園中に響き渡る。

赤木は再び手のひらを広げてじっと見つめる。

赤木にはその腕の中に、この間抱きしめたラクシュミーの柔らかく温かな感触がまだ残っているかのように感じられた。

まほろば天女ラクシュミー　2話　了

1

「なあ、赤木・・・実はさ・・・」

まさか人が住んでいるとは思えないようなツタのからまるあばら家の中、台所のテーブルにひじをついて座っていた長髪の少年が、窓際で頬杖をつきながらしとしとと降りつづける雨をながめている巨漢の少年に向かって語りかけた。

「実はさ・・・いや、やっぱいいや・・・」

長髪の少年は言いかけた言葉を飲み込んだ。

「・・・言えよ青木・・・友達だろ・・・」

赤木と呼ばれた巨漢の少年は視線を長髪の少年にうつしてつぶやくように言った。

青木はごくりとつばを飲み込むと、ひとつ深呼吸をしてからしゃべり始めた。

「じ、実はさ、このあいだ女子から声をかけられたんだ、生まれて、初めて・・・俺の探してた本を手渡してくれてさ、わ、笑いかけてくれたんだ・・・これってさ・・・これってさ・・・もしかして俺のこと、す、す、す・・・」

青木は湯飲みの水をゴブリとのどに流し込むと興奮を抑えきれずに言葉を続けた。

「と、とにかくさ、俺思ったんだよ。今まではダデーナーに暴れさせて、それを俺たちが退治することで不特定多数の人にアピールして友達を作ろうとしてたじゃないか？ そうじゃなくて、誰か一人！ 誰か一人のピンチを救って深い関係を作ってさ、そこから友達の輪を広げていくっていう作戦のほうがいいんじゃないかな？ どうだ？ どうだ赤木？」

時どき声を裏返らせながら早口で青木は赤木に訴える。

しばしの沈黙のあと赤木はゆっくりと口を開くと

「相手は？・・・」

と、たずねた。

青木は立ち上がり、赤木に向かって両腕をテーブルに着く。そして大きく息を吸い込む・・・が

「・・・あ・・・」

だの

「・・・お・・・」

だの、口から出る音は言葉にならない。

一分近くそんなことをしていたが、しまいには再びイスに座り込み、下を向いたまま消え入るような声で

「・・・あの・・・お、同じクラスの・・・冬咲・・・冬咲ぼたん・・・ちゃん」

と、言った。

2

「ひえぶちっ！」

「やだ、カゼ？ 花粉症？ それともうわさ？」

週末の夜、農機具小屋の二階に増築されたわたしの部屋に今日はお泊りの千代ちゃん。

Tシャツ短パンの涼しげな格好でクッションの上に座りっっている。

千代ちゃんはおばあちゃんがどっかからもってきた「はねモノ」のミルクケーキをぼりぼりとかじる手を止めて、ニヤニヤした顔でわたしにたずねた。

「なによ、うわさって？」

ベッドに横になって雑誌を読んでいたわたしは起き上がって千代ちゃんに向き直ると、その「うわさ」とやらについてたずねた。

千代ちゃんは相変わらずニヤニヤしながら、

「ああああ、あんなに熱い視線注がれてるっていうのに気づいてないなんて・・・かわいそう  
だわあ青木君ってば・・・」

と言った。

「あ、あ、青木～い？」

とんでもない名前が飛び出してきて面食らってしまう。

「中間テスト終わって席替えしたじゃない。そのあとぐらいからかなあ、青木君がぼたんちゃんにチラチラ視線送るようになったの・・・ほんとに気づいてなかったの？」

わたしはぶるぶると大きく首を横に振る。

「へー、あのまなざしは二人の間になんかあっちゃったのかなあなんて・・・」

「ちょっとやめてよお！」

千代ちゃんの言葉をとても最後まで聞いていられずに途中でさえぎる。

「わたしあの人なんか苦手なのよ、何か、こうジメッとした感じがしてえ・・・」

わたしの言葉に千代ちゃんが、「ああわかるわかる」と相槌を打つようにうなづく。

「こないだも図書室で部長に頼まれた郷土史の資料とろうとしたら一緒になっちゃって、いろいろやり取りするのもなんかやだから、どうぞお先にとって愛想笑いして逃げてきて・・・しゃべったって言ってもその時ぐらいしか・・・」





「それだ！」

と、千代ちゃんはわたしに人差し指を突きつける。

「どれよ？」と戸惑っているわたしに千代ちゃんは言葉を続ける。

「青木君って見るからに女の子に免疫なさそうじゃない、そこに本を譲ってもらってやさしくされて、愛想笑いとはいえ笑いかけられたら・・・」

千代ちゃんはわたしに突きつけた人差し指を銃を撃つように跳ね上げると、

「落ちたね！」

と言ってウィンクする。

「はぁ？」

まったくわけがわからない。そんな顔を千代ちゃんに向けると、千代ちゃんは得意げに解説を始めた。

「男子ってそういう勘違いするのよ。特に青木君みたいなタイプはそう、間違いないわ」

そうって千代ちゃんは薄い胸を張る。

「どうよ、求めるより求められるほうが女は幸せになれるって言うじゃない」

言うと千代ちゃんはいやらしく目を細める。

「冗談じゃないわよ、ナニ勝手なこと言ってるのよ、大体アレは苦手なタイプだって言ったじゃない」

わたしは身を乗り出して千代ちゃんに精一杯の抗議をする。

「そ、それじゃぼたんちゃんの好みのタイプってのはどんななのかな～？」

わたしの剣幕に押された千代ちゃんがあわてて話題を変えようとする。その「好みのタイプ」の一言に、なぜかこの間抱きしめられ、そして熱いまなざしで見つめられたあの覆面の彼を思い出した。

「おやおや～赤くなって止まっちゃいましたね～考えてる考えてる～ ね、誰だれ？」

千代ちゃんは好奇心に目を輝かせる。

「そんなことより明日は朝早いんだから寝るわよ！」

何とかこの話題を終わらせなくちゃ、と半ば切れ気味にタオルケットをかぶって千代ちゃんに背中を向ける。はいはいわかりましたよ、といったいで千代ちゃんは布団を敷き、今まで座っていたクッションを枕に横になった。

「でもなんでまた農作業の手伝いなんて、前まであんなに嫌がってたじゃない」

ナツメ球ひとつになった部屋で千代ちゃんが訪ねかけてくる。

「農家がやだから東京に行くんだ、みたいなこと言ってなかったっけ？」

千代ちゃんはまだまだしゃべり足りないようだ。

「・・・シンハのごはんよ・・・」

こうなった理由を思い出し、自分の馬鹿さ加減になんだか腹が立ってそっけない答え方になってしまった。

中間テストの勉強のとき、

「あ～久しぶりにこういうの解くとクイズしてるみたいで楽しいッハねー」

とか言っちゃって、シンハの教え方はいちいちイヤミだったらしかったが的確でわかりやすいものだった。

そのうえ、昔の人(?)だしせいぜい数学と日本史、古典ぐらいしか期待はしていなかったものだが、なぜか彼は英語や科学にまで精通していた。そのため主要五教科で大幅に点数と偏差値を伸ばすことができたのだ。

そこからが失敗の始まりだった。

浮かれて調子に乗ったわたしは駅むこうまで自転車を走らせて、奮発して糠野目にあるスモークハウスファインのソーセージをシンハにプレゼントした。

シンハはコレに大喜び、

「こんなおいしいソーセージ今まで食べたことがないッハー」

なんていいながらたちまち一袋をたいらげた。

それからだった、今まであんなに喜んでいた魚肉ソーセージに見向きもしなくなったのは。

舌が肥えたシンハは何かにつけてファインのソーセージをねだるようになった。

世間一般の家庭教師の謝礼と考えれば安いものだろうが、

「わたし文殊様の使いの唐獅子からお勉強教わってるの。お礼に毎日ファインのソーセージ買ってきて」

なんてお母さんにいえるわけが無い。中学生が自腹でまかなうとなればコレは痛い出費だ。

そもそも最初の話だとラクシュミーになる代わりに勉強教えてくれる約束じゃなかったのかよと思いつつも一週間も食べさせないでいるとシンハが目に見えて荒れてくる。

なけなしのおこづかいをはたいて一パックづつ買い求めてきた。

が、ついにそのお金も底をついてしまったのだ。

「シンハのご飯をちょっと奮発したら、もうこれじゃないとだめだッハーなんて言っちゃってさあ・・・」

寝返りをうって部屋の入り口にあるシンハの寝床に目をやる。

ダンボール箱に毛布を敷いた簡単なものだ。

丸くなって寝たふりしているシンハは尻尾でハラリと顔を隠した。

「なんだかぼたんちゃんってシンハとほんとうにしゃべれるみたいだねー」

!!!

やり取りを見ていた千代ちゃんが何の気なしにつぶやいた。

その言葉にわたしとシンハは肝を冷やす。

「そのぐらい好きなのよねーシンハ君のこと・・・」

そうやって千代ちゃんは視線をわたしからシンハへと移した。

「・・・ま、まあね、ほらじゃ寝よ寝よ！明日早いんだから！おやすみー・・・」

そういうとわたしは再びタオルケットをかけなおす。

と、そのとき、

・・・なんか見られてる感じがする・・・

千代ちゃんじゃない、シンハでもない・・・窓？

タオルケットの中から目だけで確かめるが特に異常は無いようだ。

「気のせいかな・・・」

なんか異常があればシンハも気がつくはずだし・・・千代ちゃんも同じ部屋にいる。

気のせい、ということにしてわたしは目をつぶることにした。

### 3

庭に面した仏壇の部屋はふすまも引き戸もすべて開け放たれており、すがすがしい朝の空気が満ちていた。

部屋の中央には大きな机が置かれ、その机に向かって年配の女性三名が黙々とパックにさくらんぼをつめていた。

さくらんぼの軸が見えないように、赤くつやつやと輝く実だけが表に出るようにつめるこのつめ方には熟練の技がいる。とてもわたしや千代ちゃんには無理な芸当だ。

「んじゃ、おぼごだはそごのさぐらんぼひろげで、わがンねなはじいでけろ」

おばあちゃんの言葉にはてなマークを浮かべた千代ちゃんを机の前に座らせ、わたしは新聞紙大の茶色で厚手の紙の上にかごいっぱいのさくらんぼを広げる。

「ほら見て、わたし達はこういうのをはじく仕事」

そうって千代ちゃんの前に出荷できないさくらんぼの見本を並べる。

実が割れたもの、じくの無いもの、一つのじくから二つの実がついているもの。

「こういうの出せないからこの容器の中によけるの。で、はじいたらばこの紙ごとあっちのテーブルにつてながれ」

「へー」

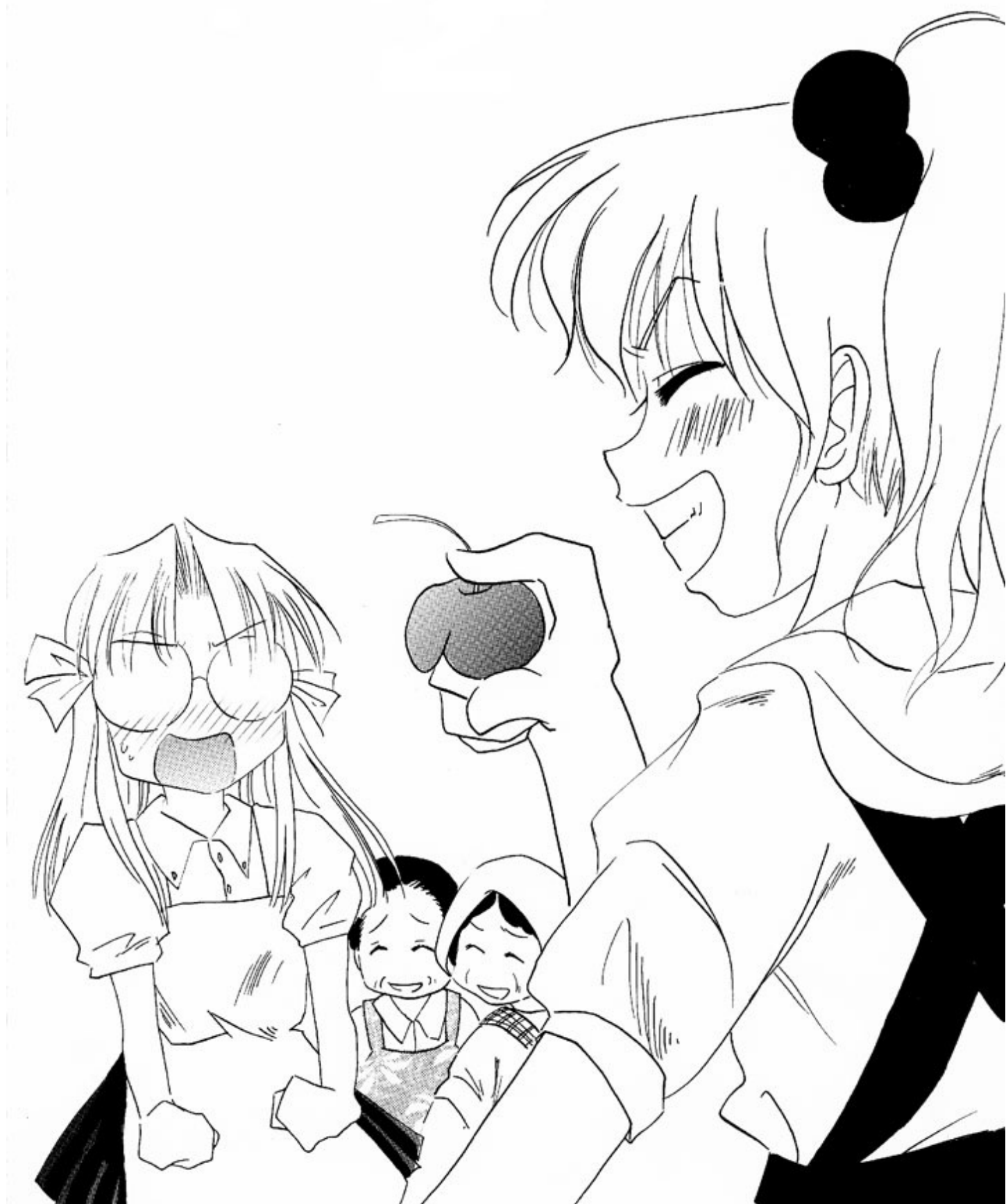
千代ちゃんは珍しそうに銀杏の実のようにくっついた双子のさくらんぼを眺めている。

しばらくすると自分でも見つけようとさくらんぼの山の中をかき分けはじめた。

するとすぐに顔をにやりとさせ、

「ぼたんちゃんぼたんちゃん」

とってそのお宝をわたしに見せようと腕を突き出した。



案の定、その指の先には片方が極端に小さい双子のさくらんぼが、

「なんだか幼稚園の弟のおち・・・」

「ちょー、そういう発言・・・」

わたしはあわててその言葉をさえぎろうとする。

となりの机からくすくすと笑い声が聞こえてくる。

「なあに、むがしはぼたんもチンポコーチンポコーていって喜こんでだったけでら」

「ちょっとばあちゃん、いづのごど言ってだんだズ」

ばあちゃんの暴露に千代ちゃんがケラケラと笑い出す。

不意に庭のほうから視線を感じた。

ちきしょーシンハマまで笑ってるのか、と思って庭を見たが誰もいなかった。

なんだろうこの感じ、昨日と同じような誰かに見られてるような感じ・・・

「どうしたの？」

わたしの異変に気がついた千代ちゃんが心配して声をかける。

「ううん、なんでもない・・・と思う・・・」

わたしは庭のほうにもやもやしたのを感じながらも再びさくらんぼの山へと向き直った。

しばらくして

「おぼごだは十一時ころまでしたら、先にまんま食って観光果樹園の方さ行げな」

と、ばあちゃんが指示したあたりから庭のほうに感じた違和感が消えたような気がした。

#### 4

「いやあ、ぜいたくなバイトよねえ。撥ねモノとはいえさくらんぼ食べ放題なんてさ」

お昼時なのでお客さんが一人もない観光果樹園の受付に座りながら千代ちゃんはさくらんぼを食べる手と口を休めない。

思い返せば選別作業中もちよこちょこ口にしていたし、お昼のときもつまんでいた気がする。

このペースだとそろそろ・・・と思っていると、ザクツという砂利をふむ音とともに目の前に影が落ちる。

「あ、いらっしゃいま・・・せ・・・」

お客さんだ、と思って顔を上げるとそこにいたのは青木君だった。

「や、やあ、ふ、冬咲さん。こ、こんなところでお仕事しているんだね・・・」

引きつったような笑顔を貼り付けながら青木君は語りかけてきた。

昨夜の話もあって思わず顔が引きつる。

「こ・・・」

「さ、さくらんぼ狩りってのをやってみたくてね・・・た、たまたまなんだよ、たまたまココに来たら君がいてさ・・・はは・・・」

とりあえず「こんにちは」と言おうとしたら、その言葉をさえぎるように青木君が早口でまくし立てた。

そのセリフからは明らかに「下調べしてここへ来ました」というのが伝わってくる。

なんと返していいものやら、愛想笑いを浮かべたままで沈黙が流れる。

「・・・あ、それじゃ青木君、中学生なんで800円をお願いします・・・」

沈黙を破ってくれたのは千代ちんだった。

その言葉に青木君はわたたと財布をポケットから取り出すと、ベリベリとマジックテープの音を立てて財布を開き、中から千円札を取り出して、手を出している千代ちんではなくわたしへと差し出した。

心なしかお札の先が小刻みに震えている。

わたしはゆっくりと千円を受け取ると金庫にしまい100円2枚をとりだした。

左手でお皿を作り、右手で青木君の手のひらの上におく。

そのときわずかにわたしの指が青木君の手に触れた。

その瞬間、青木君がぴくっと震える。

その反応に言いようの無い気味の悪さを感じて、わたしはすっと手を引っ込め、ひざの上においた。

「・・・そ、それじゃあ奥のほうに赤いの多いんで、そちらでどうぞ、あ、脚立はご自由にお使  
いください・・・」

千代ちんが手振りを含めてハウスの奥のほうへと青木君をうながした。

「あ、奥のほう・・・奥のほうね・・・」

という青木君は千代ちんの指す方を見て、しばらく口をもごもごさせていたが、肩を落としとぼとぼと奥のほうへと歩いていった。

青木君の姿が木の陰に隠れて見えなくなったのを確認すると、わたしたちは顔を見合わせた。

「来ちゃったねー・・・」

「来ちゃったわよー、ねーどうしよう・・・」

「どうしようって、なんにもこれから二人つきりになるわけでもあるまいし」

「え、あそか、千代ちんもいるもんねー」

「そうそう、彼気い弱そうだし、わたしがいればたぶん大丈夫。　ちゃあんと「おじゃま虫」してあげるか・・・ら・・・」

そういう千代ちんは突然おなかを抑えて青い顔をした。

「ごめ、ちょ、ちょっとトイレ・・・」

「ちょっとお、おじゃま虫は？」

「・・・なるべく早く戻るから・・・」

そういう千代ちんは自転車に乗って行ってしまった。

そろそろおなかに来るころだと思ってたけど、よりによってこのタイミングで・・・

さくらんぼには消化されにくい糖アルコールのソルビトールが多く含まれているッハー。だからいっぱい食べ過ぎるとおなかがゆるくなるッハー」

いつの間にか足元へやってきていたシンハがしたり顔でこういった。

「頭良いのはわかるんだけどさあ、何でそんなに詳しいのよシンハちゃん・・・」

わたしはシンハの前にしゃがむと、その頭をくしゃくしゃと乱暴になでた。

と、ザクツという砂利をふむ音とともに目の前に影が落ちる。

見上げると、腕いっぱいにはさくらんぼを抱えた青木君が、例の引きつったような笑いを浮かべながら立っていた。

「や、やあ冬咲君・・・」

「あ、・・・青木君・・・もうごちそうさま？」

わたしは立ち上がると、シンハを盾にするように胸の前に抱き上げた。

「や、あの、その、なんていうか・・・」

「お持ち帰りだと重さでお金かかっちゃうけど・・・」

しどろもどろになった青木君に料金の説明をすると彼はズボンのポケットをちらりと見やり、

「え、あのいや、一緒に食べようかとおもって・・・どう？」

「あ、わたしはいつもうちでいっぱいいたべてるから・・・」

彼のすすめをわたしはやんわりと断る。

「そ、そう・・・」

彼は寂しそうに笑うと、腕いっぱいさくらんぼをもりもりと食べ始めた。

時折、何か言いたげにちらりちらりと視線を送ってくるが、言葉にまとまらないようだ。

わたしも何か当たり障りの無いようなことを言えばいいんだろうけど、青木君の何か必死なオーラが妙な緊張感をかもしだして口を開きづらい。

かくして小鳥のさえずりと、時折青木君がさくらんぼの種を吹き出す「プッ」「プッ」という音だけがその場に流れた。

シンハも居心地が悪いらしく腕の中から抜け出そうともがくがわたしはそれを許さない。

次第に青木君の持っているさくらんぼの量が減ってきた。

(あ～もう早く帰ってきてよ～千代ちゃん)

ちらりちらりと千代ちゃんが走って行った先に目をやるが戻ってくる気配はまるで無い。

そしてついに青木君が最後のさくらんぼの種を吹き出した。

小鳥すらどこかに飛び去ってしまって、さらさらとさくらんぼの葉っぱのすれ合う音だけしかきこえない。

目の前の青木君をちらりと見上げる。

彼もまたこちらをまともに見れないようすで、あさってのほうを見ながら、また時折目をつぶり何か言いたげに口をもごもごとさせていた。

そのとき、また視線を感じた。

誰もいないはずのさくらんぼのハウスの奥のほうからだ。

わたしが視線を向けるとそこにはシンハくらいの大きさの、「例の色」をした塊がいた。

小さな体に不釣り合いの大きな目玉が今まで見たそれの中のどれよりも気味が悪い。

その化け物はみるみる体のサイズをいつもの大きさに膨らませると、両腕を高く上げて

「ダデー——ナー————————」

と、声を上げた。

「うっそお！なんでこんなトコに！」

わたしは立ち上がると化け物に向かって身構える。

するとわたしの前に青木君が両手を広げて立ちふさがる。

「危ない、冬咲君下がってたまえ」

「下がってって、青木君こそやばいから逃げないと」

経験上いくら男子でも、いや格闘技を修行していたとしてもあれと生身で戦うのは無理だ。



それなのに、

「なあに、任せているんだ！ トウッ！」

なんていって、青木君は化け物へ向かって突っ込んでいった。

化け物が振りかぶったこぶしが青木君へと向かって伸びる。

やられた！

と思ったが、間一髪青木君はパンチをかいくぐり、化け物の内懐に飛び込む。

そして「ズン」と化け物の腹にショートアッパーを突き入れた。

「あ、あれ？ 意外とまともに戦えてる・・・」

「そんなばかな、普通の人間がかなう相手じゃないはずだッハー」

効いているかどうかは別にして青木君は化け物の攻撃をかいくぐり、ドスンドスンと化け物にパンチを当てていた。

見ているとなんだか興奮してくる。

「青木君がんばれー」

思わず声をかける、と青木君がこちらを振り向いた。

その瞬間、化け物のパンチがスキだらけになった青木君の体をもろにとらえた。

青木君は弧をえがいておよそ5メートルほどもとばされる。

あわててシンハが駆け寄る。わたしも恐る恐る近づく。

「だいじょうぶ、気を失ってるだけだッハ」

シンハがそういうのでわたしも青木君の顔を覗き込む。

そこには気絶しているとは思えないようななんとも幸せそうな顔があった。

「もう、しょうがないなあ・・・シンハ！」

「了解だッハー」

シンハが如意宝珠を放ってよこす。

「オン・チンターマニ・ソワカ！」

わたしは変身のための真言を唱えた。

## 5

青木君が巻き込まれないよう、化け物の周りをゆっくりと回りながらビニールハウスの奥のほうへと位置を変える。

「本当はビニールハウスやさくらんぼに被害を与えたくないからハウスの外へと誘い出したいところなんだけど・・・」

ちらりと青木君へと視線をやる。その瞬間化け物がこぶしを振るってきた。

さっきの青木君のように化け物のこぶしをかいくぐると、化け物のボディにショートアッパーを打ち込む。

化け物は「く」の字にひしゃげる。

「さすがにラクシュミーのパンチのほう为上ね」

パンチの強さを確認したわたしは2発、3発と続けざまにこぶしを叩き込んだ。

パンチのあたったところから化け物の体は折れ曲がる。

何とか反撃しようと化け物もこぶしを振るうが、何度目かの戦いにわたしも

「だいぶ慣れてきたみたい・・・」

で、化け物のこぶしはかすらせもしない。

次第に化け物の息もあがってきたように感じたので、トゥインクルファウンテンでとどめを刺そうと間合いを取った。

その瞬間、化け物は鈍い光に姿を変えると宙へと飛び上がり、あろうことかハウスの中で一番大きなさくらんぼの木へと入っていった。

「まさかこのあいだの機関車みたいに・・・」

そのまさかだった。

木の幹に真っ赤な目と口が開き、木の枝は風で動く範囲を大きく超えて曲がる。

そして一番太い枝がわたしに向かって振り下ろされる。

すんでのところまでトンボをうってわたしはその攻撃から逃れる。

「ちょっとお！さくらんぼの木に乗り移るなんて反則でしょお！」

「だいじょうぶ、あいつは根っこのせいであそこから動けないッハ」

「そうか、じゃひとまず離れて・・・」

と、シンハのアドバイスどおり相手の間合いから出て体勢を整える。

化け物は枝をわたしに向かって2度3度と振り下ろすが、むなしくも届かない。

化け物は必死に体をひねり、リーチを伸ばそうとしている。

「よーし、これなら楽勝！トゥインクルロッド！」

わたしはトゥインクルロッドを取り出す。

そのとき、限界までねじられたさくらんぼの木が勢いをつけて枝をふるうと、その枝についていたさくらんぼがまるで散弾銃のようにわたしに向かっておそいかかってきた。



「あだだだだだだっ!!!」



まほろば天女ラクシュミー 3話 了

1

「ごっめえーん わすれてたー」

千代ちゃんからの電話を切ると、急いで身支度を整え、シンハを自転車のかごに放りこむと初夏の日差しの中へとこぎ出した。

「そんなにあわててどうしたッハー？」

前かごの中からシンハがのんきな声でたずねてくる。

「・・・取材よ取材、・・・新聞部の」

「いったい何があるッハ？」

全力疾走中に、質問せめは、つらい。

どうせ遅刻だ、とわたしはスピードを落とす。

「ふう、えっとね高安の犬の宮のところでペット供養祭ってのがあったって・・・」

高島町の高安地区、そこには日本でもまれな動物を神様として祭る祠がある。

昭和の終わりころからその祠で毎年7月の後半の土曜日に、ペット供養祭というイベントを町の観光協会が始めたのだ。

話を聞きつけた愛犬家や愛猫家たちが日本全国から訪れお参りし、亡くなったペットの霊を悼むのだ。

「そこをこないだの緑道のときみたく・・・あああ予習忘れた・・・」

わたしは目をつぶって天を仰ぐ。

「わあ、ぼたん！ちゃんと前見て走るッハ！」

小石に乗り上げたショックでかごから放り出されそうになったシンハがわたしをたしなめる。

「あ、そうだ、ちょうどいい生き字引がいるじゃない」

「何だッハ、生き字引って！」

シンハがむっとした声を上げる。

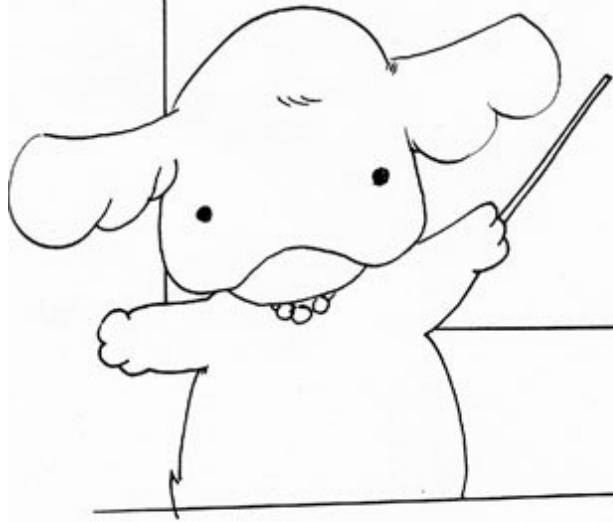
「ねえねえ、犬の宮と猫の宮のお話ってどんなんだっけ？」

「ファインのソーセージ2袋だッハ！」

「ちゃっかりしてるわね・・・」

わたしは首をすくめる。

まんが  
たかはた物語



「犬の宮は、タヌキに化かされていけにえになる村の子供を、旅のお坊さんがかしいぞと思っ

て甲斐の国から犬を連れてきて助ける話だッハ。猫の宮は、飼ってる猫が奥さんに呪いをかけると思った旦那さんが猫に切りつけるんだけど、実は猫がヘビの化け物から奥さんを守ってたんだよってお話だッハ。」

シンハは前を向きながらそっけなく言った。

「えーっ、それだけでソーセージ2袋！ぼったくりよー」

「ちゃんと予習をしておかないぼたんが悪いッハ」

シンハがちらりと振り向く。その瞬間ハンドルを操作してわざと小石に乗り上げてやる。

「うわぁッハ」

と、シンハが足を突っ張る。

「もうぼたんなんか知らないッハ」

どうやらシンハを怒らせてしまったようだ。

「アラ、ごめんなさいねえ。で？ホントにそんなコトあったの？」

「何がだッハ？」

「その、犬の宮と猫の宮の話」

あやまりついでに気になったことをたずねてみる。

「さあ、わからないッハねー」

「何よ、感じ悪いわねあやまったじゃない」

わたしはハンドルを小刻みに揺さぶってやる。

「ちょー、危ないッハ。あの話は僕がこっちに来る前の話だからよく知らないッハー」

「へ、そうなの？」

「そうだッハ。僕がこっち着たのは大同二年、犬の宮は和銅のころの話だッハ」

「ちょ、ちょっとまってよ。西暦で言ってくれなきゃわかんないって」

「まったく、大同二年は西暦807年、和銅は大体708年ごろの話だッハ」

「へー1300年も前の話なのねー」

ずいぶん長生きなんだなこのコ、と妙なところで感心してしまう。

「はい、ここで中間テストの復習だッハ。和銅年間に起こった一大イベントといえバ？」

「え、え、わどう、わど・・・？え？」

「ヒント、なんと見事な・・・」

「平城京？え、あ、そのころの話なんだ！」

「後は古事記や和同開珎、国産の貨幣ができたのもこのころだッハ」

「へえー」

知ってる年号と当てはめるとえらく古いころの話なんだなあとなんとなく実感がわいてきた。

「犬の宮の話だけど、役人に化けたタヌキが人年貢として都に子供を連れてくといって、お坊さんがそれはおかしいっていうんだけど、なんか感じないッハ？」

「え、なにが？」

「なにがじゃないっハ、奈良時代はどんな風に納税してたッハ？」

「ええと、ちょっとまってよ、口分田と租・・・庸・・・調・・・だっけ？」

「そのうちの庸は？」

「確か都で兵役に・・・あ！」



「人年貢だッハ」

「なるほどねー、じゃ、タヌキの言ってることおかしくないじゃない」

「そうだッハ。もうひとつこの時代に東北でどんなことがおきていたかっていう話だッハ」

「どんなっていうと・・・？」

「和銅2年に庄内に出羽柵（でわのき）って言う砦が作られたッハ。大和朝廷による蝦夷地征伐が行われていたんだッハね」

「和銅って言うと、あ、犬の宮の話のころか」

「その後、和銅5年に最上と置賜が出羽の国として陸奥の国から分離されたッハ。このときに高安にあるハプニングが起きたんだッハ。」

「なによハプニングって？」

「高安は陸奥の国から出羽の国になったんだけど、出羽の国では高安がまだ陸奥の国だと勘違いをして年貢を取るのをしばらく忘れていたんだッハ。」

「ちょ」

「しょうがないからまとめて重い税をとろうということで、租庸調のうち、兵役を出した家は破産するとまで言われていた庸を重点的にかけたッハ。」

「へえ、そんなにひどかったの、その庸って？」

「当時の兵隊には食事が支給されなかったッハ。食べ盛り、働き盛りの男をその家族が支えなければならなかったッハ。子供が一浪したあとに、私立大学に入った親みたいなもんだッハ」

たとえが痛いよシンハ・・・

「それともうひとつ、移民政策もこの話には影響を与えていると思われるッハ」

「移民政策？」

わたしは首をかしげる。

「朝廷は出羽の国を整備しようとして、いろんな国の人を無理やり連れて来て住ませたんだッハ。その中に甲斐の国から犬を連れてきた人がいたかもしれないッハ」

「はあ・・・」

「こういった社会の背景の中、役人のミスで重い税を押し付けられた不条理から少しでも気を紛らわすためにこういった話が生まれたんじゃないか、と思うんだッハ。」

ホントかどうかは知らないがなんだか妙に納得してしまった

「どうだッハ、奈良時代の復習。コレでソーセージ一袋は安いつハ」

「えー、まだ続きあんの？」

正直もう頭がいっぱいだ。

たかहतこども園のわきを通り過ぎ、そろそろ高安地区へと入る道が見えてくる。  
と、突然ドーンという大きな音とともに高安地区から大きな土煙が上がるのが見えた。

2

「何？」

自転車のブレーキをかけ、土煙の上がったほうをながめる。

「やだ、犬の宮のほうじゃない・・・千代ちゃん・・・」

「ガス爆発とかじゃないみたいだッハね」

再度ドーンという音とともに2本目の土煙が上がる。

わたしはシンハと顔を見合わせる。

「シンハ、如意宝珠出して！」

「もう変身するッハ？」

「自転車より変身して走ってった方が早いわ」

わたしは自転車を高安の入り口にある火葬場まで走らせそこに止める。

普段人気の無い奥まった火葬場は変身するには絶好の場所だ。

「オン・チンターマニ・ソワカ！」

光がわたしを包み込み、ラクシュミーの衣装を身にまとう。

「いくわよ！シンハ」

言うなりわたしは駆け出した。

橋を渡り、高安の集落に近づくと何人かの人悲鳴を上げながらこちらへ向かって走ってくる。

なるべく目立たないようにわたしは青く茂った田んぼのあぜへと入る。

わたしの姿は何人かの目に入ったはずだが誰もそれに気を止めるようすは見えない。

時おり後を振り返りながら必死になって何かから逃げているようだった。

また、ドーンと音が鳴り響いた。

「何だか知らないけど急がなきゃ・・・」

わたしは再び土煙の上がった方に向かって駆け出した。

猫の宮を囲む木立の向こうにお祭りを知らせる背の高いのぼり旗が見えてくる。

犬の宮はその向こうの小高い丘の中腹にある。

その丘のふもとに50台ほどとめられる駐車場が整備されており、今日はとめ切れないほどに車が並んでいる。

異常なのはその車のうち何台かが腹を向けてひっくり返っていることだ。

「なにこれ・・・」

つぶやいた瞬間また奥の方でドーンという音と土煙が上がった。

その土煙の上のほうに赤い影が見える。

あれは・・・何度かわたしを助けてくれたあの覆面の人だ！

### 3

覆面の方は受身を取れず、アスファルトにしたたかに体を打ちつけた。

その彼にむかってジャリッ、と歩みを進めるものがある。

体長3メートルはあろうかという熊？・・・いやタヌキの化け物だ！

タヌキはゆっくりと口を開き動けない彼へと狙いを定める。

「たあ—————ああ！」

そのタヌキに向かい横からとび蹴りを食らわせる。

ゆっくりと崩れ落ちるタヌキと覆面の彼の間に入り、彼をかばうように身構える。

「だいじょうぶ？」

チラリと彼を見て安否を尋ねる。

「・・・ああ・・・」

そういうと彼は何とか立ち上がった。

顔を正面に向けるとタヌキもまた起き上がっていた。

タヌキは大きく息を吸い込む。

みるみるおなかが膨らんでくる。

「くるぞ！」

覆面の彼がさけぶと同時にタヌキがパンパンに膨らんだおなかを叩いた。

ドン！

衝撃波が襲う！

バッシャー————ン・・・・・・・・

わたしたちの後ろにあった「ため池」から衝撃波を受けて水柱が立ち上る。

彼のおかげですんでのところで避けることができたが、もしあれを食らっていたらと思うとぞっとする。

と、視界に見覚えのある影が見えた。

だいぶ離れた場所にいるが、こっちに向かってカメラを構えているのは千代ちゃんだ！

「はやくにげて！」

向こうへ行けと彼女に手を振る。と、千代ちゃんがこちらを指差す。

「へ？」

と思った瞬間、横から強い力で押されわたしはその場から弾き飛ばされる。

振り返ると今わたしがいた場所には覆面の彼が横たわっており、その足にはタヌキの腕が振り下ろされていた。

わたしはすぐにタヌキに向かって飛び掛るがタヌキはそれをヒョイとかわし間合いを取る。

「ぬ、おおお・・・」

背後からは彼の辛そうなためき声が聞こえてくる。

「ごめんなさい！」

今度はスキを見せないよう、タヌキから目をそらさないようにして彼に声をかける。

「とにかくアイツを彼からひきはなさなくちゃ・・・」

わたしはタヌキのふところに飛び込み、2、3発パンチをおみまいして、覆面の彼と反対側に回り込む。狙い通りタヌキはこちらへと注意を向ける。

「さあ、来い！」

とかまえる視線の先、先ほどのため池から見えているだけでも5メートルはあろうかという大きなヘビが鎌首をもたげて覆面の彼を狙っているのが見えた。

覆面の彼は足を押さえて動けない。

「もう！」

殴りかかってきたタヌキを跳び箱の要領で飛び越し、再び覆面の彼の元へと寄り添い大ヘビをけん制する。

前には大ヘビ、後ろには化けタヌキ、足元には動くことの出来ない覆面の彼。

絶体絶命のピンチだ！



ほっぺたをタラリと汗のしずくがつつたって落ちる。

「とにかく動けるようにしなくちゃ」

わたしは覆面の彼を抱き上げる。いつかの反対、逆お姫様抱っこだ。  
重さは何とかなるが、大きいので動きづらい。

「気をつけろ！来るぞ！」

彼の声に振り向くとタヌキがまた衝撃波を放つ準備をしていた。

「避ける！」

彼の叫び声に合わせて飛び上がり何とか衝撃波をやり過ごす。

しかし、そのタイミングにあわせて大ヘビがアタマをぶつけてきた。

「キャアアアアアアアアア・・・」

空中から叩き落されたわたし達は離ればなれになって地面へと叩きつけられる。

彼は気を失ったのかピクリともせず倒れ伏している。

ズルリ、ズルリと大ヘビがため池から這い出してきた。そしてその長いしっぽをわたしへと伸ばしてくる。

「逃げなきゃ・・・」

と思うが、叩きつけられたダメージで思うように体が動かない。

ついにヘビのしっぽはわたしを絡めとると、ぐるぐる巻きにしてそのまま宙に持ち上げた。

「ラクシュミー！」

シンハの声がする。

見ると離れた場所からシンハがこちらを見上げて声を張り上げている。

「・・・シン・・・ハあああああああああつ！！！！」

大ヘビがわたしの体を締め上げる。

みりみりと体中に激痛が走る。

「ラクシュミー————！」

さけぶシンハに千代ちゃんが駆け寄ってくる。

シンハは千代ちゃんに抱き上げられて保護されたみたいだ。

シンハが暴れて千代ちゃんは押さえつけるのに必死だ。

そのとき大ヘビが再びわたしを締め付けるために力をこめた。

「あゝあああゝあああゝあああゝ————つ！！！！」

あまりの痛みに目がかすんでくる・・・

その時、千代ちゃんの体が強い光に包まれた。

4

ゴウッ！

ゴウッ！っと、激しい風きり音とともに真っ赤な炎がヘビへと向かって飛んでくる。

大ヘビの頭は炎に包まれ、たまらずわたしを取り落とした。

ドンッ！

と、タヌキが衝撃波を炎の飛んできたあたりに放ち、土煙が上がる。

するとその場所から一瞬早く緑色の影が飛びあがり、空中から火の玉を打ち出した。

火の玉はタヌキの足元に炸裂し、炎の壁ができる。

緑の影は空中で一回転すると、倒れているわたしのそばにふわりと舞い降りた。

「だいじょうぶ？ぼたんちゃん・・・」

やさしく手を差し伸べる彼女は

「・・・千代ちゃん・・・」

だった。

差し伸べられた腕の手首には真っ赤な丸い飾り布で覆われている。

見上げると萌葱色でノースリーブのミニ丈の浴衣、という表現が果たして適切かどうか、それをベースに妙に立体感を増した胸元に、如意宝珠を埋め込んだ鳥を模したような飾りがついている。

背中にはかわいらしい鳥の翼が天使のようについていた。

千代ちゃんのトレードマークとも言える真っ赤な髪飾りはソフトボールほどの大きさにふくらみ、その先のツインテールはそれぞれ三つの束に分かれ逆立っている。

「ラクシュミー！」

シンハもわたしの元へと駆け寄ってきた。

まだ思うように立ち上がれないわたしに向かってシンハは前足をかざすと、何か呪文を唱え始めた。するとシンハの前足から何かあたたかな波動のようなものがわたしの体へと流れ込んできて痛みがだいぶうすらいでくる。

「ぼたんが文珠を取り戻してくれたおかげでだいぶ力が戻ってきているッハ」

「ありがとう、シンハ、千代ちゃん」

まだふらつくがようやく何とか立ち上がる。

目の前の炎の壁の向こうに見えるタヌキの影が大きくなった。

「来るわ、千代ちゃん」

シンハを抱き上げながらわたしは言った。

ドン！

と大きな音が響くと炎の壁が吹き飛んだ。

衝撃の余波は跳びのいてかわす。

「なるほど・・・空気を吸い込んで衝撃波をだすッハね・・・千代！あいつの回り全部を炎の壁でつつむッハ！」

「オッケー！」

言うなり千代ちゃんは飛び上がり、空中からタヌキへ向けて手のひらから炎を打ち出す。



シンハの言うとおりにタヌキは炎の壁につつまれた。





シンハはちゃっかり千代ちゃんの自転車のかごに乗っている。

「あれはラクシュミーって言うッハ」

「ヘーラクシュミーねー、インド系？ あれ、亀岡文殊って神社じゃなかったっけ？」

「違うッハ、大聖寺ってお寺だッハ！」

千代ちゃんの勘違いにシンハがむすっとした声を出す。

「それよりシンハ・・・どうして、どうして千代ちゃんまで巻き込んだの・・・」

わたしの質問に千代ちゃんは足を止めた。

「・・・ああでもしなければぼたんはやられていたッハ。 しょうがなかったッハ」

「だからって、もしもっと強い敵が出てきたら千代ちゃんもこうなっちゃうかもしれないのよ」

「ぼたん・・・」

シンハがしょんぼりした顔でわたしを見上げる。

そのとき、千代ちゃんがわたしの肩にぽんとやさしく手を置いた。

「大丈夫だよ、ぼたんちゃん、二人でやれば平気だよ」

「千代ちゃん・・・」

「ぼたんちゃん一人でしょい込まないでよ・・・一人であんな大変なこと・・・だめだよ」

「・・・千代ちゃん・・・」

やさしく微笑む千代ちゃんを見て、なんだか涙がこみ上げてきた。

思わずわたしは千代ちゃんに抱きついた。

はずみで自転車が倒れ、シンハがかごから放り出される。

千代ちゃんが「よしよし」とわたしの背中をなでる。

「二人でラクシュミーだよ、ぼたんちゃん・・・あれ、そういえばそんなアニメあったよね、むかし、二人はナントカっての・・・」

湿っぽいのがいやな千代ちゃんは話を変えようとする。おっけ、わかった終わりにしよう。

「・・・ああ、あったねそんなの。なんだっけ？」

わたしは涙をぬぐって笑顔を作る。

「そんなことより、二人ともラクシュミーじゃわかりづらいッハねー」

田んぼのあぜ道へ投げ出されたシンハが首を左右にひねりながら這い出してきた。

「ラクシュミーナントカってつけろってこと？」

千代ちゃんがシンハを抱き上げながら言った。

「ぼたんは正体がばれるのいやだッハ」

シンハが自転車を引き起こしているわたしをチラリと横目で見る。

「だってそうでしょー、ばれたら大変だよーいろいろ」

「東京のどこかの大学に一芸入試とか出来るんじゃない？」

「そんな入りかたしたくないわよ」

わたしは肩をすくめる。

「でも、まあやっぱり必要よね・・・決めた、私はミレニアム！」

千代ちゃんは人差し指をつきたててそういった。

「え～、中二病くさいし言いづらそうだよ～」

いってわたしは自転車のハンドルを千代ちゃんにわたす。

「いいじゃんホントに中2だし・・・じゃあぼたんちゃんなら自分になんてつけるの？」

「わたしは～・・・んんん・・・ピオニィ・・・」

言うなりシンハが吹き出した。

「どうしたのシンハ君？」

「ぼたん、じつは前から考えてたッハね、普通そんな単語とっさに出てこないッハ」

「なんて意味なの？」

「花の牡丹だッハ」

「どうしたんだ、いつものお前らしくないぞ・・・」

あばら家の六畳間、せんべい布団に横たわっている赤木に湿布を張りながら、青木は言った。

「文珠一個のダデーなら余裕だったじゃないか。昨日のリハーサルだって危なげなく勝ったのに・・・」

そういってもう一枚、湿布であぎを隠す。痛みのためか冷たさのためか、赤木は声を上げる。

「日本中のお客さん相手にあがっちゃまったのか？」

言いながら湿布を張る青木にまたもうめき声で答える赤木。

言葉だけ聞けば青木の台詞は嫌みっらしいが、その口調からは赤木を心配する様子がにじみ出ている。

「・・・なあ・・・」

「ん？」

赤木が口を開いた。

「・・・今日のタヌキ・・・本当に文珠1個だったのか？・・・」

青木に目線だけを動かし赤木が尋ねる。

「あ、ああ、昨日までの文珠が37個だったろ、タヌキに一個、へびに一個使って、ええと5かける7で・・・ほら、ちゃんと35個ある」

「・・・そうか・・・」

青木の広げた文珠を横目で見ると、赤木は目をつぶった。

「日本全国からお客さんが来るなんて聞いて奮発したんだがな、ま、こんな日もあるさ」

青木は文珠をジャラジャラと巾着袋へとしまいこんだ。

「まずはゆっくり休んで早くよくなってくれよ、友達が増える前にお前にもしものことでもあったとしたら俺は・・・俺は・・・」

「だいじょうぶ、俺たちは一緒だ・・・どこまでも・・・な・・・」

赤木は瞳を閉じたまま答えた。

青木はしばらく赤木の顔を見つめていた。

やがて赤木がやすらかな寝息を立て始めると、立ち上がり、となりの部屋へ移り、

「おやすみ、赤木・・・」

といてふすまを閉めた。



## おまけ シンハ先生の猫の宮の話

---

本編の中ではろくに説明できなかったのでおまけコーナーで猫の宮のお話をするッハ。

犬の宮から約70年。高安に住む夫婦が猫が欲しいと観音様にお参りして猫をもらうッハ。

何年かするとその猫が女房に向かってうなり声を上げるようになるッハ。

おかげで女房が具合が悪くなってしまうものだから旦那が怒って切りつけたッハ。

そうしたら猫が屋根に駆け上り大きな蛇をくわえてきたッハ。

でも猫は旦那が切りつけた傷がもとで死んでしまったッハ。

なお、この夫婦が犬の宮事件の子孫で、ヘビはタヌキの血をなめて化ける力を身につけたという裏設定もあるッハ。

さて、どうしてこの夫婦が猫を欲しがったかと言うと、子供がないからだ観光案内の看板なんかには書いてあるッハ。

けれど図書館にある文書を比較してみたところ、蚕を食べる鼠を退治するために猫を欲しがったと書いてあったッハ。

つまりこの話から昔はあの辺で養蚕業が盛んだったと言うことが垣間見れるわけだッハ。

ちなみに蚕のえさの桑は堤防などの土留め（どどめ）として使われていたッハ。

よく汚らしい色をさす「どどめ色」はこの桑の実の色をさすッハ。

熟すに従って緑から赤、そして濃い紫色に変わるのが得体の知れない色の理由だそうだッハ。

以上、コレでソーセージ一袋は安いッハ。





「うわあ、おっきい……」

千代ちゃんはそういうと粘液でぬれる豆をつつく。

そして黒く硬い二本の棒を中に突き立てると、ニチニチと音を立て乱暴にかき回し始めた。

棒を引き抜くと、つ、と細い糸を引く。

わたしは熱っぽさでぼうっとした頭でその様子を眺めていた。

「このあつつのによく納豆なんて食べれるわね……」

朝からのこの暑さでわたしは食欲がわからない。ましてや炊き立てご飯に納豆なんて……

「しっかり食べないからばてるのに……」

千代ちゃんが納豆をご飯にかけながら言った。

「ちゃんとあつつい時用の食べ物があるのよっと……」

そういうとわたしは台所に立ち上がり、どんぶりにご飯と三奥屋の古漬け「晩菊」を入れてかき混ぜながら冷ます。そしてラップの上にあけておにぎりに握る。

「むー、コレだと食べられる……」

グラスに冷たい麦茶を半分ほど注ぎ、口の中の晩菊ご飯を胃袋へと流してやる。

「行儀悪いなあ」と言いたげな千代ちゃんの視線を無視して再び台所へといき、冷蔵庫から三和漬物の「だし」とカレー用のスプーンを持ってくる。

何を始めるんだらうと興味を持っている千代ちゃんの納豆ご飯の茶碗に、有無を言わずスプーンいっぱい「だし」をべいっとかけてやる。

「ちょっとお、ナニするのよ！」

と語気を荒げる千代ちゃんに、

「いいからだまされたと思って食ってみ」

と、うながしてやる。

「あ、さっぱりして食べやすくなった」

「でしょ、夏に納豆食べるならこれないと……」

そういうわたしは「だし」を冷奴に一さじ乗せて、崩しながらいただく。

8月15日、お盆も終わりの今日、わたしは千代ちゃんと二人で遅めの朝食を食べていた。

昨夜お盆の挨拶に来た千代ちゃん一家から千代ちゃんを引き剥がし、夜遅くまでシンハもまじえて今日明日の対策について話をしていたので起きるのが遅くなったのだ。

「今までの化け物の出現状況を分析すると、さくらんぼのときを除くと人が大勢集まっている場所に現れるのよ」

このことに気がついたのは千代ちゃんだった。これが前回「犬の宮」からの帰り道の話で、その後、人の集まりそうなイベントには、パトロールがてら二人で積極的に参加するようにした。

8月の第一日曜、糠野目のカッパ祭り。これは昔近くで悪さをしたカッパ、そのカッパの結婚相手を模した山車を引っ張るお祭りだ。世界一長いカッパ巻き作りに挑戦したりもする。

8月10日のごんぼの実祭り。マジックテープのようなとげのついた、ゴルフボール大のごぼうの実、コレを好きな相手に投げつけて、家に帰るまで気がつかなければ恋の願いがかなうという、昭和縁結び通り商店街の名前のもとになっているロマンチックな伝説があるお祭りだ。

とはいえ、実際のところは、小学生が面白がってチカチカする「ごんぼの実」のぶん投げあいを



する少々危険なお祭りになっている。

両方のお祭りをわたしたちは当初の目的も忘れて満喫した、幸いなことに例の化け物は現れなかったが、これではいかん！と活を入れなおしたのが昨晚のことだった。

「えーと、今日の予定が10時からスノーアクティブフェスタに、夕方からみこしパレード、終わったら音楽イベントね……」

「またテレビに映るかな？」

千代ちんの言葉にわたしは

「ああ……」と頭を抑える。

以前から都市伝説的にささやかれていたラクシュミーの存在は、先日の犬の宮の一件で、米沢のケーブルテレビによって千代ちんとともに白日の下へとさらされた。遠目からの撮影で音声が入っていないのが救いだっただ。

その後動画投稿サイトで転載に転載を重ねられ、某巨大掲示板ではさまざまなジャンルでスレッドが立てられた。「某マッチョ系俳優が泣きながらわたしたちと戦う画像」というコラージュを見たときにはこっちが泣きたくなった。

オタクっ気のある友達が言うにはコスプレする人まで現れているらしい。

ラクシュミー効果で物見遊山の観光客が増えて、名物の種無しぶどう「デラウェア」の売れ行きがよく、お父さんの機嫌がいいのが唯一の救いだ。

こうした動きに対し千代ちんは割りと好意的に見ているが、わたしは世間の注目っぷりにすごいプレッシャーを感じていた。

「変身、絶対ばれないようにしなきゃダメだかんね！」

「でも、変身したら決めポーズとかしなきゃなんないと思わない？ 口上とかさ、まほろばの大地に千年の安らぎを！ ラクシュ・ミレニィ！ なーんて」

千代ちんがくるくる回り、最後にビシッとポーズを決める！

「……それにあわせろって言うの？ わたしも……」

ちなみに、以前に名づけた「ミレニウム」という名前は、語呂が悪いので、私の「ピオニィ」にあわせて「ミレニィ」に省略された。

## 2

「あの、なんで夏なのに雪があるんですか？」

スタッフらしい背の高いメガネのおじさんに千代ちんは物怖じしないはずねる。

「えっ、あっはい、これはですね、飯豊町のほうに雪をおっきな雪室の中に入れて貯めておいて、夏場に冷房なんかを使うところありましてですね、そこからダンプで5台分くらいもらってくるんですよ」

「へええ……」

単管パイプを組んで作られた高さ8メートルほどの人工的な山、ズンズンとクラブ系の音楽が流れる中、そこから何人ものスノーボーダーが滑ってはジャンプし、ワイルドに、華麗に、エアーを決めていた。

スノーアクティブフェスタ。この事業も十数年続いており、お盆だというのに近隣だけではなく青森や東京、はては関西からまで参加希望者が来ているという。

「あ、そり貸しますだって。ね、ね……」

「いやよ、はずかしい！」

みなまで言う前に断固拒否する。千代ちゃんは露骨に残念そうな顔をした。

「さぁ皆さんお待ちかね！われらが布施忠の登場だ！」

MCがそうアナウンスすると会場がどよめく。

するとTシャツ姿のおじさんが、今までの誰よりも力強くワイルドにエアーを決めた。

「おおおおおおおおお……」

会場から歓声があがる。

「ね、ね、だれだれ？」

千代ちゃんが興奮してわたしの背中をばしばし叩く。

「なんか昔若いころプロだったみたいよ、スノボはしないから詳しく知らないけど」

背中をさすりながらわたしは答える。

「お譲ちゃん、忠はね、スノーボードのトップブランド、バートンのグローバルチームに所属していた唯一の日本人プロだったんだぜ。一番乗ってたときなんか、なみいる世界のプロのすべりを集めたDVDのおおとりまでつとめたんだ」

近くにいた、スタッフらしき丸っこいおじさんが、まるで自分のことのように自慢げに教えてくれた。

「ねえちょっと静かなところに行かない？」

わたしたちは会場でかき氷を買うと、それをもって「幸橋」という小さな橋を渡り、裏通りを東に向かって歩いた。

しばらく行くと小さな堀と木立に囲まれた巖島神社、通称弁天様が見えてくる。

目の前にある縁結びどおりから新高島音頭が流れてきて静かにはいかないが、木陰の涼しさが心地良い空間を作っていた。

「御仮家の祭りって言って、安久津八幡神社のお神輿が屋代地区を回ったあとにその日のうちに帰れないからここに泊まったんだって。それを青竹に飾ったちょうちんでお迎えしたから「青竹ちょうちん祭り」っていうんだってさ」

「ふーん……」

千代ちゃんは、かき氷をじゃっくじゃっくとつつきながらわたしの説明に退屈そうに相槌を打った。

「なかなか出ないもんだね……」

どうやら千代ちゃんは化け物退治のことで頭がいっぱいの御様子だ。

「そうだね、でも出ないなら出ないで平和でいいと思うんだけどなあ」

わたしは正直化け物退治はこりごりだ。

「それは困るッハ、あの化け物が出てきてくれないと文珠が回収できないっハ、あ、それと僕も少し氷が食べたいっハ」

シンハがスニーカーをぺちぺち叩きながらうったえた。わたしはカキ氷の容器を大ぶりに割ると

、その上にかき氷を盛って差し出してやる。シンハはまってましたとむしゃぶりついた。

「あの化け物ってさ、何が目的なんだろうね？」

「.....そういえばそうよね」

千代ちゃんがふと口にした疑問、言われてはじめて気がついた。

「最初が学校でしょ、次が旧高畠駅の公園、その次がさくらんぼで、こないだが犬の宮.....共通点とかないよね.....」

わたしは首をひねる。

「ねえシンハ、心当たりとかないの？ 文珠を盗んだ犯人の.....」

千代ちんの問いかけにシンハは顔を上げれずにいた。

「.....わかんないんだ.....しょうがないなあ.....」

「.....いつもあの時期はたいへんなんだッハ。 受験生の波、波、波！ 松が明けてやっと休みもらって、小正月までぐっすり寝ないと疲れなんか取れないんだッハ」

千代ちんのさめた物言いに、切れたシンハがまくし立てた。

「よ、要するに、1月の8日から15日くらいまでになくなってたってコトよね」

わたしはシンハをなだめるように確認を入れた。

「そういうことになるッハね」

「文珠のこと知ってるのは？」

「この時代では君たちくらいしか知らないッハ」

「この時代？」

「そうだッハ、文珠が僕の力の源だって言うのは、歴代のラクシュミーにしか教えてはいないッハ。前のラクシュミーは明治の初めのころの話だから、もう生きてはいないはずだッハ」

「歴代、ねえ.....」

歴代なんて聞くとなんだか自分たちがすごい存在なのかなと錯覚してしまう。

ともあれ文珠を奪った犯人については三人寄ってもわからずじまいだった。

### 3

「いえーい、アメちゃんゲット！」

体を真っ赤に塗って赤鬼に扮したおじさんが沿道へと向けて投げたあめ玉を、千代ちゃんは幸運にもつかみ取った。

夜のとばりが落ち、真っ赤なちょうちんに火がともった。

御仮屋の祭りのおみこしパレードの始まりだ。

商工会、建設組合、わかわしバレーなどなど、例年6、7台のおみこしが商店街を練り歩く。

いつのころからは知らないが、縁結び通りと、まほろば通りの交わる交差点で、モチやら、アメやら、ビーチボールやらをまくようになった。

千代ちゃんが手にしたそのアメは、商工会青年部のおじさんが投げたモノだった。

「なにかご利益あるのかな？」

千代ちゃんが手にしたアメをわたしに見せながらうれしそうにいった。

「さあ？」

そっけなく返事したのは、ふみつぶされないようシンハを抱き上げているため、アメの争奪戦に参加できなかったからではない。決してない。

そうこうしているうちに、青い龍のおみこしが交差点へと現れた。

「泣いた赤おに」とならぶ浜田広介のもう一つの代表作「りゅうの目のなみだ」の龍を模したおみこしだ。

役場男性職員の手によって中華街の蛇踊りのような演舞を見せ、観客の歓声を受ける。

ひとしきり演舞が終わり、龍がまほろば通りに流れていこうとしているとき、とつぜん場違いな悲鳴が上がった。

悲鳴の主は、龍のおみこしに随伴してきた、黄色い龍のずんぐりむっくりした張りぼての着ぐるみ、いや、着ぐるみの後ろで尻もちをついているおじさんだ。

着ぐるみは不気味な光を放ちながら、むくむくとその大きさを増し、

「ダデーナー——！」

と大きく叫び声を上げた。

「来たッハ！」

「ぼたんちゃん！」

「うん！」

わたしたちは顔を見合わせると人目につかなそうな三郎薬局のかけへと駆け込んだ。

と同時に、黄色い龍の変化に気がついた人々の悲鳴が聞こえてくる。

「いそぐッハ！」

シンハが如意宝珠をよこす。

『オン・チンターマニ・ソワカ！』

二人は声をハモらせてラクシュミへと変身した。

「行かなきゃ！」

と、かけ出そうとするわたしの肩をミレニィがつかんで引き止める。

「どうしたのよ？」

とふりむくわたしに、ミレニィは人差し指で上を指す。

「どうせなら、派手に行かなきゃ」

といって彼女はわたしの返事も待たずに三郎薬局の屋上へと跳びあがった。

「ん、もう！」

わたしも後を追う。

屋上へと降り立つとすでにミレニィは交差点を見下ろしている。

小走りで近寄ってミレニィの後ろに立った瞬間、彼女は大きな声で

「そこまでよ！」

と叫んだ。

黄色の龍と御祭りの観客がいっせいに彼女に視線を集める。

「まほろばの大地に千年の安らぎを、ラクシュ・ミレニィ！」

そういうと彼女は見得を切った。

そして、あんたも早くやんなさいよ、といわんばかりに目くばせしてくる。

心の準備も何も出来ていないわたしはアタマが真っ白になって、

「ピ、ピピピピオニィ」

と、噛みながら、それらしいポーズをとるのが精一杯だった。

「楽しいお祭りをメチャクチャにしようなんて許せない！ 行くわよピオニィ！」

そう言うとミレニィは黄色い龍めがけて飛び降りた。すぐにわたしも後を追う。

「づああああ！」

ミレニィのキックが龍の鼻面へと突き刺さる。

「はああああ！」

衝撃で下がった龍のあごを、目の前に着地し沈み込んだわたしが、伸びあがりざまに掌底で突き上げる。

黄色の龍は信号機の高さまでその体が跳ね上げられ、受身もとれずに地面へと激突した。

背中合わせで龍の挙動を警戒するわたしたちに、歓声と、拍手と、カメラのシャッターがいっせいに浴びせられた。

黄色い龍は片手をつきながらゆっくりと立ち上がろうとする。

「私は胸から上、ピオニィは腰から下よろしくね」

そう言うと、ミレニィは背中の中の羽を使ってわたしの背中をなで上げる。

「わ、わかった」

ぞくりとするその感触に、彼女が何をしようとしているのか理解する。

「ゴウ！」

黄色の龍が立ち上がり、わたしたちに向かって威嚇の声を上げた。

その声がまさにゴーサインだった。

二人同時にとび出すと、龍に向かって連続攻撃を叩き込む。

空を飛べるミレニィは、約2メートルほど浮いて連続で回るようにキックを、私は地に足をつけてパンチやひじを叩き入れる。

龍は必死にガードしようとするがとても手が足りない。

じりっ、じりっ後ろに下がっていく。

すごい……

この前は千代ちゃんまでひどい目にあうんじゃないかって不安に思ってた。

でも違った。

体が軽い。

一緒に戦う仲間ができたっていう気持ちがそうさせているのかな。

やられる気なんてまるでしない。

二人いるってサイコー、もう何も怖くない。

「づああ！」

ミレニィがひときわ強く黄色い龍の頭を蹴りつけた。

「うりゃあ！」

バランスをくずした龍を思いっきり蹴り上げる。

龍はまるで風車のようにぐるぐると回転し、頭から地面に激突すると痙攣した。

「いまよ！ピオニィ！」



ミレニィが上空の龍めがけて火の玉を何発も何発も撃ち込んだ。しかし、流れ出る水の壁に阻まれてダメージを与えられないようだ。

「ピオニィ、ミレニィ、こうなったら空中戦しかないッハ！」

「なるほど、近づいて叩き込めってことね」

いうなりミレニィは飛び上がった。だけど……

「なにしてるッハ！ピオニィ！」

シンハが怒鳴る。

「や、だってわたし羽生えてないし……」

「生やせばいいッハ、イメージするッハ」

「イメージったって……」

「ミレニィは竹にすずめ、ピオニィは蝶にボタンだッハ！」

「何よそれ、麻雀と花札じゃない」

「いいからチンターマニに手を当てて、蝶の羽をイメージするッハ」

わたしは言われたとおり、胸の如意宝珠に手を当てて、妖精のように背中に蝶の羽のはえたピオニィの姿を思い浮かべる。

蝶の羽……蝶の羽……

念じていると背中がなんだか温かくなってくる。

不意に、シャララン、と、すずやかな音がしたかと思うと、背中のリボンが大きな蝶の羽へと変わっていた。

「よーし、行くッハ！ピオニィ！」

シンハの掛け声とともにわたしは屋上をけて飛び立った。

見るとミレニィは、何とかよいポジションから攻撃を仕掛けようと龍の周りを飛び回っているが、抵抗にあってなかなか有効な攻撃を与えられない様子だ。

わたしは羽こそ蝶だが、まるでトンボのような勢いで突き進み、ミレニィに気を取られて、下からの攻撃に対して注意がおろそかになっている龍のあごを、掌底で思い切り突き上げた。

「ギャオオオオオオオオオオン……」

龍は痛みで悲鳴を上げ、頭を上に向け空中で一本の棒のようにのけぞった。それとともに龍の目の涙も止まる。

「ナイス！ピオニィ！」

ミレニィは、いまだとばかりに龍の体に至近距離から炎の玉を次々と撃ち込んだ。

「ギャアアアアオオオオオオオオオオン……」

至近距離からの炎の連撃は、龍の体すべてを炎で包み込んだ。

パニックになった龍は身をよじって何とか炎を消そうともがく。

と、突然龍が急降下を始める。

「そうか、地面の水で……」

と、思った瞬間わたしは龍の角へと飛びついた。

地面へと向けて加速をつける。

気がついた龍がブレーキをかけようとする。





ふたたびわたしは覆面さんへと顔を向ける。

彼は、先ほどと変わらず眉間にしわを寄せ、ピクリとも動かない。

彼の顔を見ていると今までのことが走馬灯のように思い浮かんでくる。

中学校で、化け物に横から体当たりして助けてもらったこと。

旧高畠駅の公園で、わたしを抱きしめて化け物の攻撃から守ってくれたこと。

犬の宮では、たぬきの攻撃を代わりに受けてくれた。

そして今日の龍の噛み付き。彼が龍の口を支えてくれなかったら今頃.....

いつも彼に助けてもらってばかりだった.....

「決めた！ ミレニィ、心臓マッサージお願い！ わたし.....人工呼吸する！」

「人工呼吸？ だってそれって口と口とで.....」

ミレニィが驚いた顔をしてわたしを見る。

「今まで何度も彼に助けられたんだもん。今度は.....わたしが助けなきゃ！」

彼をあお向けに寝させる。

そして.....

そして、口を出すために覆面をはぎ取った。

「！」

「あ、赤木！.....君」

ミレニィがのぞきこんで大きな声を上げる。

でも誰だっていいじゃない。今、ここにいるのは、生死の境をさまよっている、何度もわたしを救ってくれた命の恩人だ。

今、彼を助けられるのはわたしだけ。迷ってなんかいられない。

「ミレニィ、お願い。確かテンポは.....」

「もしもしカメよだっけ？ いくよ！」

体育の時間に習った心肺蘇生法、ミレニィも覚えてた。

鼻をつまみ、あごを上げる。

そして.....

わたしは大きく息を吸い込んで、赤木君の口に唇を重ねた。

ぷうー はっ ぷうー

大きく二度息を吹き込む。

ついで、ぐっ、ぐっ、ぐっ、と手のひらを重ねたミレニィが、赤木君の胸の中央をリズムカルに刺激する。

「.....どっ、しって、そっ、なっに、のっろ、いつの、かつ」

心臓マッサージ1セットの30回が終わった。

わたしはふたたび大きく息を吸い込んで、赤木君の口へ空気を送り込む。

と、赤木君の体が小刻みに震え、

「ガ、ガハッ」

と、大きく息を吐き出すなり赤木君が飛び起きた。

突然の動きを避けられず、ミレニィは弾き飛ばされ、わたしはしたたかに頭突きをもらう。

ぶつめた頭を抱えているわたしの横で、赤木君はまだ呼吸が普通ではなく、むせているような音

をたてているようだ。

「つつつ……命の恩人にとんだご挨拶ね……」

ミレニィが、ぶつけたおしりをさすりながらぼやく。

「ここは……おれはいつたい……」

赤木君は、事態を把握しきれていないのか、呆然とした顔でわたしたちの顔を交互に見ている。

その顔を見ていると、なんだかぶつけた頭の痛みとは別の涙がこみ上げてきた。

「お姫様のキッスで王子様の呪いが解けたところよ」

「え？」

「な？」

ニヤニヤしたミレニィと、驚いておそらく顔が真っ赤になっているわたしの顔を見比べて、赤木君が事態を把握したのか頬を赤らめる。

「ちょ、ちょっとなんでそんな言い方、そんな……わたし……た、ただの救急救命処置で……」

「ちゅー ちゅー ちゅー めー？」

「きゅーちゅーちゅーめー！ 医療行為だからノーカンなのノーカン！」

わたしたちのやり取りに赤木君は言葉が出ない。

「はいはいわかりました。とりあえず、ココをはなれましょ。」

立ち上がったミレニィがお尻をはたきながらいった。

「あなたも顔を隠していたってことは、正体がばれたくないんでしょっと」

いいながらミレニィは赤木君の肩に手を回した。

「でも、町みんなは？」

まだ助けの必要そうな人はまわりにたくさんいた。

「私らだけじゃとっても手が足りないし、それにもうだいぶエネルギーも使ったわ。助けてる途中で変身が切れたら、それこそいろんな意味でたいへんでしょ」

ミレニィのいうとおり、赤木君が息を吹き返したことに安心したのか、なんだか急にどっと疲労感が襲ってきたような感じがする。

「じゃ、とりあえず人気の無いところ、っていうと……」

「羽山公園あたりかしら」

わたしはミレニィの反対側から赤木君の肩に手を回す。そして、ゆっくりと宙へと浮かび上がった。

羽山公園は、お祭りをしている商店街から屋代川をはさんで北に約500メートルほどにある、羽山の中腹にある公園だ。わたしたちはそこへ向かって、赤木君に負担をかけないようにゆるゆると宙を進んでいく。

眼下を見ると、先ほど龍の吐き出した水が、屋代川の手前にある水路を超えて屋代川へと流れ込んでいた。そのせいで、この時期はほぼ枯れかかっている屋代川が、まほろばどおりと交差するあたりから急に大きな流れになっていた。

「ねえ、ほんとにだいじょうぶかな……」

「……いや、だめだめ、後は消防と警察に任せよ、ね」

わたしの問いに、ミレニィはしばしためらったが、頭を振って再び羽山公園へと向き直った。  
確かにこうして飛んでいるのもだんだんつらくなってきた。

「ったく、ナニ考えてるのかしら、あのフードの男ってのは……」

ミレニィが強い口調ではき捨てるように言った。

彼女も眼下の事態に関われないことが心苦しいんだなと思った。

6

「ぶるあああああああああー、重たかったー」

しばらくして、ようやく羽山公園へとわたしたちは降り立った。

ミレニィは赤木君をおろすと、少しはなれたところに大の字に寝転がる。

「長距離、飛ぶのが、こんなに、しんどいとは、思わなかった、わね……」

わたしも地面に両手をついて、肩で息をする。

「そういえば、息してないのに、気い取られてたけど、アレにかじられたのよね？ そっちはだ  
いじょぶなの？ 赤木君？」

「そういやそうよね」

わたしの疑問にミレニィは、寝返りをうち、這いながら赤木君のもとまでいくと、彼のおなか  
をペタペタとなでた。

「あ～、チョッとあぎに、ってかカッチカチ。どんな鍛え方してるのよ赤木君？」

ミレニィのボディタッチに顔を赤らめていた赤木君だが、ふと表情が真剣になる。

「なぜ……どうして……俺の名を……」

赤木君が不思議そうにわたしたちの顔を見た。

わたしたちも顔を見合わせる。

「ああ、そうかこんなカッコじゃわかんないわよねー」

「いいよね、ばらしても？お互い様だし」

いうなり千代ちゃんは変身をといた。

「ほら、ぼたんちゃんも……」

「いやほら、わたしさっきあんなことしたばっ、ああー！ いま名前で呼んだー！」

「ほらほら、もう観念してばらしちゃいなって」

きょとんとした顔でわたしたちのやり取りを見ている赤木君の前で、わたしもしぶしぶラクシ  
ュミーの姿からもとの姿へと戻った。

「竹田……さんと、冬咲……さん……」

「みんなには内緒だからね」

千代ちゃんが人差し指を口に当てる。

そのとき、ガサッ、と後ろの茂みから何かが動いたような音がした。

その音に振り返ると、そこにいたのは旧高畠駅で見たあのフードの男だった

「……君たちが……お前たちがラクシュミーだったのか……」

男はかみ締めるように低い声で言うと、ふと顔をまさぐりだした。

(しまった！正体がばれた！)

そうは思いつつも、反射的に顔をかくしながら、わたしと千代ちゃんは身構える。

如意宝珠は、変身をとくと不思議な力でシンハの元へと戻ってしまう。

つまり、再びシンハと合流しなければ変身することはできないのだ。

変身とかなきゃよかった、と思ってももう遅い。

絶体絶命の……ピンチ……

ここはもう逃げるしかない！

ザリ、と音を立ててわたしたちは後ずさる。

フードの男がふところの中の何かをつかんだ。

しかし、つかんだはいいが、なぜか彼は動かない。

心なしか小刻みに震えているようにも見える。

フードの男がどう動くか目を離せない。

視界の端で千代ちゃんを見る。

どうやら彼女も動けないらしい。

緊張感に満ちた沈黙が流れた。

「……もう、もう終わりにしよう……青木……」

沈黙を破ったのは赤木君の声だった。

赤木君の発言に、わたしと千代ちゃんは顔を見合わせる。

「……青木……」

ふたたび赤木君がフードの男に呼びかける。

男は舌打ちをひとつすると、ゆっくりとフードに手をかけ、その素顔をさらした。

「……には……君には知られたくなかった……」

フードの下から現れたのは、確かに青木君の顔だった。

声が震えている。

町場からの明かりを受け、もともと青白い顔に影が落ち、彼の持つ異様な雰囲気がいや増している。

「ちょ、ちょっとまってよ！ 青木君が化け物を操ってて、赤木君とわたしたちはその化け物と戦って、それでいて青木君と赤木君が学校だといつも一緒に……ってどうゆうことよ？」

事態を飲み込めない千代ちゃんが、いやわたしもぜんぜん飲み込めてはいないが、二人をかわるがわる指差ししながら声を上げた。

「……が……だちが……しかった……」

赤木君がうつむいて、こぶしを震わせながらつぶやいた。が、よく聞き取れない。

「……ともだちが……友達がほしかった！」

叫ぶように言うと、突然赤木君は両手をついて泣き崩れた。

「……ちょ、と、友達が欲しいって、話の流れがかみ合っていないと思うんだけど……」

わたしは千代ちゃんと顔を見合わせた。

「つまり……今までの化け物騒ぎは、全部俺たちの自作自演だったんだ……」

「え？」

「自作自演？」

はてなマークを浮かべたわたしたちに向かって、青木君は震える声で語りだした。

「俺がダデーナー、あの紫の化け物のことだが、あれを操って、赤木がみんなのしている前でダデーナーをやっつける……そうすれば、みんなが赤木をもてはやす……赤木が人気者になれると思ったんだ……」

青木君はこぶしを震わせ、うつむきながら続けた。

「俺たちはこんな見たくで……俺は気味悪がられて、赤木は怖がられて、今まで誰からも敬遠されてきた……俺たち二人のほかに友達って呼べる奴がいなかった……だから友達が……どうしても友達が欲しくて……」

「なによ……なによそれ……友達が欲しい……なら余計な小細工なんかしないで素直にいえばいいじゃない！」

わたしは爆発した。青木君の話はまったく理解の範疇を超えていた。

「それは……」

青木君が何か言いたげに口を開くが、まだわたしの気はおさまらない。

「自分たちの都合でいろんなもの壊して、みんなを危険な目にあわせて、自分たちだって危ない目にあって、わたしだって……わたしだって何度も……何度も怖い思いや、痛い思いして……それでいて友達が欲しかったですって……馬鹿にしないでよ！今日だって！」

そのとき、わたしの頭に先ほどの人工呼吸が思い出された。

今まで助けてもらった恩返しだと思っていた。

人命救助のための神聖な行為だと思っていた。

わたしのファーストキス。

それが……

それがだまされて、無理やり唇を奪われたように感じて……

吐き気がした。

グシグシと腕で口をぬぐう。

それでもまだ汚れている気がして、つばを吐いた。

何度も……何度もつばを吐いた。

「冬咲君……」

「冬咲……」

心配そうな声で二人がわたしを見る。

でも……

「……気持ち悪い……」

二人の顔を見ると、なんだか心臓の鼓動が不安定になっていく……

頭の中がぐるぐると渦を巻いているように感じる。

こんなところには一瞬たりともいたくない。

そう感じた瞬間、わたしは羽山公園の広場から駆け出していた。

羽山公園から屋代川を渡るための橋に差し掛かったところで千代ちゃんがわたしに追いついた。橋には交通規制がしかれており、普通の人が入ることができなくなっていた。

「高畠町消防団第1分団第2部第1班！ただいまから人員搜索を開始します」

消防団が投光機を持ち出して、流された人がいないか川面を照らしている。

野次馬の隙間から見える屋代川の、橋を境に下流側は濁流であふれかえっていた。

そこには、先ほど上空から目にしただけでは感じ取れなかった地獄絵図が広がっていた。

「……行こ……私たちやったよ……これですんだって思わなくちゃ……ね……」

千代ちゃんが声をかけてくれた。

声が震えている。ああは言うものの、きっと納得はしていないだろう。

しかし、そう思うしかない。考えることに疲れたわたしはだまってうなずいた。

「どこからあっちに渡ればいいの？自転車流されてないといいけどなあ……」

西の川下の側には野次馬が大勢いた。

「あっちにしょ」

疲れている中遠回りにはなるが、東の川上のほうの橋から向こう岸へと回ることにした。

足をひきずるようにしながら上流への道を進んでいく。

すれ違う人の数もしだいに少なくなってきた。

喧騒から遠ざかるにつれて、まるで逃げているように感じて悔しくなった。

もう一度川下を振り返る。と、橋に居並ぶ投光機の光を受けて、背後に大型の獣のような紫色の影が見えた。

「ひいっ」

と、つられて振り返った千代ちゃんも息を呑む。

犬……よりでかい。

虎とか、ライオンとか、そんなサイズの獣が……一頭だけではない……ざっと数えて十頭前後が、ゆっくりではあるが河川敷ののり面から道路へと上ってきて、こちらへと向かって歩みを進めてきた。今まで水につかっていたのか、ビチャ、ビチャという足音が聞こえる。

「……さっき青木君が言ってたダデーナーってやつかしらね……」

千代ちゃんが身構えながらつぶやいた。

「口封じ……とか……まさかね……」

何かしゃべらないと千代ちゃんは落ち着かないのだろう、けれどわたしは、今の「口封じ」という言葉のせいで、なんだか何もかもバカバカしくなった。

あの二人のくだらないお遊びで、純情を踏みにじられたうえ、こんなところで一生を終えるのか……

天を仰ぎ、目をつぶる。

最後のときを前に今までの人生でも浮かぶのかと思いきや、頭の中に流れるのは先ほどの大水に押し流されて苦しんでいる人たちだった。

彼らは全員無事なのだろうか？

ケガをしてる人は見た。それ以上の目にあった人は……

純情を踏みにじられたところの話じゃないその人の無念はどんなんだっただろう……

そう思うと心のそこから怒りがふつつつとわいてきた。

彼らの無念をはらせるのはわたし達しかいない。いや、はらせなくてもせめて一発……

わたしの中で何かが壊れた。

「うあああああああああああああつっ！」

わたしは一番近くの化け物に走りよると、その鼻っ面めがけて右のこぶしを叩き入れた。

「ギャヒン！」

と化け物は情けない声を上げる。

「うああっ！うわああっ！あああっ！」

わたしは無我夢中で化け物を手当たりしだいに殴りつけた。

「ちょ、やめ、やめるツハ……ぼた、やめるツハ……」

あんなことしておきながら「やめるツハ」っていわれてやめられると思ってんの？

と、後ろから何かが覆いかぶさるような衝撃を感じる。

それはわたしの動きを封じようと体に腕のようなものを伸ばしてくる。

耳元で何かわめいている。

「うるさい！」

ひじを立てて上体を回し何とかそれを振り払おうとする。

「イタッ！ やめてぼたんちゃん！ ぼたっ、それ化け物じゃないっ！」

「ぼ、ぼたん！ 僕だツハ！ シンハだツハ！」

「だめだ！ キレてわけわかんなくなっちゃってる！」

「ぼたん！ 目を覚ますツハ！」

「……んんんもう、ゴメン！」

頭に強い衝撃を受けて、わたしの意識はそこでプツンと途絶えた。

ラクシュミー5話 了

今日から2学期が始まる。

少し早起きして、商店街のほうへと自転車を走らせる。

あれから一週間が過ぎ、がれきやらドロやらの撤去はほとんど終わっているようだが、割れたガラスや建具がまだ入らずに、ブルーシートで目隠しをしている店がほとんどだ。

もっと上手に戦っていれば、こんな光景は見なくてすんだのかもしれない。そう思うとなんだか涙がにじんできた。

あの晩、河川敷でキレて手がつけられなくなったわたしは、千代ちゃんのきつい一発で意識を失ったそうだ。

河川敷から這い上がってきた大きな獣はシンハだったらしい。

巨大化、というか、あれが本来の姿らしいが、分身して洪水に流された人を岸まで引き上げていたという。そのためあれほどの惨事にもかかわらず、死者は一人も出なかったそうだ。

しかしそのおかげで、あの晩手に入れた大量の「文珠」を含めて力をほとんど使い果たし、寝息こそ立てているものの、一週間たったいまでも目を覚まさないでいる。

散々殴ったお詫びと、人命救助のお礼にと買ってきたソーセージの賞味期限が切れてしまわないかと心配だ。

教室に入るとみんなあの晩の話で持ちきりだった。

「おはよう」

と、教室に入ってきたのはバスケット部の高橋君だった。松葉杖をついている。

「ちょ、どうしたよお前？」

その姿に驚いた男子が声をかける。

「いや、お祭りの晩にさ……」

その一言に、みんな「ああ……」と理解する。

「わるいな大浦、新人戦、無理そうだわ……」

高橋君は寂しそうに笑った。

「おはよう」

「あ、おはよう千代ちゃん」

千代ちゃんも登校してきた。

「シンハ、どう？」

「うん、まだ寝てる」

「そう……」

千代ちゃんは不安げな顔でうつむいた。

「だいじょぶよきっと、いびきかいてたし。それよりも、あの二人来るかしら？」



そうって教室の後、いまだ空席の赤木君と青木君の席に向かって振り返る。

「もう来てるよ」

と、千代ちゃんは後ろの引き戸を指差す。

体は見えないが、廊下との間の壁の上の小窓から赤木君の髪がちりちりとのぞいていた。

「わたしが教室入る前から、後の入り口トコで二人でふらふらしてたよ……やっぱ、入りづらいんでしょうね……」

キーン コーン カーン コーン

予鈴がなった。すると観念したのか後の引き戸が開いて青木君、ついで赤木君が教室へと入ってきた。うつむいて背中を丸めて、なんだか二人が小さく見える。

その様子を見た千代ちゃんは、腰に手を当て鼻から「ふーん……」と息を吐き出すと、自分の席へと戻っていった。

わたしは再び後ろの席の二人へと目をやる。

席へとついた二人は、ずっとうつむいていた。

ふと顔を上げた赤木君と目が合う。すると彼はすぐに視線を窓の外へと逃がした。

反省はしているようだけど……だけど彼らのしたことを考えると……

「起りーつ」

日直の号令に、わたしはあわてて前へと向き直った。

始業式も終わり、無事宿題の提出も済み、お昼を前に放課後を迎えた。

号令が終わるなり千代ちゃんがわたしのところへ飛んでくる。

「ごめん、さっき部長に今日部活無いよって言われたの、言うの忘れてたよ」

「ふーん、じゃー緒帰ろっか」

「それが私ちょっと用があってさ、先行っててよ」

「ん？何？わたし待ってるよ」

「いやいや、ほらシンハのこととか心配じゃない？早く様子見に行ってあげなよ」

拝むように手を合わせながら千代ちゃんが言う。なぜか視線が泳いでいる。

ちらちらと後の入り口に目をやっているような気がする

その動きに何か不自然な感じがしたものの、

「わかった、じゃーねー」

と、わたしは席を立った。

家に帰るとシンハが目を覚ましていた。

買っておいたソーセージは瞬く間にたいらげられ、追加を買いに走らされるはめになった。

翌日、土曜の朝のゆっくりした時間は千代ちゃんの電話によって破られた。

自転車のかごにシンハを放り込み、スタンドを蹴り上げる。

「今日はどこに行くッハ？」

「駄子町にある瓜割り石庭公園だって。今頃あそこでいったい何の取材かしら？」

あれやこれやと想いをめぐらせているうちにわたし達は石庭公園へと到着した。

黄褐色の切り立った崖の下にある瓜割り石庭公園。

かつて山の上から楔を打ち込み、高畠石を切り出していた跡がこの切り立った崖の正体だ。

長い年月をかけて切り出した跡が、その崖の下に広場を作り出しており、その岩の壁に囲まれた広場では音の反響を利用して小規模なコンサートを行なったり、もう少しして涼しくなれば芋煮会の会場などとしても使われている。

そして今まさに季節はずれの芋煮会の準備が、晩夏の昼前の暑い日ざしの中、新聞部の男子、そして赤木君と青木君の手によって目の前で着々と行なわれていた。

「ちょ、いったい？」

「やあ、遅かったな冬咲君」

「ちょっと部長、こい……この二人はいったい？」

「ああ、昨日竹田くんがな……」

「じゃじゃーん、新入部員歓迎の芋煮会でーす」

部長に指された千代ちゃんが手を上げながらにこやかに言った。

「新入部員？ 千代ちゃん何言ってるのよ、こいつらは……」

あまりのできごとによりわたしは千代ちゃんに詰め寄る。

「ん？冬咲君。こいつらって何のことだ？」

「え、あ……いや」

そばにいた部長がげげんそうな顔をしてたずねてくる。

そうか、新聞部のみんなの前じゃ、あのときの話なんて出来るわけない。

「あ、いや、なんでもないです、あの、急な話だったからびっくりして……」

わたしが部長へと言い訳しているうちに、千代ちゃんはずっと準備している面々の間へと混ざってしまった。

もう、千代ちゃんったら何考えてんのよ……

追いかけて中に入ろうとは思ふものの、あの二人と一緒にの輪の中というのは気が進まない。

いらだちをおさえながら、和気あいあいと芋煮会の準備をしている皆に目をやる。

鍋の横でねぎを刻んでいるのはよりによって青木君だ。おおよそ二本分のななめに切ったねぎを、ぐらぐらと煮え立った鍋の中へと滑り込ませふたをする。その馴れた手つきを見て部長が

「へえ青木君、君はクッキング、料理が上手だねえ」

とほめる。すると、

「あ、いや……あの、い、いつもやってるから……」

なんて、照れてどもりながら青木君が答える。

ズ、ズ、ズズと何か重いものを引きずる音が聞こえる。

見ると赤木君が大きな岩をこちらへと押してきている音だった。

「ちょっと何やってんのよ赤木君！」

と、千代ちゃんがあわてて詰め寄る。

「……敷き物代わりにしようかと思って……」

「ばっかねー、鍋をそっちに持ってったほうが手っ取り早いでしょ、もどしてらっしゃい」

「ん」

言われて赤木君はぐるりと向き直り、元にあった場所へと向かって岩を押しはじめた。そのそばに吉田君が寄って行って驚きの表情で赤木君を見つめる。

「あ、赤木先輩すごいです。こんな重そうな岩を一人で動かせるなんて！」

「……い、いや、そんな、たいしたことじゃない……」

その声は、心なしか今まで聞いた赤木君の声の中で一番上ずったものに聞こえた。

その様子をマイペースに写真を取っていた日下部君が、こっちへレンズを向ける。が、彼はシャッターを切る手を止めて、くちびるのはしに指をあてて、口角を上げるジェスチャーをしてみせた。笑えっていつてんの？ ほっといてよ！ わたしは顔をそむけた。

「おっ、そろそろいいんじゃないか？」

部長の声に皆がいっせいに顔を向けた。

みんな笑顔で鍋の周りへと集まっていく。

……なによ……わたしだけむすっとしてるなんて居心地悪いじゃない……

わたしはなるべく自然にその輪の中へと混ざろうとした。

「はいじゃぼたんちゃん、みんなに渡して」

千代ちゃんが芋煮の盛り付けられた発泡のどんぶりを手渡してくる。

「あたい？」

「そうよ、ほらおなかへったから次々行くわよ」

「や、ちょ、ちょちょちょ……」

そういつて千代ちゃんは次のどんぶりを差し出した。

「はい部長、はい日下部君、はい吉田君、はい……青木君と……赤木君」

次々と差し出される芋煮のどんぶりをみんなに渡す。青木君と赤木君にも渡す。

「はい、じゃ次はお茶ね、ぼたんちゃんそっち側ついであげて」

と、千代ちゃんが否応なく割り振ったのは青木君と赤木君の側だった。「何でわたしが？」とは言い出せない空気の中で、わたしは二人の顔を見ないようにしながら、紙コップにペットボトルのお茶を注いだ。

「じゃみんないきわたった？ それじゃあ青木君、赤木君ようこそ新聞部に！かんぱーい」

『かんぱーい！』

千代ちゃんの音頭でみんなして紙コップをつき合わせた。

みんなはさっそく芋煮へと箸をのぼす。

「おー、なかなかいけるじゃないか青木君」

「あ、ホントだ、おいしいですよ青木先輩」

部長と吉田君にほめられて青木君は照れくさそうにはにかんだ。

「へー、これが芋煮会の芋煮かー。おいしいねぼたんちゃん！」

千代ちゃんがキラークラスを放つ。なるべくなら口をつけたくなかったのに、こんな振り方されたら……何よ、青木君の作った芋煮なんて……

「あ……ほいひー」

つい口からおいしいの一言がこぼれおちた。

言ってから、しまった！と思って青木君を見る。

青木君は真っ赤な顔をしてうつむいた。

なぜだろう、むなしさ？敗北感？そんな感情がわたしの胸を風のように通り過ぎて行った。

「ところで青木君に赤木君、これから新聞部の活動をしてもらうわけだが、いま僕らが注目しているのが例の魔法少女だ、君らも知ってるだろう？」

「あ、いや、その……はい」

部長の問いに、こちらをチラ見しながら青木君が答える。

「ちなみにピンクと最近出てきた緑と、君らはどっち派だい？」

「部長！」

あんまりな質問に大声をたててしまう。が、みんなの驚いた視線を一点に受け、

「あ……あんまり女子の前でそういう話はデリカシーがないんじゃないかなって……」

と、尻すぼみ。

「まあまあ、ぼたんちゃんってば固いんだから、で、部長はどっち派なんですか？」

「やっぱピンクだな、うん」

部長の答えに千代ちゃんの眉がひくりと上がる。

「……へえ……大河原君は？」

「ピンク」

「……ああ、そう……でも吉田君、緑もすごいわよねえ、火ィとか出せるし……」

そっけないながらもはっきりとした意思表示に胸を刺された千代ちゃんは、半ば誘導気味に吉田君へと問いかける。

「いやあ、やっぱりピンクですかね、てか、緑なのに火属性っておかしくないですか？」

「……でも、ねえ、色と属性ってそんなに重要かしら、ねえ赤木君？」

マニアックな回答に存在意義を問われつつ、すがるように赤木君に問いかけるが。

「……ピオニィ……」

の答え。ちらりとわたしを見て、再び朱に染まった赤木君の顔を見る。

「……あ、うん、あんたはね、それでいいと思うわ。で？」

「俺もピ……ピ……えと、あの、そのミレニィです……」

青木君は千代ちゃんの迫力に言葉を翻しミレニィの名前を出したが、当の千代ちゃんはがっくりとうなだれてしまった。

「そ、そうそうミレニィかわいいじゃないですか、小柄だし、超ミニだし、その上巨乳ちゃんですよ、こう、ババーンと……」

事実上の完全敗北に、落ち込む千代ちゃんをフォローするものの、  
「なんだ、人にデリカシーがないって言う割には冬咲君の発言はずいぶん大胆じゃないか？」  
なんて笑われてしまう。

そして、千代ちゃんの目は笑ってない、「勝者が敗者にかける言葉なんてないよ」とでも言いたげに冷ややかだ。

「しかし、ピオニィとかミレニィとかなかなか詳しいじゃないか君たち。そのくらい詳しくあったらあの覆面の男も知ってるかい、赤木君？」

「あ、ん、ああ……」

「そうか、君は目の付け所が違うようだね」

目の付け所も何も、「覆面の人」ご本人の答えに部長は満足そうだ。

「みんなあの魔法少女に目を奪われがちだが、もし覆面の彼がいなかったら彼女たちは大変なピンチにおちいていたことが多々あるんだ。あのピオニィちゃんは結構抜けてるトコあるみたいだからなあ……」

必死に戦っている人の気も知らないで、部長の話はとどまることを知らない。

「とにかくね、彼もまた高畠を守ってくれている立派なヒーローだと思うんだ。実は彼で特集記事を書いてみようと思っていてねえ」

「あ、ああ……」

赤木君は部長の話に何度もうなずきながら、照れくさそうに頬を赤らめていた。

その後、小一時間ほど部長の独壇場が続いた。

なべをカラにすると、「記念写真だ」なんていって、日下部君のカメラでみんなそろって写真を撮ってその日はお開きとなった。

### 3

「どういうつもりなの……」

部長らと別れ、わたしと千代ちゃんシンハ、そして赤木君と青木君は彼らの家へと向かって自転車を押しながら歩いていた。

「青木君と赤木君は友達が欲しいんでしょ、だからみんなでお友達になったの」

わたしの問いかけに千代ちゃんはさらりと答えた。

「ともだ……だって、この二人町をめちゃくちゃにしたのになんで？」

すると、千代ちゃんはちょっと立ち止まって、さびしそうな顔をした。

「ぼたんちゃん、お友達がない、一人ぼっちって言うのはホントにつらいの……わたし、転校ばかりだったから、二人の気持ちすごくわかるんだ……」

「千代ちゃん……」

「低学年くらいの頃はまだいいのよ、すぐに仲良くなれるんだけどね、四年生の時だったかな、最初はものめずらしさでちやほやされるんだけどさ、クラスで一番のイケメンに色目使ったとか、わけのわからない因縁つけられてさ、女子から総スカン食らってね、無視されることが続い

たの……」

「……………」

「五年のころは派閥争いみたいのに巻き込まれたりしてね、だから顔色伺って、でも卑屈になりすぎるとまたいじめられたり、六年のときは方言かなあ……関西だったから今となってはネタだったのかもしれないけど……で、登校拒否したこともあったり……」

「そんな……」

「でもほら、転校多いから、毎年リセットリセットで気は楽だったわ。それに去年は中学デビューする子も多いでしょ、だからまあ、それなりに友達もいたし、あの頃より楽っちゃ楽だったかなー」

わたしが暗い顔をすると、千代ちゃんはそれを紛らわせるように明るく振舞う。しかし、言葉の端々からはそれが気丈に振舞っているのだというのが感じられた。

「だからね、羽山公園でこの二人の気持ちを聞いてから、わたしが助けてあげなくちゃ、って思っただの……」

「千代ちゃん……」

「そりゃ、今までのことはあるけどさ、二人ともやりすぎたって反省はしてるみたいだし、シンハのおかげで町の人もケガくらいですんでるし、それに警察とかに言っても相手にされないでしょ、こんな話……」

「……………」

「だったらココはひとつ、今までのことはみんなの胸の中にしまっておいて、二度とこんなことがおきないようにする。無力な中学生にはここらが落としどころじゃないかなあ？」

「……そう……かもね……」

確かにほかに方法はないかもしれない。それに、芋煮が出来上がったときに感じた妙に居心地が悪いついていう感じ……長い間千代ちゃんやこの二人は、ああいった、いやもっと嫌な空気の中で生きてきたんだと思うと、なんだかやるせなくなってきた。

「と、いうわけで、ちゃんと「もらうモノ」もらう約束はしたわよ、シンハ」

「本当ッハ？」

「ああ、俺たちが持っている文殊を全部返すよ」

ゴミ袋を手にした青木君が振り返って言った。

シンハがかごの中から顔を出し、うれしそうに尻尾を振りながら、わたしと千代ちゃんの顔を交互に見る。

「これでもう高畠を襲う化け物は出ないわ。正直もうちょっとラクシュミーを体験してみたかったけどねえ……ま、わたしは人気ないみたいだし……」

そう言って胸のあたりをなでながら、ジト目でわたしを見る千代ちゃん。どうやらさっきのコトを根に持ってるようだ。でもそうか、もう変身しなくていいんだな……それはそれでちょっとさみしいかもしれない……

「あとは今日の芋煮とジュース代もナ」

「何よ、そのくらいと一せんじゃない、それは迷惑料よ安いもんでしょ」

「ふふん、そうだな、こんなに心から安らいだのは俺も赤木も初めてかもしれない……」

青木君は立ち止まって天を仰いだ。そしてゴミ袋を下においてこちらへと向き直る。

「冬咲君、今まで本当にすまなかった。いくら謝っても謝りきれものではないかもしれないが……なんとかこれから赤木ともども俺たちと付き合っていてはもらえないだろうか……」

青木君は深々と頭を下げた。赤木君もあわてて抱えていた鍋を下ろし青木君にならう。

「……………ま、まあ友達としてなら……ね……」

「ああ、友達でいましょうは振られたのと一緒よ、残念ね青木君」

「振られって、ちょっと！　そういう流れの会話じゃないでしょ千代ちゃん！」

「ははは、振られるにしてもこんなうれしい振られ方があるか、なあ赤木」

青木君は、赤木君と顔を見合わせて笑った。

そういえば、この二人が笑った顔を見るのは初めてかもしれない。

怖いとか、気持ちわるいとか、そんな風にみてたけど、この二人はこんな顔をして笑うんだ。

そんな二人を見ているうちに、なぜだか目頭が熱くなってしまった。

「さあついたぞ、ちょっと待っててくれ、すぐ持ってくる」

そういうと青木君は本当に人が住んでいるのだろうかと思うような家の中へと入っていった。

「結構大変そうなお宅なんじゃないの？　大丈夫？　芋煮のお金……」

「うーん、なんだか罪悪感を感じてきたわ……ね、青木君のご両親って何してる人なの？」

「ご両親？」

千代ちゃんの問いかけに赤木君が首をかしげた。

「知らないの？　友達なんでしょ？」

「あ、ああ、すまない……」

千代ちゃんの言葉に背中を丸くする赤木君。

そのリアクションから、なにか言いようのない違和感を覚えた。

そうこうしている間に家の中から巾着袋を手に青木君が現れた。

「さあ、これで全部だもっててくれ！」

さっそく地面へと広げてシンハが数を数え始めた。するとすぐに、

「おかしいッハ、ぜんぜん足りないッハ」

と首をかしげる。

「残り33個じゃないのか？」

青木君が横から広げられた文珠を覗き込む。

「全部で108個になる計算だッハ。あと50個くらい無いと計算があわないッハ」

「そんな……家にあるのはこれで全部だぞ」

「このあいだ拾い忘れたんじゃない？　流されちゃったとか？」

「そんなはずないッハ。全部拾ったはずだッハ」

わたしの問いかけに首を振るシンハ。

「ちなみにこないだの竜には何個文珠を使ったの？」

千代ちゃんの質問に青木君はげげんそうな顔をする。

「それなんだが……あの晩俺たちが使った文珠は一個だけ。最初の黄色い竜の張りぼてに対してだけなんだ……」

「？」

「？」

わたしたちは顔を見合わせる。

「じゃ、じゃあ、あの青いほうの龍は何なのよ？ 誰があんなことできるわけ？」

千代ちゃんがしゃがみこんでシンハにたずねる。

「そんなのこっちが……」

何かを思い出したかのようにシンハの言葉がとまる。

「なに？ なんか思い出した？」

わたしもシンハの前にしゃがみこむ。

と、そのとき、

「……うああああああああああああああああ……」

と、背後で青木君の絶叫が上がる。

その声に戻ると青木君を光が……

まるでラクシュミーのトゥインクルファウンテンのような光が包み込んでいた。

4

光の元には一人の少女がいた。

年のころはわたしたちより少し上か？

擦り切れた丈の長い青白い着物姿。

長い髪の生えた頭には、猫の耳かと思まがうばかりの大きなリボンがついている。

そして右手からまばゆい光を放っていた。

「さすが文珠10個のダデーナー、浄化までには時間がかかる……」

「お、お前は岩井戸……」

声を聞くなりシンハが驚いた声を上げた。

「知っているの？シンハ？」

「知っているも何も、彼女こそが最初のラクシュミーだッハ……」

「ラクシュミーが？ 何で？」

「そんなことより早く青木君を助けなきゃ！」

千代ちゃんが振り返りながら叫ぶ。

青木君は光の珠のようなものに閉じ込められ、悲鳴をあげ続けているのだ。

「そうだッハ」

シンハが如意宝珠を取り出し、わたしたちに放ってよこす。

『オン・チンターマニ・ソワカ！』



清らかな光に包まれ、わたしたちはラクシュミーへと変身した。

「ふん、こざかしい……」

岩井戸は左手で何かをバラりとまく。

すると、そこから奇妙な色をしたダデーナーが現れ、大型の犬のような形をとった。

6匹もいる！

「行け！」

との、岩井戸の号令で6匹のダデーナーはわたしたちに襲い掛かってきた。

正面から飛び掛ってきたダデーナーを、しゃがんでかわそうと思ったら低い位置へも飛び掛ってくる。とっさに横に転がると上空から降ってくるかのようにもう一匹が噛み付いてくる。何とかそいつを蹴りつけて、起き上がって間合いを取った。

とにかくいままでのものより動きが早い。

その上連続して襲い掛かってくるのでかわすだけでも精一杯だ。

「空へ！」

ミレニィが舞い上がる

するとダデーナーは次々に積み重なり、下から順に跳び上がった。

6段ロケットのように次々ジャンプを繰り返す。

そして、はるか上空のミレニィへとたどり着き、ミレニィの足へとガブリと噛み付いた。

「うそお！」

噛み付かれたミレニィはバランスを崩して地面へと落ちた。

わたしはすぐに駆け寄って、まだミレニィに噛み付いているダデーナーを蹴り飛ばすと、他のダデーナーが飛び掛ってこないようにトゥインクルロッドを出して牽制する。

ミレニィはかまれた足を押さえながら、つらそうな表情でうずくまっている。

そんな中を、青木君の悲痛な叫び声が響く。

「ぐおおおおおおおおお……」

「青木一、 青木一！」

赤木君が手を伸ばすが、青木君を包む光がまるでバリアーのように、バチバチと火花を散らせながらその手を阻む。

「いやだー、消えるのはいやだ、これから楽しい日が続くと思ったのに……せっかく友達がたくさんできたのに……消えたくない！消えたくない！……赤木！……赤木一！」

青木君も助けを求めるように赤木君へと手を伸ばす。が、その手は届かない。

岩井戸がさらに文珠をばらまいた、さらに数体のダデーナーが召喚されてしまった。

「これ以上ここにいるのは危険だッハ、逃げるッハ！」

シンハが叫ぶ。

「逃げるったってどこへ！？」

「いいからミレニィを連れて赤木の近くに行くッハ！」

わたしはミレニィを抱えると、トゥインクルロッドでダデーナーを牽制しながら赤木君の元へと近づいた。

シンハはぶつぶつとなにか呪文のようなものを唱えている。

「逃げるものか！ 青木を置いてなど逃げるものか！」

赤木君が大声で叫んだ。

シンハの呪文の抑揚が激しくなってくる。

「赤木ー……赤木ー……」

青木君の声が次第に小さくなっていく。心なしか顔が青ざめてきたように見える。

「青木！青木！」

火花で手が焦げ付くのもかまわずに、必死で光の球を叩きながら赤木君は強く声をかけた。

そんな中、シンハの体もまた別の色の光を放ち始めた。

「ピオニィ、赤木をしっかりとつかむッハ」

わたしは言われたとおりにミレニィを抱いた反対の腕で、赤木君の背中にしがみつく。

「離せ！ 青木を残していけるものか！ 青木！ 青木————……」

シンハから放たれた光がっそう強くなってきた。

すると突然に、すべての光とすべての音が消えてしまった。

5

気がつくとき、木立の中に立っていた。

「ここは？」

「大聖寺、亀岡文殊の裏手へレポートで逃げてきたッハ」

荒い息をつきながらシンハが答えた。

「おい青木は？ 青木はどうした！？」

ものすごい剣幕で赤木君がシンハにつかみかかる。

「いないぞ！ 置いてきたのか！」

「く苦しいッハ」

「くそっ！」

赤木君はシンハを放り投げると、木立の下草を掻き分け、ふもとへと向かって歩き出した。

「あ、赤木君どこへ行くの？」

「決まっている！ 青木を助けに！」

そういうと、振り返りもせずに駆け出した。

「待って！わたしも……」

追いかけてやると後ろで「ひぐっ」と痛みをこらえるような声がする。

「ミ、ミレニィ……さっきかまれたところ」

見ると足首がパンパンに腫れていた。

「大丈夫、僕が治療するッハ」

言うとシンハが傷に手をかざす。暖かな光のおかげかミレニィの顔つきが少し和らいだ。

「シンハ……ミレニィのことお願い……わたしも行ってみる」

「待つッハピオニィ！ 危ないッハ！」

「だって……ほっとけないじゃない！」

シンハが引きとめようと叫ぶ、が、わたしの頭からはさっきの青木君と赤木君の必死のやり取りが離れなかった。

「待つッハぼたん！ ぼたん————！」

シンハの叫びを背中に受けながらわたしは赤木君の後を追った。

再び青木君たちの家に着いたときにはすべてが終わっていた。

青木君が光に包まれていたところには大きな水色の鬼の張りぼてがあり、赤木君はそれを抱きしめながら涙を流していた。

青鬼の張りぼてはボロボロに傷ついていたが、片手を挙げてにこやかな笑みをたたえていた。

途中で折れてしまった立て札には、広介童話の「泣いたあかおに」の一節が記されていた。

「ドコマデモ キミノ トモダチ」

その言葉が、まるで青木君の赤木君に対する最後のメッセージのように感じられ、胸が締め付けられるような気持ちになった。

でもなんであんな張りぼてに抱きついて泣いているの？

それにさっきの女の子、最初のラクシュミー？ 文珠10個のダデーナー？……

いろいろな疑問の断片が、パズルのピースをはめ込んでいくように、ひとつの信じられないような結論を形作ろうと頭の中でくっつきだしていく。

ふいにキナ臭いにおいがする。

そちらに目をやると空間がゆがみ、シンハと千代ちゃんがテレポートしてきた。

千代ちゃんはまだ足を引きずっている。

「シンハ、説明して。いったいあれはどういうことなの？ 彼女は何者なの？」

わたしはシンハに問いかける。

すると、シンハは苦しそうな表情を浮かべて、

「彼女は僕が生み出した最初のラクシュミー……妙多羅天岩井戸……おっかな橋の弥三郎婆だッハ……」

と答えた。

第6話 了

陸奥国安倍氏に仕える一本柳の武士「渡会弥太郎」

彼が若いとき鳩峰山で一人の天女に一目ぼれをする。これが岩井戸、後の弥三郎婆である。

二人は祝言を挙げ、弥三郎と言う子供が生まれる。

幸せなときもつかの間、前九年の役で戦に駆り出された弥太郎はついには帰らぬ人となる。

弥三郎と岩井戸は落延び、いつか御家の再興を願いながら隠れ住む。

やがて弥三郎は土地の娘と結婚し、子供が生まれる。

後とりもできたので武者修行の旅に出て立派な侍になってやると旅に出る弥三郎。

しかし旅の途中一本柳に疫病がまん延し弥三郎の妻子も命を落としてしまう。

それを見取った岩井戸は気が狂い、ついには鬼婆弥三郎婆へと変貌をとげる。

弥三郎婆は御家再興の軍資金をためるべく、おっかな橋付近で狼を操って人々から金品を奪う追いはぎ家業をはじめた。

月日は流れ、立派な侍に成長した弥三郎は帰り道おっかな橋に差し掛かる。

おたがいに気がつかない二人、激しい戦いの末弥三郎は鬼婆の腕を切り落とした。

鬼婆の腕を手土産に家へとたどり着く弥三郎。

床に伏せる岩井戸はすべてを弥三郎に打ち明けると風に乗って越後の弥彦山へと逃げた。

その後反省した岩井戸は妙多羅天として祭られたという。

新潟の話のほうがメジャーらしいですが、話の濃密さでは負けてない高畠版の弥三郎婆のお話。

弥彦に行ってから、いつまでたっても結婚できない男に嫁を連れてきてくれるといった世話焼き婆さんなエピソードもこちらには伝わっています。

とはいえよその結婚式からお嫁さんをさらってくるといった乱暴な手段で、本当に反省しているのか信じられないような状況だったそうです。

1

「おっかな橋の……弥三郎……婆？」

シンハの言葉に千代ちゃんが首をかしげた。

「えっとね、鳩峰山で羽衣をなくした天女が、狩りに来てたお侍さんのお嫁さんになるのよ。それで子どもが生まれて武者修行に行くのよね。で、武者修行に出た息子の帰りを待ってるうちに、病気でお嫁さんと孫が死んじゃって、悲しみのあまり鬼婆になって人を襲ってた。ってというのがおっかな橋って……ほらあの高畠高校から東のほうにずーっと行ったところ。それで武者修行から帰ってきた息子と戦ってやられちゃうっていうお話……だったよね、シンハ？」

昔話のあらすじを千代ちゃんへと伝えた。が、うろ覚えで自信はない。

シンハに助けを求めるように視線をやると、いつになくまじめな顔をして、

「一般的に伝えられている分にはそんなところだッハ……」

と、答えた。

「最初のラクシュミー……って、言ったわよね……何があったの？」

「今から約900年前に話はさかのぼるッハ……」

シンハは神妙な顔をして語りだした。

2

「美しい……まるで、まるで天女の舞のようだ……」

屋代郷（高畠町のかつての地名）の渡会弥太郎は感嘆の声を漏らした。

数多の化け物の亡骸によって血なまぐさいにおいに包まれた鳩峰山の峠、その上空をふわりふわりと舞うように一人の少女が飛んでいた。

薄絹をまとい、羽衣を身に着けた彼女は時折手元から光を放つ。するとたちまち眼下の化け物が血しぶきを上げて倒れ附すのだ。

その光景に弥太郎と子供回りの侍はただただ驚くばかりだった。

ふと少女が高度を下げた。

見れば、いずこかよりとんできた妖鳥が三羽、彼女を牽制していた。

ひとたび地面に降り立ち、妖鳥に向かって光弾を放つ。

見事打ち落とすものの地面に落ちたその隙をほかの妖魔どもは見逃さなかった。

今まで空中にあって手出しできなかった恨みを晴らそうと、カモシカの化け物が少女めがけて突進してくる。

ひらり、ひらりと二頭の突進をかわすものの、足場の悪さに転倒してしまう。

倒れた少女に向かってカモシカの化け物が覆いかぶさるように飛び掛る。

そのとき、化け物の体に数本の矢が突き立った。

化け物はのけぞって倒れ付した。

少女は驚いて矢の飛んできたほうへ眼を走らせる。

「われこそは屋代郷一本柳の渡会弥太郎平安信、儀によって助太刀いたす」

弥太郎は声を上げると刀を抜いて供回りともども少女の下へと駆け寄った。

数十分後、弥太郎たちの前にはおびただしい数の妖魔の死体が積み重なっていた。

弥太郎の家来が深手をおってあえいでいる。

少女は彼の前にひざまずき、傷に手をかざすと暖かな波動を放つ。

するとたちまち血は止まり、傷がふさがり、家来の荒かった息も穏やかなものになった。

「お前はいったい、何者なのだ」

弥太郎の問いに少女は振り返る、が、青い顔をしてそのままひざから崩れ落ちた。

「おい、馬をこちらにまわせ、丁重に運ぶんだ！」

弥太郎が供回りのものに檄をとばした。

11世紀の中ごろ、東北地方には陸奥の国（現在の青森、岩手、宮城、福島）と出羽の国（現在の秋田、山形）の二つの国があった。

陸奥の国には朝廷からの監視役・国司として藤原登任が派遣されていたが、陸奥の国の奥六郡、今の岩手のあたり、に居を構える豪族：安倍頼良は朝廷に従い税を納めることを良しとせず、勝手気ままに陸奥の国を治めていた。

安倍氏は野心家で奥六郡のほかにも勢力を拡大しようとした。しかしおおっぴらに軍を動かせば都から叛意ありとみなされて討伐軍を派遣されてしまう。

そこで彼が利用したのが蝦夷地の神（カムイ）達だった。

安倍氏はかつて坂上田村麻呂によって滅ぼされた阿弋利為（アテルイ）の一族の末裔の祈禱師を従え、その呪術を持って人外の妖魔を呼び出し出羽の国を襲わせたのだ。

民の平穏を守るため、羽黒山では山伏たちが化け物を退けていた。そしてここ屋代郷（高畠）では亀岡文殊のシンハがその任に当たっていた。

陸奥の国の化け物に両親を襲われ天涯孤独の身となった少女岩井戸、その姿を見かねたシンハは、彼女をラクシュミーとして屋代郷を守る戦士に仕立て上げたのだった。

岩井戸は主に国境付近、すなわち二井宿峠、鳩峰峠で出羽の国へと侵入しようとする化け物を退けるため戦っていた。

これが弥太郎が、屋敷で目を覚ました岩井戸から聞いた事の顛末であった。

「なるほど、な」

「はい、ですから私はこれからも妖魔を退治して、私のような不幸な者を生まぬよう戦わねばなりません」

「ならぬ」

岩井戸の言葉に弥太郎は強く返した。

「ですが……」

「親を殺され思うところはあると思う、が俺はお前を失いたくないのだ。お前が人知れぬところで戦い、今日のように不覚を取り、むざむざ殺されでもしようものなら……」

「弥太郎様……」

弥太郎は岩井戸の手をとり、

「俺はお前が闘わなくても良い道を、安倍方につく道を選ぼう。だから、すまぬがお前の憎しみを堪えてくれ……たのむ」

と、言った。

「弥太郎様……」

岩井戸は涙をひと筋、ふた筋とこぼした。

翌日、渡会家は安倍家へと使者を送り、安倍家の傘下となった。

これで屋代郷は妖魔の危機にさらされることは無くなったのだ。

岩井戸の、ラクシュミーとしての勤めは終わった。

「本当に、これでよかったのかしら……」

岩井戸が弥太郎と祝言を挙げて、しばらくたったある昼下がりの縁側で、庭に座るシンハを見下ろしながら岩井戸はつぶやいた。

「敵討ちのことがあったとはいえ、戦いの日々から解放されて、殿様にも見初められて、普通ならこんなに幸運なことはないッハ」

シンハが尻尾を振りながら答えた。

「幸運……ね……」

「そうだッハ、まさに幸運の女神ラクシュミーだッハ」

機嫌のよさそうなシンハと対照的に岩井戸の顔色は優れなかった。

「どうしてそんな顔をしているッハ」

「……怖いよ……こんなにいいことばかりが続いて……」

そうつぶやくと岩井戸はシンハから顔をそむける。

「禍福はあざなえる縄の如し、今までつらいことが多かった分、これからの岩井戸の人生は、きっと幸せな未来がまっているはずだッハ」

シンハはトコトコと岩井戸の前に歩み出てなぐさめようとする。しかし、岩井戸の顔は晴れなかった。

3

翌年、岩井戸は男の子を生んだ。

名を弥三郎宗長。

父親似のたくましい男の子で、大病をわずらうこともなく、すくすくと元気に育っていった。

シンハの言うように、岩井戸自身も己の人生は幸せな日々が続いていくものと思いかけていた。

しかし、弥三郎が生まれてしばらくすると、安倍氏が国司である藤原登任に反旗をひるがえし、

後任の源頼義との間で合戦が始まった、世に言う前九年の役の始まりである。

一進一退の末膠着状態におちいり、戦場となった陸奥の国、出羽の国は大きく疲弊した。

一〇六二年、出羽の国清原氏の協力を得た源頼義が、ついに安倍氏を破り前九年の役は終結する。そしてその戦の中で、安倍方であった弥太郎も命を落としてしまったのだった。

「禍福はあざなえる縄の如し、ね……」

岩井戸は、いつか言われた言葉をシンハの前でつぶやいた。

ここはシンハの作った結界の中。

安倍方、陸奥の国側に着いた屋代郷は再び出羽の国へと編入されるものの、渡会家はその責を受け、御取り潰しとなった。

渡会の妻である岩井戸と、その跡継ぎである弥三郎は源氏の兵より追われる身となったのだった。

岩井戸は、なんとかその身を隠しながら、シンハを頼って亀岡文殊まで逃げ延びてきた。

「本当は、人間の政（まつりごと）に関与してはいけないって言われているッハ」

そうは言いつつも、シンハは結界を張って二人をかくまってくれたのだ。

こうして岩井戸と弥三郎は、いつかお家の再興をと願いながら、細々と畑を作りながら隠れ住む生活を始めることになったのだ。

数年の歳月が流れた。

弥三郎が成人するころには、渡会一族はすでにどこかでのたれ死んだものとされ、追っ手の心配もはやなかった。

たくましい成人となった弥三郎は、シンハを通じた大聖寺のとりなしで、とある村から気立ての良い娘を嫁にもらった。

「禍福はあざなえる……」

「縄の如しだッハ……」

女手ひとつの過酷な農作業のはてに、岩井戸はすっかり老いてしまっていた。

しかし、そのしわと赤切れだらけの手の中には、すやすやと安らかな寝息を立てながら小さな命が眠っていた。

「このまま死ねたら幸せでしょうにね……」

「馬鹿なことを言っはいけないッハ。本当の幸せはこれからだッハ」

「だといいいんだけど……」

「けど……なんだッハ？」

「弥三郎がね……」

「弥三郎が、どうかしたッハ？」

岩井戸は目を伏せた。

「わたしが愚痴っぽいのがよくなかったのかねえ、お家再興としつこく言い続けてきたでしょう、この子が生まれたから跡取りの心配は要らない。俺は天下にその名をとどろかす侍になるた



めに、修行の旅に出るんだ、なんていいだしてね……」

「岩井戸……」

「お家再興なんてもういい、戦いなんてしないで、穏やかに、静かに暮らすのが本当の幸せだと今さら言ったところでねえ……」

不意に赤ん坊がむずかりだした。岩井戸はあわてて赤ん坊を「よしよし」とやさしくゆすってやった。

#### 4

紫色の雲の中、シンハは文殊様と対峙していた。

「シンハよ、いかげんにあの人間の女性との関係をおしまいにしなさい」

文殊様は少し寂しそうな顔でシンハに語りかけた。

「しかし文殊様……」

シンハは食い下がろうとするが、文殊様はシンハの言葉をさえぎって、

「あなたの情が彼女に移ってしまったのはわかります。しかし、われわれの力は人には大きすぎるものです。あまり人間に肩入れすると、かえって良くない事が起こるかも知れません」

と、続けた。

「あなたの務めは、この日の本の国の人々を『人ならぬもの』から守ること、ゆめゆめ忘れてはなりませんよ、カッハ」

午睡から覚めたシンハは、しとしとと降る雨の音を聞きながら、何年も前に文殊様にたしなめられたその言葉を反芻していた。

と、突然ドンドンドンと、シンハのほこらを何者かが激しく叩いた。

何事かと思って外に出ると、そこにいたのはずぶぬれの岩井戸だった。

「いったいどうしたッハ？」

「シンハッ、お願い、お願いよお……」

岩井戸はシンハを抱きしめると泣き崩れる。

連れられるままに岩井戸に連れて行かれたのは彼女の家だった。

そしてそこには高熱を出し、咳き込み床に臥す弥三郎の妻と赤子がいた。

「お願いよお、シンハ……二人を……二人を助けてえ……」

伏して助けを乞う岩井戸だが、シンハの頭には文殊様の言葉が浮かんでいた。

「僕の務めは、人ならぬ魔物からこの屋代郷の人々を守ることだッハ。残念だけど、病に倒れた人を救うことはできないッハ……」

「お願いよシンハ！ あなたならできるはずでしょう。お願い、お願いよお……」

「……悪いけど……あきらめてほしいッハ……」

シンハは静かな口調でそういうと戸口へと振り向いた。岩井戸はそのシンハにすがりつく。

「後生よ、後生だからお願い、シンハ！ シンハ！」

その時岩井戸の手に触れるものがあつた。硬くて丸くて先がとがって……

そのものが何かを理解した瞬間、岩井戸は驚くほどの力でそれを奪い取った。

「チンターマニ……如意宝珠……コレさえあれば……」

「やめるッハ、僕が調整していないチンターマニは危険だッハ！それをこっちに返すッハ！」

しかし岩井戸の耳にはシンハの言葉は届かない。

かつてのように岩井戸は高々とチンターマニを掲げる。

シンハが奪い返そうと飛び掛るが、

「オン・チンターマニ・ソワカ！」

岩井戸の声のほうが早かった。

如意宝珠はまばゆいばかりの青白い光を放った。そしてものすごいエネルギーが宝珠へとむかって竜巻のように集まってきた。

如意宝珠、どんな願いもかなえる宝珠。岩井戸が望んだ願いは、病を払いのける豊かな命のエネルギー。そのエネルギーは望んだとおりに岩井戸の体へと集まった。しかしそのエネルギーの源は……

バラバラに崩れ落ちた岩井戸の家、そのガレキの中で岩井戸は呆然と立ちつくした。

秋とはいえ、いまだ葉の落ちてはいなかった庭の木々。そのすべてが葉を落としたばかりか萎縮し、枯れてしまっていた。

庭の木ばかりではない。隣家の、畑の、裏山の、目に見える範囲の全ての植物がねじれ、萎縮し、灰のような蠟の様な異様な色を呈していた。

「……坊……」

ふと岩井戸は家の惨状に気がついた。

おそらく嫁と孫が寝ていたであろう場所のガレキをあわてて掘り返す。

孫の布団が見えた。

「坊！ 坊！」

何とかガレキの直撃は免れているようだ。岩井戸は寝巻きのすそをつかんで引きずり出す。

「……やああああああああああああああああああああ……」

悲鳴を上げた岩井戸の見たものは、周囲の植物と同じように、ねじれ、萎縮し、灰のような、蠟のような異様な姿になってしまった愛しい孫の姿だった。

## 5

「ほう陰陽師、はるばる大和の国から鬼退治とは、こりゃ勇ましい」

山道を二人の男が歩いていた。

長旅で擦り切れた服を着ている日に焼けた大柄な侍は弥三郎。

修行のおかげか以前よりたくましさを増していた。が、ひげも髪も伸び放題で、たくましさよりもむさくるしさが先にたつ。

連れ立って歩く男は三十前後、垢じみた狩衣(かりぎぬ)を身にまとい棍のような杖を突いている。弥三郎よりは細身だが、同様に日に焼けなかなかの健脚だ。

「大和安倍の文殊さんには大恩があってな、そうでなければ出羽くんだりまで来たりはせぬよ」  
「俺のふるさとを出羽くんだりとは言ってくれるじゃない。ま、都を見た後ではあんたの言うとおりがもしれんがな」

弥三郎は少し眉をしかめるが、すぐにけろりとして男に尋ねた。

「しかし文殊さんとはね、アンタんところにも文殊さんがあるのか？」

「ほう、じゃあぬしは亀岡か？」

男は足を止める。

「いんや、隣の屋代郷ってとこだ」

弥三郎もあわてて足を止めた。

「そいつは残念だったな、行き先はどうやら一緒のようだ」

男は再び歩き出す。弥三郎はあわてて男に並ぶ。

「何だと、じゃあ鬼が暴れてるってのは？」

「亀岡と一本柳の間に山崎ってところはあるか？その辺らしい」

「……こうしちゃいられん……」

「まあ待て、今から急いだところでたかが知れている。それより策を練らねばならん。おぬしは地の利に明るいようだ、いろいろと話を聞かせてくれぬか」

足を速めた弥三郎に陰陽師は声をかけた。

「あらためて自己紹介しよう、俺は安倍妙星、陰陽師だ」

数日後、二人は出羽の国へと足を踏み入れた。露藤の辻に差し掛かる。

「むこうにいくと俺んちだ、こいよ妙星」

と、弥三郎が誘うも、

「先に亀岡文殊の用事を済ませねば、後ほど呼ばれるとしよう」

と、妙星は反対方向の亀岡文殊大聖寺へと足を向けた。

「これが安部の文殊から預かってきた如意宝珠と文珠です」

「そうか、コレでシンハ様も息を吹き返すであろう」

妙星はふくさに丁寧に包まれた宝珠を住職へと手渡した。

住職はうやうやしく受け取ると、祭壇の元へとその包みを持っていった。

妙星もその後ろに続く、と祭壇の上に犬か猫とおぼしき青白い木乃伊（ミイラ）のようなものが祭られていた。

「この木乃伊が……」

「はい、文殊様の使いのシンハさまです」

妙星の問いに住職が答える。

「こんなのが文殊様の使いねえ……」

眉をしかめる妙星に、住職が説明をする。

「鬼はシンハ様の力を取り込んで強大な力を得てしまいました。封じるにはシンハ様の力が戻ら

ねば……」

「そんなに強いのかい、その鬼は？」

「見た目は童女のようなですが、野犬のような獣を操るほか、つむじ風をも起こすと聞きます。その力は仏の位で言えば天と呼ぶにもふさわしい」

その言葉に妙星は目を見開いた。

「天？ 広目天とか増長天とか毘沙門天とかの？ 冗談じゃない、人の手になど負えぬではないか？」

「仏格としてはそうです、しかしその力をすべて制御できているわけではない。ゆえに、急がねばなりません」

そういうと住職はシンハへと目をやった。妙星もそれにならう。

落ち窪んだ目、半開きの口の小さな獣の干物を目にして、妙星の心には不安が澱のように積もっていった。

大聖寺を出た妙星が、弥三郎から教えられたあたりを訪ねると、家があったと思しき瓦礫の前で弥三郎が青い顔をしてへたり込んでいた。

「弥三郎……おい弥三郎……」

妙星が声をかけると弥三郎はうつろな目をしながらゆっくりと妙星のほうへ顔を向けた。

「……おれの家が……おとせは？ 弥彦は？ お袋はどこ行っちゃったんだ……」

「……心中、察する……」

名星はつぶやいて、弥三郎から目をそらした。

そのそらした先、弥三郎の家だけではなく、あたり数件の家も半ば朽ち果て、雑草におおわれ、人の気配はまったく感じられなかった。

「くっ……鬼め！ 鬼のやつめ……」

弥三郎はこぶしを地面に打ちつけると、それを杖にしてゆっくりと立ち上がった。

「大聖寺の住職から話しを聞いてきた。相手は鬼というより鬼女と言った様子だそう。うら若い娘の姿で、橋のたもとで野犬と風を操って追い剥ぎまがいのことをしているそう」

それを聞くと弥三郎は妙星にくるりと背を向けた。

「鬼だろうと小娘だろうと容赦はしねえ、俺の留守中に何もかも滅茶苦茶にしゃがって！」

絞り出すような声でそう言うと弥三郎は大股で歩き出した。

「待て、弥三郎！ 冷静になれ！」

「これが落ち着いていられるか！ 来いよ妙星！ 鬼退治だ！」

弥三郎は振り返りもせずにかんだ。

「待てというに、まずは戦力を整えてから、おい、弥三郎！ 弥三郎……」

弥三郎は聞く耳を持たない。

「ええい、急急如律令、式神よ大聖寺の和尚に伝えよ、すぐに儀式を始めよ」

妙星は懐から式札を取り出すと呪文を唱え、あかね色の空へと放り投げた。

弥三郎と妙星は橋の上に立っていた。

闇があたりを支配し、かれこれ数時間は経とうとしていた。

川べりの草が風に吹かれさわさわと音を立てている。

不意に空気がひやりとしたもの変わった。

「……これではどちらが追い剥ぎかわからんな……」

いつ現れたのか、背後からの少女の声に二人は振り返った。

少女は青白い着物を身にまとい、鉢巻きを猫の耳かと思まがうばかりに大きく、長い髪の後ろで結んでいた。

「貴様が村をめちゃくちゃにした鬼畜生か！」

弥三郎が吠えた。

「村？」

少女は眉をピクリと上げる。しかし、冷たい表情のまま、

「すべては愛するもののため……さあ、命が惜しくば身ぐるみ全て置いていけ」と両腕を大きく広げた。

「何が愛するもののためだ……俺の家族を……喰らえ！」

怒りに我を忘れた弥三郎が抜刀して少女に襲い掛かる。しかし少女は大きく後ろに跳んでそれをかわした。

「なるほど、ならば力づくで奪うとしようか」

少女は懐をまさぐると何かを地面にまいた。するとそれはむくむくと大きくなり、十数頭の獣のような姿に変化した。

「式神か？ 気をつけろ！」

言いながら妙星も懐から式札を取り出し空に放り投げた。

式札は炎を身にまとった数羽の鳥に変化し、上空をぐるぐると回り始めた。

少女が腕を振るう。すると獣たちがいっせいに弥三郎めがけて襲いかかった。

「間に合え！」

妙星が式神に命じる。すると火の鳥は上空から獣めがけて急降下した。

獣たちが弥三郎に今にも噛みつかんとしたそのとき、火の鳥が炎の壁となって弥三郎の前に立ちはだかり、その足を阻んだ。

弥三郎もその隙に後ろへと下がる。

が、横から回り込んできた一頭が弥三郎めがけて飛び掛ってきた。

「があっ！」

弥三郎は刀で切りつけ獣を払いのける。が、手ごたえがおかしい。

もう一頭の獣が襲ってくる。今度は正面から切りつける。が、

「くそっ、なんだ？ 切れねえぞ？」

獣は打ちのめされ、跳ね飛ばされるが、本来ならば真っ二つになるべきが、再びその身を起こしこちらへと向かってくる。

「こっちへ！早く！」

妙星が手招きする。

弥三郎が転がるように橋の上へとたどり着くと、その橋の前に火の鳥が降り注ぎ、先ほどより高い炎の壁をこしらえた。

妙星はふところから札を取り出すと、なにやら紋様を描きしたためた。

「刀を」

弥三郎は言われるままに刀を向けた。

妙星は先ほどの札を刀で刺し貫き、

「急急如律令 斬魔付与」

と、小さくつぶやく。

頭上に気配を感じた。

見上げると、獣たちがだんだんに積み重なって炎の壁の上から頭を出している。

「ガウルッ！」

一声吠えると獣が一匹、炎を飛び越えて襲いかかってきた。

「たたっ切れ！」

妙星の声にはじかれたように立ち上がる弥三郎。そのまま刃を獣の頭に合わせる。

スカッ！

まるで熟れたスイカに包丁を合わせたかのように、小気味よい手ごたえで獣は真っ二つになった。

獣が二頭、三頭と次々に飛び掛ってくる。

弥三郎は次々に刀を振るう。

すると獣は鈍い音を立てて地面へとその屍を打ち付けた。

「いいぜ妙星。見違えるようだ」

言うと弥三郎は刀を握りなおす。

炎の壁の勢いが落ちてくる。

雪崩を打って襲い掛かってくる獣どもをひらりひらりといなしつつ、弥三郎は刀を振るう。

妙星は皮の腰帯をつけた赤銅色をした筋骨隆々の闘士の式神を召喚した。

闘士は二体、弥三郎の背後と妙星を守る。

弥三郎の刀と妙星の式神の力で獣の数も半数となった。

手ごわいことを悟った獣は、二人を遠巻きに囲み、忌々しそうに咽を鳴らしている。

「どうした！ もうしめえか？」

弥三郎が吠える。獣はその声に後ずさる。

が、歩みを進めてきたものがいた。例の少女だ。

「ダデーナーをこうもまあ……」

少女は地上から十数センチほどのところをすうっとすべるように移動すると、弥三郎のおよそ十メートルほど前で止まった。両方の腕を腰の辺りに広げ手を開く。その手のひらがなにやらぼうっと光を放つ。

「殺すのが惜しいほどの腕前よ。どうだ、わが家臣とならぬか？」

「冗談じゃねえ！ 化け物の手下なんざ死んでもごめんだ！」

弥三郎はつばを吐いた。

「そうか……ならば死ぬがよい」

背筋に寒いものが走った妙星は、すぐに闘士を弥三郎の前に割り込ませる。

と、同時に少女が腕を振るう。

次の瞬間、闘士は逆袈裟に切り上げられる。

右、左、右、左、少女の腕が振るわれるたびに闘士の体に見えない刃が鋭い傷をつけていく。

少女はがむしゃらに切りつけているわけではない。弥三郎と妙星に自分の実力を見せ付けるがごとく、余裕を持ってその腕を振っているのだ。

見えない刃で切り付けられた闘士は、まるで松ぼっくりのようにボロボロになり、どうと地面へと崩れ落ちた。

「式神よ！」

妙星が指で天を指す。すると上空を舞っていた火の鳥が少女の足元めがけて急降下する。

気づいた少女は火の鳥に右手をかざし「破！」と気合を入れる。

火の鳥は彼女の2メートルほど上で四散した。

弥三郎はこの機を逃さない、刀を横に構え少女に迫る。が、あとわずかというところで少女の左手から発せられた圧縮空気の弾をその身に受け、駆け出したあたりまで吹き飛ばされる。ろくに受身をとれず、背中をしたたかに打ちつける弥三郎。痛みでしばらく呼吸ができない。

「あの程度の目くらましで惑わされると思ったかい？」

少女が上空に向け腕を振るう。するとつむじ風がおき、火の鳥たちはその渦の中に飲まれ、消えてしまった。

「く、しばし時間を！」

妙星は闘士の式神を少女に向かって走らせる。

少女は臆することなく闘士へと向き直り、両の腕を思いっきり振りあげた。

すると爆風のような風が巻き起こり、闘士は十数メートル上空に吹き飛ばされる。

爆風は弥三郎と妙星にも襲い掛かる。

幸か不幸か弥三郎は倒れ伏していたため仰向けがうつぶせになる程度であったが、一方の妙星は爆風をもろに受け、橋から川の中へと盛大な水しぶきを上げて転落してしまった。

水しぶきがあがるのとほぼ時を同じくして鈍い音を立てて闘士が地面へと激突し、その姿を元の式札に戻してしまう。

もうもうという砂埃の中、弥三郎のうめき声だけが聞こえる。

少女は両腕を横から前へとゆっくりと動かす。すると柔らかな風が砂埃を払って視界を晴らす。

道の真ん中に弥三郎は横たわっていた。肩で荒い息を繰り返している。

ジャリッ、ジャリッ、

空中から地面へと降り立った少女が弥三郎へと歩みを進める。

刹那、弥三郎が振り返りざまに刀を投げた。刀はまっすぐ少女へと向かう。が、鋭く飛んでき





にじんだ。

指先に風を集める。

その動きに妙星は一步進み出るが、シンハがそれを制した。

少女は指先へと集めたその風で弥三郎のむさくるしいひげをなでる。するとひげはきれいにそり上げられて、岩井戸の愛しいわが子の顔が現れた。

「弥三……弥三郎……弥三郎おおおおおおおおおおおっ！」

岩井戸が声を上げた。と岩井戸を中心に大きなつむじ風が沸き起こる。しかしそれは先ほどまでのまがまがしい風の力ではなく、暖かく慈愛に満ちたもののように感じられた。

「ん……んん……」

体の底から力が沸き起こるような感覚を受けて弥三郎は目を覚ました。

瞳を開けると先ほどまで戦っていた少女が涙を流しながら自分の体を抱き起こしていた。いや、少女の顔はすでに少女から大人の女性の顔に、それも見覚えのあるような顔に変化していた。

「お、お袋……」

そうだ、お袋の顔だ……シンハ様にかくまわれたころの顔、なれない畑仕事に疲れ果てていたころの顔、元服し、祝言を挙げたころの顔、弥彦が生まれたころの顔、武者修行の旅へ出る自分を見送ってくれたころの顔。まるで早送りのように弥三郎の目にうつる岩井戸の顔は、しわを刻み、年老いていった。

「どういうことです？」

妙星がシンハにたずねた。

「岩井戸が、弥三郎に命を分け与えているッハ」

「命を……？」

妙星が再びたずねる。

「そうだッハ、岩井戸は弥三郎の子供を救おうと、ぼくの力を勝手に使おうとしたッハ。おかげで力は暴走、あのときのぼくの力のほとんどが彼女へとうつってしまったッハ」

「力が……」

「岩井戸は、ああやって自分の孫を救いたかっただけだったんだッハ……」

「……」

妙星は瞳を伏せた。が、再びキッと岩井戸へ視線を向けると黙って印を組み始めた。

「彼女を退治するッハ？」

今度はシンハがたずねた。妙星は印を組み替えながら、

「これが私の仕事ですから……力を失い無防備だ……こんな好機は見逃せません……」

妙星は静かに落ち着いた声で言った。

「そう、ッハ……」

シンハはあきらめたようにつぶやいた。その視線の先にはすでに老婆の姿となった岩井戸が、慈愛に満ちた表情で弥三郎を抱きかかえている姿がうつっていた。

「臨 兵 闘 者 皆 陣 烈 在 前 ……………」

妙星が九字を切る。

シンハがそっと目を伏せた。

「は！」

妙星が気合をこめると指先から神々しい光がはなたれた。光は一直線に岩井戸へと降り注ぐ。

「きゃあああああああああああああああああああああああ……………」

岩井戸は雷に打たれたようにその体をはねさせると、光の球に包まれた。

「やめろ……妙星……お袋に何をする……」

弥三郎は振り返ると叫んだ。

「これが俺の使命……許せ、弥三郎……」

そういうと妙星はいっそう念をこめた。岩井戸の悲鳴がさらに高いものになる。

「クソ……体が思うようにうごかねえ……シンハさま……止めてくれ……シンハさま」

「……………」

シンハは目を伏せて押し黙るだけだった。

「くそ……お袋！……お袋！」

弥三郎は必死に立ち上がると、岩井戸と妙星の放つ光の射線上に仁王立ちになった。

「がああああああああああああああああああつつつ……！！！！」

「バカなっ！ よせっ！ 弥三郎！」

妙星が叫ぶが弥三郎は答えない。

位置を変え、岩井戸に光線を当てようとするが弥三郎が盾となり光をさえぎる。

「……今のうちに……逃げろお……お袋……」

「弥三郎！ もう、もう……」

岩井戸の声はなかなか言葉にならない。

「お袋がここから逃げ出せばこの光も止まるさ……さあ……早く……」

弥三郎のひざが崩れ落ちる。それを見た岩井戸は意を決して風を集める。

「くっ、シンハ様っ！」

妙星の声にシンハが跳びだそうとするが、そのまま地面にどうと体を横たえる。シンハもまだようやく体が動くようになったばかり、大聖寺からここまでくるのでさえ精一杯だったのだ。

岩井戸へと集まる風は彼女を包み込んだ。その風に乗って彼女の体は宙へと舞い上がる。

「逃がすか！」

妙星が光を上空へと向ける。弥三郎の体から光がそれた。

その機を突いて弥三郎がふらふらしながらも妙星へと駆け寄り、正面からしがみついた。

そのすきに岩井戸は風に乗ってはるか西の空へと飛び去ってしまった。

「弥三郎！ くっ、弥三郎————っ！」

妙星の絶叫が闇の中に響き渡った。

シンハの話を書くうちに、あたりはだいぶ薄暗くなってしまっていた。

「それが、弥三郎婆の話の真実なの？」

シンハは黙ってうなずいた。

「じゃあ、そのときの復讐が今回の事件の動機なの？」

「いや、岩井戸が理性を取り戻したのを見たのはその時だけだったッハ」

「っていうと？」

「岩井戸の心は壊れているッハ、彼女の心にあるのは自分の幸せだった時代を取り戻したい。その思いが暴走しているだけ、それだけだったッハ」

シンハは伏し目がちにそうつぶやいた。

「それだけだったっていうことは、その後もなんかあったの？」

シンハは顔を上げると再び語り始めた。

「おっかな橋の戦いから逃げ出した岩井戸は、新潟の弥彦山まで逃げたといわれているッハ。ま、管轄が違うから詳しいことはよくわからないけど、そこで力を蓄えた岩井戸が再びこの地を訪れたのが、江戸時代の寛政二年、西暦で言うと1790年頃の話だッハ」

「1790年……どこかで見たような……」

わたしは記憶をたぐる。

「たぶんぼたんが見たのは安久津八幡宮でだと思うッハ」

「あ、そうそう。八幡様で何かあった年よ」

シンハのいうとおり、安久津八幡宮の三重塔の解説文で見た年号だった。

「安久津八幡宮は源氏の神様の八幡神を祭った神社。施設的にはまったく関係はないけど、そのシンボリック存在だったのがとなりのお寺にあったあの三重塔だッハ。再びこの地を訪れた岩井戸は渡会家をつぶしたそのにつくき源氏のシンボルを破壊しようと猛威を振るったッハ」

「その結果が……」

「そう、三重塔が烈風で倒れたというのが岩井戸の仕業だッハ……」

「な!？」

千代ちゃんが目を丸くする。

シンハは話を続ける。

「そのときは僕の手も回復してたッハし、そのほかにも優秀なお坊さんがいっぱいいたんで、何とか封印することができたッハ。そのときに彼女が言っていたんだッハ『再びあの幸せな時代を取り戻してやるんだ。あの幸せだった頃の屋代郷を』って……」

「シンハ……」

シンハの声が上ずっていた。きっとそのときのことを思い出しているのだろう。

「どうやって封印が解けたかはともかくとして、おそらく彼女の目的は、彼女だけの理想郷、昔の屋代郷を取り戻すことだッハ。おっかな橋で追いはぎをしていたときも、三重塔を吹き飛ばしたときも、そして今の高畠町を壊そうとしていることも、すべてはそこに行き着くッハ」

「昔の……屋代郷……」

シンハの言葉を繰り返す。が、実感がわからない。

「じゃさ、平安時代を再現しようってことなの？ ここの？」

「あれから200年、その間に彼女の考えがどう変わったかは、彼女と話をしてみないことにはわからないッハ。ただ状況を整理して推理してみると……」

シンハの言葉にわたしと千代ちゃんは身を乗り出す。

「何らかの理由でこの時代に目を覚ました岩井戸は、手っ取り早く力を取り戻すために文珠を盗み出した」

シンハが手のひらの上に文珠をひとつ取り出すとそれを握った。

「岩井戸は自らの手下を作り上げるためダデーナーを召喚した。それもある程度知能の高いものを。人並みの知能を持たせるには8～9個くらいの文珠が必要になるッハ」

「……文珠10個のダデーナー……」

わたしと千代ちゃんは顔を見合わせる。

「ダデーナーを安定化させるためには依り代に合体させること、それが……」

そうやってシンハは赤木君のほうを見る。赤木君は青鬼の張りぼてのかたわらにうずくまり、おどおどこちらをながめている。

「青鬼の、張りぼて……」

その言葉に赤木君は胸に握った手を当てる。

「ダデーナーは依り代にその特性を左右される性質を持つッハ。たとえば今まで相手にした電車、さくらんぼ、タヌキ、ヘビ、そして龍……岩井戸は鬼の強力な力をあてにして、張りぼてにダデーナーを取り憑かせた。しかし、岩井戸は知らなかったんだッハ、『泣いた赤おに』の話を……」

赤木君があぶら汗を流しながらしハアハアと荒い息をつき始めた。シンハがこれからしゃべろうとすることはわたしにだって容易に想像がつく。ましてや当の本人にしてみれば……

「依り代である鬼の張りぼては、ましてや人並みの知能を持つそれは岩井戸の予期せぬ動きを始めたッハ。すなわち『泣いた赤おに』のキャラクターの持つ人間の友達が欲しいという欲求に従って活動を……」

「もうやめて！」

耐え切れずにわたしは叫んだ。

「そんなの、そんなの何の証拠も無いシンハの想像じゃない……そんな、そんなはず無いわよ青木君も……赤木君も……そんなはず……」

わたしは赤木君に目を向ける。赤木君は青い顔で歯をガチガチと鳴らしながらわたしたちの方を見ていた。

「赤木……君……」

わたしは赤木君に手を差し出した。

すると、赤木君はあわてて腰を上げると後ずさる。

伸ばした腕を見て気づく。そういえばわたし、まだ変身を解いていない。先ほど青木君に光線を浴びせた岩井戸の姿とわたしがかぶったのか、赤木君は振り返ってもものすごいスピードで駆け出した。

「赤木君！ 赤木君！」

わたしはあわてて変身を解き赤木君の背中に声をかける。が、彼は振り返ることなく見えなくなってしまった。

「シンハ！」

わたしはシンハにつかみかかる。が、シンハは冷静な顔で言葉を続けた。

「なくなった張りぼては青鬼だけじゃなかったッハ……残る赤鬼の張りぼて……おそらく赤木もダデーナーだッハ……」

第7話 了





「今日は来るかな、赤木君……」

「……うん……」

千代ちゃんの問いにそう答えはしたものの、わたしの脳裏には、彼の去り際のおびえきった顔が思い出された。彼にとって、わたしがそのような恐怖の対象であるという事実がなぜか悲しくて、目の前の朝霧のようにどんよりとわたしの心に垂れ込めていた。

赤木君が姿を消して1ヶ月以上が過ぎた。

学校には怪我で自宅療養ということになっている。

同様に姿を消してしまった青木君は、シンハが化けてごまかしている。

もともと交友関係の希薄な二人のことゆえばれている様子はない。

今日は2年に一度のクラシックカーレビューの日。

昭和の町並みに古い車を展示して楽しもうという企画で、2年に一度とはいえ長い間続く恒例行事となっている。

会場は町中心部の商店街。夏祭りの傷跡も何とか癒えて、和やかなムードでお祭りの支度が進められている。

時刻は8時30分。わたし、千代ちゃん、そして青木君に化けたシンハの3人は、夏に黄色い竜と戦った交差点のそば、十字屋文具店の前に備えられたベンチに腰掛けて、クラシックカーが係のおじさんに誘導されて並べられていく様子を眺めていた。

「これだけのお祭りならきっと岩井戸も赤木も現れるッハ。で、問題は現れた後のことだッハ……」

「ほんとに……戦わなきゃなんないの……赤木君とも……」

「……いずれはそうなるッハ……でも、今日のところは相手の出方次第だッハ……」

わたしの問いに、シンハがこちらへ顔を向けることなくさみしそうに答える。

「そう……」

何度もシンハに問いかけた質問、返ってきたのはまた同じ答え。

つぶやいて再び交差点に目をやると、あの、青竹ちょうちん祭りの日の記憶がよみがえる。

油断して、青い龍にかじられそうになったわたし。

あの日は、青木君たちの仕業だと思って怒ったものの、岩井戸の存在が明らかになった今となつては、羽山公園で真相を打ち明けられたときのような彼らに対する怒りや嫌悪感はずでに消えていた。

むしろ自分たちのシナリオが狂った中でも、あの強大な龍に向かってわたしを助けるために命がけで飛び込んでくれた赤木君に対して、感謝の念だけでは言いあらわせない何か別の……いや、これはたぶん、気のせい……だと思ふ……

「なにぼーっとしてんのぼたんちゃん！ 今日のところはまず赤木君よりも岩井戸よ！」

千代ちゃんがこぶしを固め、鼻をふくらませながら言った。

前回の戦いで遅れをとった彼女は、岩井戸とその配下の狼型のダデーナーへの対抗心に燃えに燃えていた。足の怪我が癒えると、分身したシンハを相手に毎晩のように特訓を繰り返していた。

。

その訓練の打ち合わせを変身したシンハ相手に学校でするもんだから、青木君と千代ちゃんは付



き合っているといううわさがまことしやかに広まっている。

「今日は町のみんなにミレニィサーカスを見せ付けてやるんだから」

千代ちんの特訓の課題は、空中での機動力の強化と火炎弾の誘導化。

千足狼ならぬ千足シンハ相手なら、攻撃をかわしきり、火炎弾を四割程度叩き込むことができるようになった。

「ミレニィサーカス」とはなにやら楽しそうなネーミングだが、かっこいい空中戦闘の演出のもじりだそうだ。

一方わたしはというと、防御の術をシンハから教わって練習を続けていた。というのも、このあいだのシンハの昔話に出てきた岩井戸の真空波から身を守るためだ。

技の名前は「パリッチャ」インドの言葉で盾を意味するらしいが……インドの人には悪いけどミレニィサーカスみたいに自分で名前をつけなくちゃと思う……。

「やぁ早いな、君たち」

部長がリュックをぶら下げながら近づいてきた。

「おい、聞いたかい？ なんでも最近未確認飛行物体、UFOが出るらしいぞ！」

「え？ ホントですか？」

と、千代ちんが身を乗り出す。

「ああ、何でもどこかの山の上のほうで光がギザギザに飛んだかと思うと、いくつかの小さな光の玉に分かれて消えるらしい！」

「へええ……」

そのやり取りに苦笑を禁じえないわたし。

どっからど一考えても特訓中のミレニィのことでしょ、というのは客観的に見ていたわたしだから思うことかもしれない。

とにもかくにもろくな打ち合わせもできずに、必ず何か起きるであろう一日の幕が開けようとしていた。

## 2

「ほっほ一、これまた渋い……あ、コレテレビで見たこと……えっとなんて名前でしたっけ？」

「これはほらあれだよ、ええと、なんだっけな……」

「ああここに書いてありますよ、ホラ……」

千代ちんと部長が盛り上がってはしゃいでいる。割って入ろうとする吉田君。日下部君は珍しい被写体をカメラに収めるのに夢中で、いつの間にかはぐれてしまった。

「ぼ……冬咲さんはこういうのは好きじゃないッハ？」

青木君に変身したシンハがしゃべりかけてくる。この格好のときは「冬咲さん」と呼ぶように言っているが、なかなか慣れないでいる。

「まあね一、なんだかんだ結構見に来てるからわりと飽きてきたかなあ……なんて……」

「へえ、懐かしいのがいっぱいあって顔がニヤニヤするんだけどッハねえ」

「そりゃあ、シ……青木君なんかはそうでしょうよ。でもわたしは特に思い入れもないし」

「そんなもんだッハ？」

「正直ふーんって感じかなあ、そんなもんよ」

「残念だなあ冬咲君、本当に残念だ。君も竹田君のように感受性をだね、どうだい見たまえこのフォルム。いい車を作ろうという当時の技術者のパッション、情熱がひしひしと伝わってくるじゃないか……」

部長が割り込んできて熱く語りだした。

「部長、それは自分の言葉ですか？」

「え？」

わたしの返答に部長が目を丸くした。感受性云々のくだりでカチンと来たのでこの際なので言わせてもらうことにする。

「確かにかわいらしいわたし好みの車もあります。でも現代の車に求められるのは低燃費性能と安全性だと思います。そういった価値観から見ると、ここに並んでる車を無理して乗り回すのは少なくともわたしの感覚では考えられません。それに部長は当時の技術者の情熱と持ち上げました。彼らを否定するつもりはありませんが、わたしは同じ時間を費やすなら現代の技術者の情熱の詰まった、最先端のコンセプトカーを見に行っただほうが有益のような気がします。部長はどの車のどんなデザインからどのような技術者の情熱をひしひしと感じるんですか？」

「お、おう……え、ええと……それはだな……この辺から漂う、何だイノベーションがだな……」

部長の目が泳いでいる。

ぶーん、とケータイが震えた。メールだ。千代ちゃん？

「いじめ、よくない（）」

と、書かれたメールの内容と、部長の後ろで済ました顔をしている千代ちゃんを交互に見比べる。と、千代ちゃんが新聞部から離れようのジェスチャーを送ってくる。

「部長、すみません急用が入りました。と、いうわけで今日の取材はここで失礼させていただきます。部長の豊かな感受性のつまったいい記事を楽しみにしてます。じゃ」

「あ、ああ楽しみに待っててくれ……」

部長の気の抜けたような返事を背中にわたしは一同を離れた。しばらくすると千代ちゃんとシンハが駆け寄ってくる。

「なあにい、今日はずいぶんと過激なんじゃない？」

「そうかしら？」

「朝から見ると、どうもぼたんはこのお祭りがそれほど好きじゃないように感じるッハ」

「んんん……まあ、ね」

わたしはうつむきながらシンハの言葉を肯定する。

「そりゃあまあかっこいい車もあるし、こういう車に乗るのは好き好きだと思うのよ。でもなんていうのかな、後ろ側に流れる若い人そっちのけの懐古主義みたいなのがどうも受け入れられなくて……」

「へえ……」

「でも、まあ、いいころの思い出っていうのは大事だッハ……」

シンハが妙にしみじみとしながら言った。が、

「そりゃあ思い出は大事かもしれないわよ……でも、昭和、昭和、昭和ってなによ、知らないわよ生まれてないんだし！　なんていうのかなあこの昭和っていう目に見えない檻に閉じ込められるみたいな感覚。それがなんていうか肌に合わないのよ！」

「こじらせてるわね、中二病……」

「ま、人それぞれだッハ」

千代ちゃんとシンハが顔を見合わせているようだ。

こっちは火がついたというのに二人とも妙に納得している。

ふんむー、不完全燃焼だ！

こんな気分を吹き飛ばすのは甘いものだ！

芋煮！　芋煮！　また芋煮！　沿道に居並ぶ芋煮の出店の中からようやくクレープの屋台を見つけると、たっぷりの生クリームにキャラメルソースとチョコスプレーをかけたものをひとつと、カスタードクリームにチョコとバナナを合わせたクレープを注文し、交互にかじりついた。

千代ちゃんもクレープを、シンハはファインのぐるぐるソーセージを……ああ、ここぞとばかりにあんなに長いのを……人の財布であれを買ってると思ったら押さえられようとしている興奮の炎が再びくすぶりだしてきた。

「だいたいさ、中途半端なさ、昔の町並みをさ、再現しようなんてさ、岩井戸のさ、高畠平安化計画とさ、やってること変わらないじゃない！」

「ふーん、なるほどねー、そういう考え方もあるわけかー」

千代ちゃんがなだめるようにうなずいた。

「じゃあさ、ぼたんちゃんは高畠がどんな町になったらいいなあって思うわけ？」

クレープをマイクのように突き出して千代ちゃんがたずねる。

「それは……」

突然そんなコトいわれたって思い浮かんだりしない。ただわたしは今までの価値観を吹き飛ばすような、そんな新しい出来事に出会いたいだけだ。この町がどうのこうのなんていうことはいままで考えてもみななかった。

「さっきぼたんは岩井戸とこのお祭りがおんなじだっていったけどそうじゃないッハ」

押し黙ったわたしを前にシンハが口を開いた。

「岩井戸は、悲しい言い方だけど、もう存在してはならない存在だッハ。それがこの町をどうこうするのは確かにお門違いだッハ」

ソーセージを一口かじるとシンハは続ける。

「だけどこのお祭りはちがうッハ。この商店街に住む人たちがいろいろと考えて、最善と思ってやってる町おこしだッハ。それがぼたんの目指す高畠町にそぐわないって言うのなら、ま今日はしょうがないにしても、来ないか何か新しいものを考えて提案していくほかはないッハ」

「……そんなコトいったって、わたしら子どもじゃない……」

「この町の未来を作る資格が十分にあるって言う話だッハ。そのための勉強をする時間も十分にあるッハ。それに町を活性化させるのは若者とよそ者とバカ者だっていうッハ」

「バカ者で悪うござんしたね」

そうやってわたしはシンハのソーセージをひたたくって口の中に放り込んだ。

「ちょ、それせっかく千代が買ってくれたソーセージだッハ！」

「へ、わたしの財布から出したんじゃないの？」

「あ、新技特訓に付き合ってくれたお礼にとって……」

「ぼたん～……」

シンハが恨みがましい目でわたしを見る。

「……わ、わかったわよ……新しいの買ってあげればいいんでしょ……」

と、そのとき、通りのほうからいくつもの悲鳴が聞こえた。

「……残念、それどころじゃなくなっちゃったようね」

「あとで絶対返してもらおうッハよ」

そうとうとシンハは如意宝珠をわたしたちに放ってよこした。

### 3

まずは状況の確認と、声のするほうに向かった。

いた、狼が八、九、十匹。

夏に龍と戦った、通りの交差する十字路の真ん中。

そこに現れて観客たちを威嚇している。

「千代ちゃん！ シンハ！」

呼びかけに顔を見合わせる三人。

「どこで変身したらいいと思う？」

千代ちゃんの額を汗が流れ落ちる。

とにかく人が多すぎるのだ。例年より特に多い。

「おそらく……ラクシュミーのせいだッハね……みんなアトラクションか何かと勘違いしてるみたいだッハ……」

シンハの言うとおりに人は逃げ出すどころかますます押し寄せてくる。

「ま、満員電車みたい……」

「本場モンはこんなもんじゃないわよ……」

「うへえ」

千代ちゃんの言葉に気が重くなる。

ともかくあの狼ダデーナーが騒ぎを始める前に、この場から変身できる場所に移動しないと、と後ろを振り向いたとたん、ドッ！と歓声が上がった。

何ごとか？と振り返ると真っ赤な衣装に身を包んだ大男がダデーナーの一匹にかかと落としをお見舞いしたところだった。

「赤木だッハ！」

いつもの覆面姿の赤木君がダデーナーを蹴り飛ばし、雄雄しく仁王立ちになる。

歓声の中、狼たちが赤木君に飛び掛った。

赤木君はその動きを見切ると一体を両手でつかみ、曲げたひざにたたきつけた。

動きの止まった赤木君に飛びかかる狼、それらを手に持っている先ほどのぐったりしたダデーナーでなぎ払う。

さらには後ろから飛びかかる二体のダデーナーを振り返りもせず裏拳で叩き落す。

すごい……

三面六臂の大活躍……というのだろうか、次々と襲い掛かってくるダデーナーを目にも止まらぬ動きで殴り付け、蹴り付け、いなしていく。その鬼神のごとき戦いぶりに周りの人たちの声が無くなってきていた。

いつしか狼ダデーナーは赤木君の周りを距離をとって取り囲み、のどを鳴らし威嚇する。かなわないと踏んでのことだろう。

「このまま赤木君だけでけりがついたりして」

「いや、赤木はダデーナーを浄化させることができないッハ……長引けばあぶないッハ……」

楽観的な千代ちゃんにシンハが釘をさす。そうか、トゥインクルファウンテンとかで浄化させないとダデーナーは文珠に戻れない。となると長引けば赤木君の体力が持たない。

「何とかしてわたしたちも加勢しないと！」

と、言ったそのとき、また新しい動きがあった。

ダデーナーたちが展示してあるクラシックカーにその身を憑依させ始めたのだ。

無人の車がけたたましいエンジン音を立て始め、ライトから不気味な光を放ち始める。

キャキャキャキャとすさまじいタイヤの音を立てながら赤木君に向けて車が突っ込んでくる。

赤木君はボンネットに両腕をたたきつけ、跳馬のように空に舞い、突進をかわす。

車はそのまま信号機に突っ込んだ。

「まずいッハ！ 一般人にけが人が出るッハ！」

ここにきてようやく観衆たちも我に返った。あわててみな振り返り、戦いの場から離れようとする。

悲鳴と怒号の中、わたしたちはもみくちゃになりながら必死で変身できそうな場所を探すけどこも人でいっぱいだ……

「どうせ誰も見てる余裕なんか無いッハ！」

「バカなこと言わないでよ！」

「じゃ、しっかりつかまっているッハ！」

いうなりシンハはわたしと千代ちゃんを両脇に抱きかかえ、肉の斎院の屋上へと跳び上がった。

「……、……、な、なにすんのよ！ こ、こっちは生身なんだからね！」

「文句はあとで聞くッハ、赤木が狙われているッハ 早く！」

そうするとシンハは衣装を変化させる。赤木君の衣装の青バージョンといった装いだ。

そうこうしているうちにも下からは、ドカン！ ガシャン！ と車がぶつかるような音が聞こえてくる。確かに一刻を争う事態だ。

「行くよぼたんちゃん！」

わたしは千代ちゃんの目を見てうなずく。

『オン・チンターマニ・ソワカ！』

穏やかな光に包まれ、わたしたちはラクシュミーへと変身する。

屋上の端へと走り、交差点を見る。すると赤木君が展示してあった誰かの大きなオートバイへまたがり、南のほうへと走り去っていくのが見えた。それをダデーナーの憑依した車も追いかけて走り去っていく。

「あ〜あ、一足遅かったか……」

うなだれるわたしたちを尻目に、

「ナニ言ってるツハ、ぼくらは追いかけるツハ！」

と、シンハが屋上から飛び降りた。

あわててわたしたちも追いかける。

下に下りるとシンハはすでに目星をつけていた。

「アルファロメオ・グランスポルト・クアトロローテ。これがいいツハ」

鼻っ面の異様に長い2シーターのオープンカー。シンハが乗り込みセルを回すと、その長ったらしい名前の車は小気味よくマフラーからエキゾーストガスを吐き出した。

「これって、あれだよな……なんだっけ、あの泥棒のアニメの……」

ミレニィが大喜びでシンハの隣に座る。

「ちょっと勝手にこんなんしていいの？」

「緊急事態だツハ、早く乗るツハピオニィ」

「乗るってどこに？」

「予備タイヤの上にも座るツハ」

座席の後ろの予備タイヤにまたがり畳まれている幌をしっかりとつかむと、シンハがアクセルを目一杯踏み込んだ。

オーナーらしきおじさんが両手を上げて追いかけてきたが、じき見えなくなった。

「やれやれ、とんでもないものを黙ってお借りしちゃみたいね……」

「おじさんの心なんかよりもどっち行ったかよ！ ひとつ飛びして調べようか？」

「いや、タイヤ痕からして、左だツハ！」

シンハは減速もせず国道399号線に突っ込み、思いっきりハンドルを左に切った。幸い走っていた車がいなかったからいいようなものの、盛大に後輪を滑らせ方向転換をした。その横Gにわたしは振り落とされそうになる。

「ちょっとシンハ！ほんとにちゃんと運転できんの？」

たまりかねてたずねると、

「理屈はしっかり頭の中に入っているツハ」

「運転したこと無いってえの？」

「運転したことなんてあるわけが無いツハ」

シンハがギアをトップに入れる。車がぐんと加速する。予備タイヤの上のわたしは必死で幌にしがみつくほか無い状態だ。あらためてあのアニメの侍の身体能力の高さを、いや、所詮はアニメの世界だということを体感する。

車は今までに体験したことの無いスピードで399を東に突き進み、もう高畠一中の横を通り過ぎてしまった。きっと先に行った赤木君とダデーナーのカーチェイスのあおりを食らったのだろう、沿道に何台か車が落ちている。

「見えたツハ！」

シンハが叫ぶ。目を凝らすと車列は右折し、ぶどうまつたけライン、和田地区へと抜ける峠道へと入っていった。

先ほどのように盛大にドリフトしながらわたしたちもぶどうまつたけラインへと入る。

「ねえ、ところでさ……どうやって戦うの……？」

「どうって、トゥインクルファウンテンで浄化させていくッハ」

ミレニィの問いかけにシンハがとんでもないことを言っただけ。

「この状態でどうやってロッド振り回すのよ！」

「文珠を使うッハ、ミレニィ、腰の巾着をピオニィに……」

ピオニィが手渡してくれた巾着には文珠が鈍い光をたたえながら入っていた。

「そこから力を吸い上げれば儀式をしなくてもファウンテンが放てるッハ。そろそろ射程に入るッハよお……」

最後尾の車が見えた。

わたしは言われたとおりトゥインクルロッドを出し、巾着袋を握り締め、「力」を意識する。なるほど文珠にはこういう使い方もあるのか、あっという間にロッドにファウンテンのエネルギーが満たされる。

「よおし、トゥインクル・ファウンテンッ！」

輝く光が後ろの二台をとらえる。

いつもの絶叫が上がると車からまがまがしい気が祓われる。

とたん車からコントロールが失われ、一台は左側のガードレールを突き破り、赤松の立ち並ぶガケ下へと落ち、もう一台がせまい道路をふさぐように動きを止めた。

「ぎゃああああああああっ！」

女の子らしからぬ悲鳴を上げながらミレニィが何発も車に火炎弾を叩き込む。

車は爆発炎上、とはいえ進路上の障害物であることには変わりはない。

「ふんっ！」

と、気合を込め、車の鼻先に「パリッチャ」を生み出す。と、燃えさかるガレキを撒き散らしながら炎の壁を無事に突き抜けることができた。

「ナニやってるッハ！ もう少し考えて敵をしとめるッハ！」

シンハが怒鳴る。

「しょーがないじゃん！ どうしたって前にいるんだもん！」

わたしも怒鳴り返す。

「う、後が危ないなら横付けしたらいいんじゃない……」

「ナイスアイデア！ じゃ、まくるッハ！」

ミレニィの言葉にシンハがアクセルを踏み込んだ。

みるみる前の車との差が縮まる。が、この縮まり方は前方車両も速度を落としている感じだ。

二台のクラシックカーダデーナーが左右両車線をふさぐように並ぶ。

「ぐうっ！ 横付けさせない作戦だッハ……」

クラシックカーダデーナーはときどきブレーキランプを光らせる。追突してはたいへんと、シンハが前のめりになって構える。わたしも幌をつかむ手に力が入る。

「きゃああっ！」

突然右手のほうから衝撃が起こる。見るとどこから現れたのかクラシックカーダデーナーが体当たりをしてきた。

もう一度車体をぶつけようと、車間をとったところにファウンテンを御見舞いする。ダデーナーは絶叫を上げ、車は道路右の側溝にタイヤを取られ、派手にロールする。カーブのせいで見えなくなるが、爆発音が聞こえてきた。

道路右手を確認すると、がけ崩れを防止するためにコンクリートを塗ったくったデコボコしたコブだらけの山肌に、クラシックカーダデーナーがもう一台、車体を波打たせながらこちらに狙いを定めているのが見えた。

即座に文珠からファウンテンのエネルギーをチャージし、今度は体当たりをもらう前にしとめる。とはいえ、

「ミレニイ代わって。この体勢でファウンテンはきつつすぎるよ！」

片手はロッド、もう一方は巾着を握りこみつつ幌。両足ではしたなくも必死に予備タイヤにしがみついたの攻撃役はいくらなんでも扱いがひどすぎる。

「あぁっ、えっと、どうすれば？」

荒々しいシンハの運転に最初の笑顔はどこへやら、ミレニイも顔を引きつらせながら必死にしがみついている状況だ。

「飛んで援護して！ そっちのほう絶対安全よ！」

「そ、そうか……」

ミレニイはシートの上にしゃがみこむと、勢いをつけて飛び上がった。

ようやく開いた座席に這いつくばりながら転がり込む。と、突然真っ黒な排気ガスが目の前に立ちふさがる。

「くっ、まるで煙幕だッハ」

たまらずにスピードを落とすシンハだが、いやな衝撃が左前方から伝わっ、視界が晴れた！車の両脇に赤松の幹。

案の定ガードレールを突き破って……。

落ちるっ！

たまらず目をつむる。

が、逆に浮き上がる感覚！

「ギギギギギギギ……」

振り向くと翼を大きく広げたミレニイが、歯を食いしばりながら予備タイヤを両手でつかんで車を持ち上げている。

空飛ぶ車は谷の上をショートカットして煙幕を撒き散らした車の前に下りる。

飛んでいる間にエネルギーをチャージしたわたしは、振り返りざまファウンテンを浴びせかける。絶叫があがり、二台のクラシックカーはお互いにぶつかって、もつれて、カーブの影に見えなくなった。

今の飛行で疲労困憊のミレニイがふらふらになって、先ほどわたしが座っていたタイヤにまたがり座席後部にぺたんと突っ伏している。ガードレールに突っ込んだ衝撃か、車がガタガタと振動がするようになったため、ミレニイがずり落ちそうになる。わたしは彼女を引っ張り上げ、何とかシートに引き入れる。

「せまいったらないッハ」

「なによ！ こんな車選んだシンハのせいでしょ！ 算数もできないの！」



言い合いをしていると前方から急ブレーキの音と激しい衝突音が聞こえる。顔を上げると黒煙が上がっているのが見える。

「まさか!？」

3つカーブを曲がると残る4台のクラシックカーダデーナーが動きを止めて道をふさいでいた。黒煙はその先のカーブから立ち上っている。

ダデーナーはこちらに気がつく、スピントーンを決めてこちらへと突っ込んできた。

すでにロッドにエネルギーはたまっている。

「ラクシュミー・トゥインクル・ファウンテンッ！」

トゥインクルロッドの先から放たれた光がクラシックカーに取り付いたダデーナーを浄化していく。

が、勢いのついた車は止まらずにこちらへと向かって突っ込んでくる。

「こなくそっ！」

ミレニィがわたしとシンハを抱きかかえて空へと飛び上がる。

一瞬遅れて、ドガッ! ガシャン! と派手な音を立てて車が激突し、もつれ合い、大きな音を立てて爆発する。

爆風をうけてミレニィはよろよろと右手にある山の斜面へと流され、わたしたちはへばりつくように斜面へと降り立った。

振り返って車を見る。パンパンと何かはじけるような音を立てながら黒煙をもうもうと上げて燃えている。

「もうダメ……もう飛べないから……ピオニィ……文珠……文珠ちょうだい……」

ミレニィが文珠を求めて手を出してくる。

わたしが巾着ごと手渡すと、ミレニィはそれを氷嚢のようにおでこに乗せ、大きく息を吸い、そして吐き出した。

「ふう、何とか人心地ついたわ……」

そうやって文珠の入った袋を戻そうと、わたしのほうを向いたミレニィが突然嘔き出した。

「なによピオニィ、顔真っ黒」

「なっ？」

あわてて顔をぬぐう。

「さっきの煙幕？」

「あ〜あシンハまで……いいときに飛んだみたいね、私」

けらけらとおなかを抱えて笑うミレニィに釣られてシンハを見る。シンハは覆面をずり下げて荒い息をついているが、その覆面の境目がくっきりとついているのがおかしくてたまらず、わたしも笑い出す。

笑われたのが気まずく感じたのか、シンハはその姿を元の唐獅子のものへと戻してしまった。

「ねえ知ってる？」

ミレニィが笑いながら燃えさかっている車を指差す。

「クラシックカー十一台、しめてウン千万円」

「ぶふっ」

あまりの値段に嘔出してしまおう。

極度の興奮と緊張から放たれたばかりのせい、頭の中に何か変なのが出てるんだろう、不謹慎だとは思いますがなぜか笑いが止まらない。

「どーすんのお、どーすんのおシンハ？　ぷふっ、なおるの？あれ？」

シンハを引き寄せ、撫で回しながらたずねる。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。形あるものはいつかは滅びる。たまたま今日がその日だけ……ということにしておくッハ……」

4

「あ、そうだ、赤木君」

ひとしきり笑うと本来の目的を思い出した。少し上のカーブ、ひしゃげたガードレールの向こうにはいまだ黒煙が立ち上っている。

「あのくらいでくたばったりしないでしょ。赤木君タフだし」

「……とはいえ赤木がダデーナーだとしたら……今が浄化のチャンスなのかも知れないッハねえ……」

シンハの言葉にわたしもミレニイもつばを飲み込む。

「浄化……しちゃうの？」

ミレニイがたずねる。

「ラクシュミーの本来の目的はぼくの力の源の「文珠」を全部集めることだッハ。赤木がダデーナーだとしたらいつかはそういう日が来るッハ」

「それはわかるけど……」

それはわかる。それはわかるけれど、時には助け合い、ともに戦って、同じ鍋の芋煮を食べて、人工呼吸とはいえあんなことをした彼を……浄化するとしたら……トィンクルファウンテンで、わたしが……

いつしかわたしはじっとロッドを見つめていた。

「……あ、赤木君もあれだけどきシンハ、ほら文珠文珠。ここまでの道でやっつけてきたダデーナーの文珠。あれ拾って帰らないと！岩井戸に回収されちゃったら今までの苦労が水の泡よお……」

ミレニイがわたしの気持ちを察したのかシンハに提案する。

「……そうだッハね。それじゃあ火の勢いも収まってきたようだからまずはあそこの四つつから拾って帰ることにするッハ。ミレニイ、抱っこしておろしてくれッハ」

ミレニイはシンハを抱き上げると斜面を蹴り、ふわりと道路へ降り立った。わたしも続いて斜面から飛び降りる。

火勢は弱まったものの、いまだ黒煙を上げ続けるスクラップの中に、文珠は鈍い光をたたえていた。

シンハが恐る恐るながらも近づいていく。と、目の前で何者かが文珠を無造作に摘み上げてしまった。

黒煙の中から現れた大柄な体。

ススだらけで擦り切れた衣装を身にまとった、それは赤木君だった。

「こいつは俺がいただいていく」

「バカなことをいうなッハ！ それをこちらにわたすッハ！」

シンハが声を荒げる。

「そ、そうよ……文珠なんて、赤木君には必要ないじゃない……だからね、返して、それ」  
わたしはなだめるように声をかける。

すると赤木君は手をすっとわたしに向かって差し伸べた。しかしその手は文珠を握っているのとは別の方だった。

「見てくれこの手を……化け物の手だ……」

警戒しながら目を凝らし、その手を見る。手の皮がはがれているようだが血がにじんでいる様子は無い。妙にささくれ、いや毛羽立って、皮膚や肉とは質感が違うような……

「あの時、青木を助けようと光の玉に触ったところだ。痛みは無いがいつこうに治らない。よくよく見たら紙粘土だ、張りぼてに取り憑いた化け物なんだよ、俺も……」

赤木君が寂しそうにつぶやく。

「化け物なんて……」

薄ぼんやりと心に抱いていた「赤木君がダデーナーというのはシンハのただの思い込み」という希望はもろくも打ち砕かれた。

「いさ、この一月で心の整理はついている。いずれお前に消される時は受け入れよう……」

「そんな……」

赤木君はそういつてうつむく。

「なら、今がそのときだッハ。ピオニィ！」

シンハがトゥインクルファウンテンの準備をするよう促す。とはいえ……

「まあ待ってくれ、心残りがあるんだ……」

わたしがためらっていると、赤木君がシンハに語りだした。

「目の前で、親友を消された。せめてこの手で敵を討ちたい……」

赤木君はシンハを押しとどめるように開いた手のひらを、硬く力強く握り締める。

「岩井戸をなめてはいけないッハ。悪いけど赤木では話にならないッハ」

シンハが正面からにらみつける。

「そう……だから力が……力が必要なんだ」

そういつて赤木君は持っていた文珠を口の中に放り込んだ。

「ピオニィ！ ミレニィ！」

シンハが叫ぶが時すでに遅く、文珠はゴクリと音をたてて赤木君ののどを通り過ぎていった。

「ピオニィ！ ミレニィ！」

シンハが再び叫ぶが、赤木君から放たれる異様な気迫に気おされてわたしたちは動けない。

「がああああああああああああ……」

文珠を飲み込んだ赤木君は突然うなり声を上げ始めた。大きく口を開き、血走った目を見開き、両手は空中にある何かをわしづかみにするようにして、まるで何かに耐えているような様子だ。

「赤木君！ 赤木君！」

大声で呼びかけてみるものの反応は返ってこない。

やおら布の引き裂かれるような音がした。赤木君の服だ。

彼の筋肉という筋肉が、波打ち、膨らみ、ただでさえ大きな赤木君の体が、さらに一回り大きくなった。

「が、ああああ……」

口からよだれを垂れ流しながら見開いていた目をわたしに向ける。

「…力を……もっと力を……」

彼が目を向けたのはわたしに対してじゃない。わたしが持っている文珠の詰まった巾着袋に対してだ。

気がついた瞬間、赤木君が大地を蹴る。

弾丸のような速さでわたしの前に立ちふさがると、巾着袋を持っている方の手に手刀を浴びせる。

たまらずわたしは巾着を取り落とした。

「ピオニィ！取り返すッハ！」

とはいうものの、叩かれた腕がジンジンとしびれて動かせない。

赤木君はゆっくりと巾着に手を伸ばす。

が、手を触れそうになった瞬間巾着が炎に包まれ、中の文珠は散り散りに転がった。

「なんてことするッハ」

「まとめて取られちゃうよりましでしょ！ 拾って！ピオニィ！」

「拾ってって……ンもう！」

わたしと駆け寄ってきたシンハはしゃがみこんで文珠を拾おうとする。

赤木君も文珠を拾おうと腰を落とすが、そうはさせまいと、ミレニィが鼻先に炎を撃ち込む。

「ごおっ！」

赤木君は吠えてミレニィへと肩から体当たりを仕掛ける。が、身軽なミレニィはひらりとそれをかわす。

赤木君はそのままコンクリートでコートされた山の斜面へと激突する。そのコンクリートにひびが入り、ガラガラと崩れ落ちてしまった。

「なんてパワーよ！」

驚いて目を見開くミレニィに向かって赤木君が腕を振るう。

何かはわからないが飛んでかわそうとするミレニィが、

「あぢいっ！」

と声を上げた。

飛び上がりかけの体勢から尻餅をつき、顔を抑えてうずくまるミレニィ。

赤木君が再び何かを握り、今度はこちらへと狙いを定め、腕を振るう。

わたしは大慌てで「パリッチャ」を展開させる。と、一瞬トタン屋根に落ちる夕立のような音と衝撃がわたしを襲った。

音の正体は砂だ。

思い切り投げつけられた砂が鳥撃ち用の散弾銃のようにミレニィやわたしを襲ったのだ。

赤木君が再度腕を振るう。わたしは「パリッチャ」のおかげで身を縮めた。

「ぎゃん！」

と、背後で悲鳴が上がる。狙われたのはシンハだった。

シンハは痛みのために拾った十個ほどの文珠を取り落としてしまう。

その文珠をめがけて赤木君が跳んだ。

赤木君は地面に腕を走らせると、たちまち文珠を拾い上げた。

その動きを目で追うことしかできないわたし。

そのわたしの目の前で、赤木君は文珠をゴクリとどの奥へと流し込んだ。

「あがあああああああああつあああああああああああああ……」

先ほどと同じように悲鳴のような声を上げる赤木君。彼の筋肉が、先ほどよりも激しく、まるで皮膚の下に無数の蛇が這い回っているかのように波打っては肥大化していく。

「があああああああああああああああああああああ……」

赤鬼……

まさに赤鬼がそこにいた。

真っすぐに立ったなら身の丈5メートルを超えるような巨体。しかし肥大化の代償か、痛みがあるのか全身を真っ赤に染めながら、丸太のような二の腕を抱えて苦しそうにひざをついてうずくまっている。

「心と体のバランスが取れていないんだッハ……」

シンハがよろよろとこちらへ近づいてきた。

「力を、力をと求めるあまりに……見るッハ、力を制御できずに暴走をはじめたんだッハ……」

「……」

赤木君の表情がゆがんでいく。

「……ファウンテンで浄化してやるッハ……むしろそれが……赤木のためだッハ……」

涙をボロボロと流しながら肥大化の痛みを耐える赤木君。

「赤木君……ごめん……ごめんね……」

わたしは意を決してロッドを構えると、力を集めるための儀式の踊りを舞う。

体中の気力が丹田に集まり、胸、肩、腕を通りロッドへと集中する。

「気力……充実……」

いつの間にかあふれ出た涙でぼやけて見えるが、大きくなって、かつ動けなくなっている赤木君への狙いははずしようが無い。

「……ラクシュミー……トゥインクル……ファウンテンッ！」

気力をこめたトゥインクルロッドを赤木君めがけて振り下ろす。

「があああああああああああああああああああああ……」

清らかな光を浴びて赤木君が絶叫を上げる。

「あああああああああああああああああああああ……」

痛みのためか、赤木君がこちらへと大きな腕を振り下ろそうとする。が、横から炎の弾が数個飛来し、炸裂し、赤木君はとうとう体を横たえる。

「続けて！ピオニィ！」

ミレニィはそういうと足が崩れるようにへたり込む。が、目だけは力強く赤木君を見据えて

いた。

わたしはミレニィにうなずくと、ロッドを持つ手に力をこめた。

「はああああああああああああああああああああああああああああ.....」

「が、があ、ああああああああああああああああああ.....」

赤木君は何とか起き上がろうと四つん這いになるが、そこから体は動かせない。心なしか先ほどより幾分小さくなったような感じがする。

カターン、カターンと悲鳴に混じって硬いものがぶつかるような音がする。

「文珠が出てきたッハ もう少し、がんばるッハ！」

確かに、音が響くたびに赤木君の体が縮んでいるような気がする。あの音が消えたとき、きっと赤木君という存在も消えてしまうのだ。

「があああああ.....ごおおおおおお.....ぎいいいいいい.....」

悲鳴のトーンが変わった。文珠よ出て行ってくれるな.....赤木君はまるでそうでもいわんばかりに文珠が湧き出る胸を両手で抱く。が、無常にもその手をすり抜けて文珠がまたひとつこぼれ落ちた。

「がおうううう.....ぎいいいいいい.....」

青.....木.....青木.....悲鳴がまるでそう言っているように聞こえる。

気のせいだ！気のせいだ！そう考えるように意識を持っていこうとする中、またひとつ文珠が転がり落ち赤木君の体が最初のサイズに戻る。

「青木い..... 青木い.....」

いつもの姿に戻った赤木君が、空を見上げ涙を流しながら弱弱しく漏らす。  
やっぱり青木って言ってたんだ。

そう理解した瞬間わたしの手からトゥインクルロッドが転がり落ちた。

「どうしてやめるッハ！ あと少しだッハ！」

「.....できないよ！ 赤木君を消しちゃうなんて！ わたしできない！」

シンハが怒りの声を上げるがわたしには無理だ。

「できるときにけりをつけておかないと、また岩井戸の時の二の舞になるッハ」

「でも.....でも優しい心があるんだよ！ 仇を討ちたいっていう熱い気持ちがあるんだよ！ 赤木君のそんな思いを知っちゃったら.....わたし.....わたし浄化なんてできないっ！」

「.....ピオニィ.....」

シンハが眉間にしわを寄せ、かみ締めるようにつぶやいた。

ボ、ボ、ボウ

火の玉が風を切る音がした。

その音に振り返る。

よろよろと立ち上がった赤木君が文珠に手を伸ばそうとしたところにミレニィがけん制したものだ。

赤木君は振り返るとふらつきながらも駆け出し、ガードレールをまたぐとその体をがけの下に躍らせた。

「赤木君！」

わたしは駆け寄ってがけの下を覗き込んだが、赤木君の姿はすでに見えなくなってしまっ

いた。

5

「やっと自販機だ……なんか飲むもの……」

千代ちゃんが商店の自販機に向かって駆け出した。

スポーツドリンクを買って一息で飲み干す。

続けてさらに二本のスポーツドリンクのボタンを押し、

「はい、泣いた分の水分補給しないと」

と、言いながらそのうちの一本をわたしにくれた。

「そんな……」

とは言ったものの、涙は自然とあふれてくる。

「泣くのは泣く、ジャブジャブ泣く。古い歌じゃないけどさ、泣いて泣いて吹っ切るしかないじゃない、こんな失恋はさ……」

「そんな、失恋なんて……そんなんじゃないわ……」

「なんにせよ……情がうつっちゃったってのは……いろいろと切ないッハ」

シンハがわたしを見上げながらつぶやいた。

おそらく自分と岩井戸の関係になぞらえたのだろう、彼の目もまた潤んでいるように見えた。

「でもシンハの文殊を全部集めるには赤木君を浄化させないといけないでしょ」

「そうだッハ。文殊を集めること……それがぼくらの一番の目的だということを忘れてはいけないッハ」

千代ちゃんの問いにシンハが答える。

「たとえ赤木が本懐を遂げた後であっても、いや、赤木が本懐を遂げればこそ……ダデーナーを元の文珠に戻せるのはピオニィのファウンテンだけになってしまうッハ……」

「それって……」

千代ちゃんが言葉を詰まらせる。

わたしは黙って街へと向かって歩き出した。黙って突っ立っているといろいろとつまらないことを考えてしまうような気がした。二人も言葉無く後をついてくる。

沈みゆく夕日がやたらとまぶしかった。

第8話 了

第9話に続く

<http://p.booklog.jp/book/76691/read>

## あとがき

---

えー だいぶたまってまいりましたので1話から8話までの総集編でございます。

よくもまあここまで書けたなと自分でもびっくりしてます。

ご当地ヒーローやご当地戦隊のようにご当地プリキュアをやりたくて書きはじめたこのラクシユミー。お仕事やら、雑事やら様々こなしながらの執筆活動ですので、お待たせして申し訳ありませんがとりあえず13年の春までには何とか仕上げたいなと考えている次第です。

閲覧数が増えますと励みになりますのでぜひお友達等にもご紹介いただきながら応援していただければと思います。



## まほろば天女ラクシュミー 1～8 総集編

<http://p.booklog.jp/book/57534>

ちょこぼーる加藤の本

もっと下ネタを楽しみたいというあなたは

### 第3回世界カンチョー選手権

インターネット動画を媒体として盛り上がりを見せる世界カンチョー選手権がついに日本へ上陸！白熱の準決勝以降の実況をレポートします。もちろんフィクションです！

<http://p.booklog.jp/book/39361/read>

ミリタリー趣味のあなたは

### 戦場はメリークリスマス

クリスマスイブの夜サンダースにたくされた指令とは？

<http://p.booklog.jp/book/62866/read>

まともな話は書けないのか！というあなたは

## まほろば天女ラクシュミー 1～8 総集編

わたし冬咲ぼたん。中学二年生。退屈な田舎町を抜け出すには、勉強して、町の大学に行かなきゃ！って学業の神様「亀岡文殊堂」にお参りに行ったら.....わたしがこの町を守る美少女戦士ラクシュミーに！？

<http://p.booklog.jp/book/57534/read>

### まほろば天女ラクシュミー 9話

文化祭のさなかボタンが迫られる男の子に関する二つの決断。

<http://p.booklog.jp/book/76691/read>

### まほろば天女ラクシュミー 10話 最後の戦い

大晦日の夜、亀岡文殊堂で最終決戦だと気合を入れる千代ちゃん、しかし.....

<http://p.booklog.jp/book/77788/read>

著者：チョコボール加藤

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cbkato7108/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57534>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57534>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ